



Top

今年もまた サイクリング部に
新しい 歴史が加わりました
ここにあつめた 数々のメッセージは
部員みんなが サイクリング部とともに
あるときは トップで

..... and

またあるときは ローで
走りつづけてきた証です

この すばらしい仲間たちと
そして 俺たちの自転車に —— 乾杯!

..... Low

- な、なんと!? 部長?!

- いま明らかされる事件の全貌

- ◆ “富士” タイムトライアル (1年・渡辺秀樹) 79
- ◆ タイムトライアル (1年・金井均) 82
- ◆ ESCA RALLY (1年・花房秀治) 84
- ◆ サイクルサッカーのこと (2年・上原秀秋) 87

★ フリーラン

- ◆ '77 My Cycling Report (3年・宝谷一夫) 90
- ◆ 2つの一人旅 (2年・鈴木道夫) 96
- ◆ 雨の峠越え (2年・小野賢治) 101
- ◆ エピソード フリーラン (1年・高野俊彦) 104
- ◆ 初めてのフリーランとOBラリー (1年・山口晋二) 109

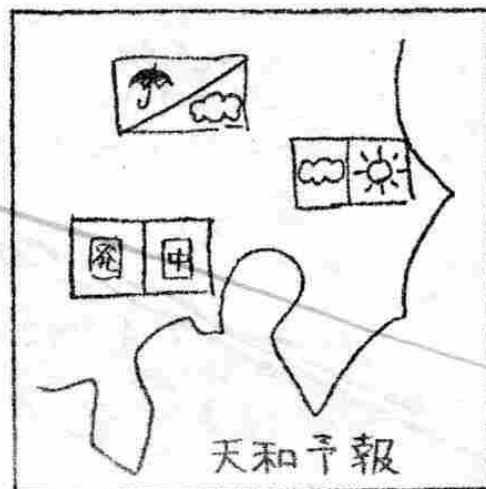


エッセイ

- ◆ 僕のサイクリング (1年・西口正之) 140
- ◆ 「まあーね」 (3年・名取暢) 143
- ◆ あと15分 ---
海に向かってどこまでも (3年・畠田尚) 147
いつまでも走りたい。
- ◆ SO FAR (2年・古木登) 149
- ◆ サイクリング部に一言 (2年・吉田弘行) 152
- ◆ なおしきれない アホンザラと
こわれきれない ヅヨッサワ (2年・大塚隆夫) 155
- ◆ あと。うんたむ (2年・西尾 恭) 158
- ◆ 随想録 ~stray Notes~ (4年・藤口正典) 161
- ◆ 心の中の風景 (4年・野崎 信春) 164
- 編集後記 (書記・鈴木道夫) 167

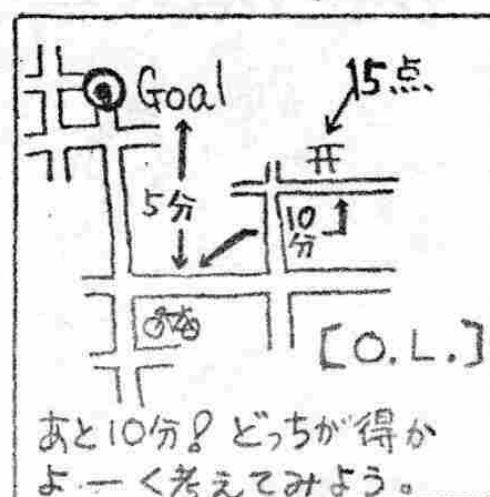
大晦日の夜に雨が降るのは何年ぶりであろうか。ひとりで部屋に籠っていると、いつもの雨降りの日と同じ、あの規則的な雨だれの音が聞こえてくる。階下ではみんなで紅白でも見ているのだろうか、その喧噪はこの部屋までは伝わってこない。大晦日というよりも、ある冬の雨の夜といった感じである。ここ2〜3日、あまりにうるさく「この一年」などという言葉を目にしているの、いまさらこの一年を振り返ろうという気にもなれなかったが、こうして、ひとり部屋に閉じこもって、もう数時間したら聞こえてくるであろう横浜港の船の汽笛を待っていると、せめてサイクリング部のこの一年間ぐらいは振り返ってみようかという気になった。ここに本年の活動報告を兼ねて、サイクリング部の1977年を振り返ってみようと思う。

- ・1月9日：今年も例年通り、麻糬大会で始まる。この賞品が仲々よく、ディレイラー、インフレーター、チェーン等ももらう者も居た。当時部長の富田氏の御好意で、参加者全員に賞がでたと記憶している。しかし、最終半荘で下位リーグにかなりのウマがつき、第三部リーグの西尾氏がオーラスでタテ清一盃口をツモって優勝したの



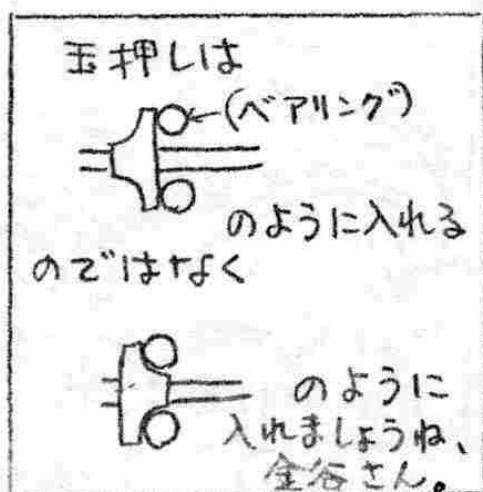
には、上位リーグから不満がでたのも当然であろう。

- 1月16日：これまた恒例行事となったオリエンテーリング。本年は小田急沿線の厚木→鶴巻駅周辺で、3時間にわたる熾烈な戦いが繰広げられた。参加は十余名でちょっと少なかったも、当日カゼでお休みの大塚氏、歯痛でオッコウの西尾氏など、不参加者が多数いる中、学生服とレインコートで参加の鈴木道夫氏、自宅(東大前)から走って参加の三浦氏など、クソ寒い中をリキんで参加した人エライ！優勝は2年の鈴木俊明氏。と思われたが実は点数の集計の時の計算間違いで真の優勝者は1年の曾我部氏であった。鈴木氏又カ喜び。三日天下。ごくろうしゃんの言葉を捧げます。



- 1月29日：追コン：追コンの日まで、あんなに4年生の人がいると思わなかったのは 私一人ではないと思う。

- 2月27・28日：整備合宿：自転車整備のため、部室周辺に集ま



って、工具の正しい使い方、自転車の正しいコワシ方、人の部品、の正しい盗み方などを教わる ありがた〜い日です。麻雀大会やオリエンテーリングで新しい部品をもらった人は、みせびらかしながら取りつけます。

あー、お前らレンタカー
なんかで、軟弱だぞー



あー、おの腹の中
が軟弱なんだよー

・3月：いよいよ春合宿。今日は南紀。
行先については、毎年のようにモメ
るのだが、ローテーション説に従っ
て結局南紀に決まる。例のように4
班に分けて、キャンピング装備で民
宿に泊った。川の水につかって平気

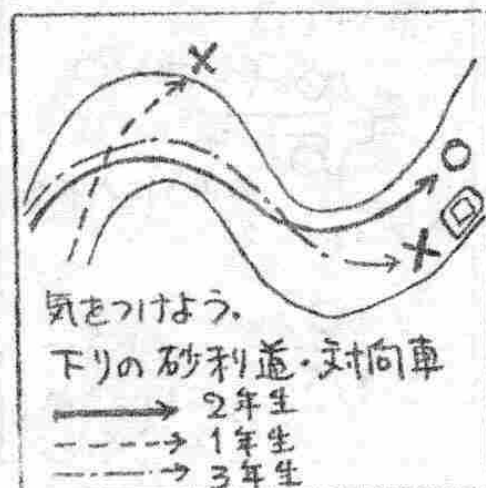
な顔をする人もいれば、川の水を飲んで下痢マンになってオッ
コチする人、そうかと思えば同じ水を飲んだのに、同時にビー
ルを飲んでいたので何ともなかった人など、多種多様の春合宿。
春合宿は3月27日から4月7日まで。集合地は五条であった。

・4月ほとんど5月7日：新歓ラン。今年は13人位一年生が入り、
繁昌々々と思いまや、前代未聞！自転車に乗れない(と思われる)
人が登場。一同、啞然。何かにつけて、個性あふれすぎる一年
生である。最近、部室のギター片手に、歌など歌っている。
一体サイクリング部を何だと思っとなんじゃ。でもまあいいや。
おもしろいから、ユルス。(と言ってしまふところが弱いよね)

・5月22日、29日 サイクルサッカー
春季リーグ。(.....)??

5月26日。新歓ラン：狭山湖マデ
しかし本当によく走る人が居た。

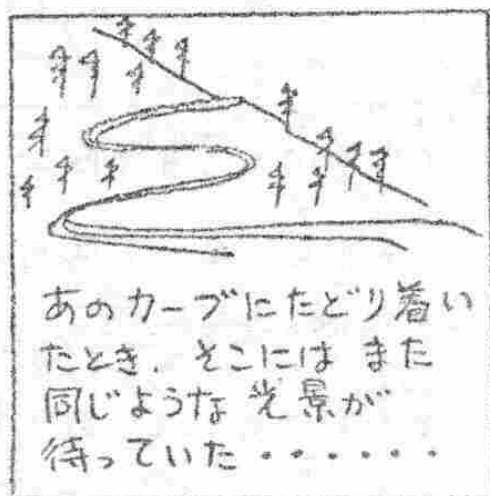
(誰も永見君のこと言ってるんじゃない
ですよ、ホント。)



- ・ 6月16日：クラブ創立記念日
- ・ 6月18日：OB会創立。カー回統会：今年はクラブ創立10周年にあたる。それで現3年生の諸兄が中心になってOB会を創立し、機関紙第1号を発行した。以後、年内に1回、幹事会が開かれ、OBラリーを行なうなど、活動を開始した。さすがOBだけあって、総会やラリーの時の金まわりのいいこと？（---とオダテちゃったりなんかして。僕等がOBになる時のことを考えると --- 恐怖!!）

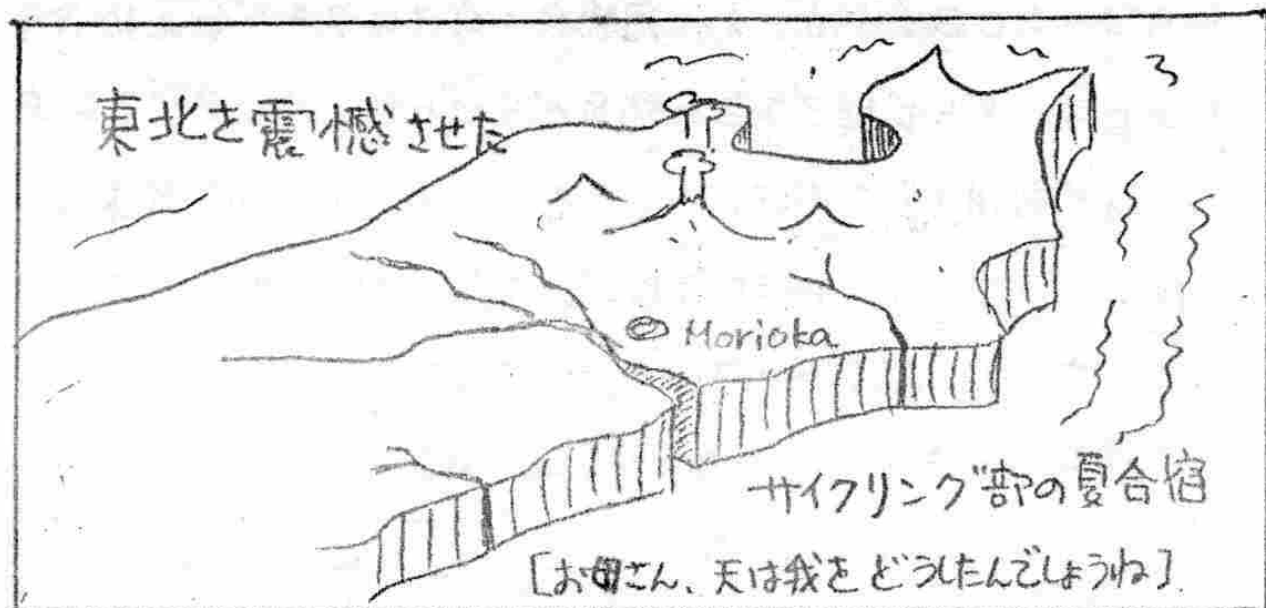
- ・ 7月3日、10日 予備予備ラン：

今年は自転車に乗れなかつたりする人がいるといけないというので、予備合宿の前に、予備予備ランというのを新設、道志溪谷へちょっロツと行ってきた。これで乗れるようになりましたよね。



- ・ 7月13日～16日 予備合宿：中津川林道→三国峠→浅草峠→某野
キャンピング装備にしては ちょいとシビアだったかな。首謀者の私としても面目丸つぶれ。予備合宿は年々シビアになるという定説に従い、来年は どこにしようかなー と地図を見たりして。
- ・ 7月27日ごろ～ 8月11日、夏合宿：今年ほど問題の多かった夏合宿はない。あとで合宿については述べたいと思うけれども、東工大サイクリング部の大行事である夏合宿が、いろいろと問題になるとは、今年のサイクリング部を象徴しているようで、どうもね。

夏合宿は東北。集合地は盛岡であった。



- ・ 8月30日～9月1日 エスカラリー：ひとくちで言って、おかしかった。〇〇大学の騒ぎ方は、東工大サイクリング部に多大なる影響を与えた。以後、OBラリー、工大祭に、その流れは脈々と受けつがれている。要するにバカ騒ぎなのかなんかなん？
- ・ 9月はなくて10月9日 OBラリー：山中湖を一周する前の日に、お酒をのんで深夜まで騒いでいました。一周したあとも、飲んだ人もいました。でも、みんな久しぶりに走って、しんどいような、楽しいような、なつかしいような、複雑な顔をしてらっしゃいました。
- ・ 10月16日、23日：サイクルサッカー 秋期リーグ：実際、サイクルサッカーに関しては、私はあまり顔を出してないし、秋期リーグの成績も知らない。これは反省すべきことで、サイクリング部としてサイクルサッカーをやっている以上、もっと部員（私も含めて）が関心を持ち、選手として参加できないまでも積極的に支援すべきであろう。

・10月22日、23日：富士スバルラインオープンタイムトライアル
今年はず年生の懸案のオープン行事、オープンタイムトライアルが行われ、にぎにぎしく外部の方々の参加（学生だけでなく社会人の方々も）が得られ、小規模ながら盛大にとりおこなわれた。この時の出場者からクラブ宛に手紙がとどいているので2〜3紹介しよう。（応募総数3通）

▶(前略) 30秒毎にスタートしたことは交通の便を考えれば正解だったと思います。また、参加者全員の力を知らなかったということも後から考えればレースを楽しくしたことかもしれません。レースにおいては4合目の手前とゴール手前、この2つには参りました。結局インナーは使わずに走りましたけれども、この2ヶ所にはインナーに入れるのも忘れたほどでした（後略）

〔 深田 宙司さん 〕

▶(前略) HILL CLIMBのT.T.は 登りばかりの単調なコースではありますが、自分の登坂力の基準となるべきものなので、これを知っておくことは我々サイクリストにとって大変有意義であると思われます。当日は天気が良かったので景色がきれいな上暖かく、申し分ないコンディションでした。(中略)
しかしながらランドナーで舗装路を走るのとは何かもったいない感じがするので、今度は軽量化したロードレーサーで記録に挑戦したいと思います。舗装路のみのサイクリングはロードレーサーで、未舗装又は山道を含むときはランドナーで、というふう

に考えているので…… (後略)

〔馬替 一郎 さん = 優勝〕

▶ (前略) 私の場合、サイクリングを始めてから約一年半、私は、ただ山の中を走るのが好きで、タイムトライアルなどというものは一度も出場したことがないので、完走さえできないと思っていたが、なんとか 2時間12分2秒という時間で完走できた。目標が2時間半だっただけにうれしい。登っている時はただひたすらペダルを踏んでいただけで、いつ一合目を過ぎたのかわからない。一言で言えば「かなりきつかった」登っている途中、ヒザが痛みだし、もう押しの一手しかないのかな? と思ったが、そこをがまんの手であつたのでノンストップで登れたが、いまだ、ヒザが治らない。クセになったようだ(?) ゴール前なんか、もかいたつもりだが、全々ゴールが近づかない。やっとの思いでゴール! ゴールしても、実感はわいてこなかった。実際、「もう着いたのか」と思ったくらいだ。

(後略) 〔戸塚 英明 さん〕

今回のスバルライン タイムトライアルは初めてのオープン行事、仲々好評で、特に、五合目でたべた おしるこがうまかったという声が多く聞かれました。

- ・10月29日、30日：工大祭参加：例年通り店を開き、又、今年は下下、の 8ミリを上映しました。収益は例年通り2万円弱。いかに良心的に商売しているかわかる。

・11月は結局何もせず金もなく12月17日CM会議も金もなくCM会議の忘年会にも出なかったので特記すべきことなし。

・12月18日：サイクルサッカー新人戦：Best 8まで勝ち残ったのは浦島・安井選手。万オタタ（マンザイではないヨ）

しかし コーチの話では Best 4までは行く予定だったとのこと。

・12月24日：忘年会：大御所＝堀先輩

を招いて、♪朝まで一ふざけようー

ワンマンショーでー あ～あ～あ～あ～

…… なることをやりました。¥3,000-

サイクルサッカーをやっている人々が来なかったのが悔やまれます。

○忘年会出場者○

三田研二、ピンクレディー

石川さゆり、ちあきなおみ

イルカ、ジャイアント馬場

天皇陛下、田中角栄



甲乙丙丁白登中
出沒！
SHOOT BOTT

以上で本年のTITCCの公式行事は終わりました。この他に、個人でフリーラン（プライベートランと言うのがエスカでは大勢である）に行きたい人は行っていることは言うまでもありません。5月の連休や夏の合宿前中後、試験休み、工大祭明け等、好き者はよく金が続くもので、もっと好きな人は金もないのに行ったりして、サツマのカミをやって…… なーんちゃって。でも今年は金がかかったな。

CHERUBIM

ロードレーサー、

自転車、

キャンピング車

サイクルサッカー車

03-421-4374

月曜定休

サイクルセンター

エノモト

丁愛亭私氏 ゆく年くる年 【オニ部】

1978 への展望

天下 平作の古木 登

三が日に雪が降るのは何年ぶりであろうか。夜半からの雪がこ
んなに積もってしまうとは。雪は一時的にはあるが 地上の醜
いものを覆い隠してしまう。この雪がとけてしまう前に、仕事を
終えたいと思う。

①合宿について。

わがクラブの一番の行事は春・夏の合宿である。合宿には部員全
員が参加するのが建前である。一年生はクラブの合宿を習得する
ため、二年生以上は後輩にクラブのやり方を伝えるために、参加
する必要がある。それは、クラブの存在を維持するための目的で
ある。もちろん、合宿は、サイクリングを楽しむためのものでは
あることに変わりはない。だが、数名の人間が長期間一緒に過ごす時、
そこに何らかの秩序があって当然である。その秩序となるものが
サイクリング部としての「やり方」である。サイクリングの合宿で
は、予備合宿を除けば、一班の人数はせいぜい4~8人程度で、
それほど厳格な秩序を必要としない。各班の構成員の個性によ
って、班の雰囲気ができあがる。それがその班の「やり方」で
あり、秩序である。誰がリーダーシップをとり、誰がその班
に参加しているかで、班の「やり方」が決まる。だから班の「やり方」
は合宿1回毎に全て異なったものになる。それがサイクリング部

の「やり方」である。したがって合宿を続けていくためには、より多くの個性を必要とする。部員が何回も合宿を経るにつれ、どんな合宿が自分は一番良かったか、楽しかったかを考え、次の合宿はこんな風にしよう等と決めて、上級生になるに従って下のみんなに楽しませてやろうと考えるのが妥当である。

しかし現実には、合宿に参加しない部員も少なくない。不参加者にはそれなりにちゃんとした理由があり、それは認めざるを得ない。それにも増して、サイクリング部の基本姿勢として、何事も強要しないということがあり、「合宿に行きたくない」というのも認めなければならない。そういったこともあって、合宿に参加する者が年々減っているのは残念なことだ。また、合宿の経験も1回しただけで、こんなものかと思いこんでしまう者がいるのも残念なことだ。

部員が合宿に対しどのような感想をもつかは自由だし、合宿に参加しないというのも認める。ただ、個人として合宿を考えるだけでなく、クラブという見地から合宿を考えてもらいたく、あえて駄文を連ねた次第である。

②予備合宿について。

一年生の為に設けられた予備合宿もクラブ行事として定着した。予備合宿の特徴はⅠ. 大人数で Ⅱ. 短期間 Ⅲ. 重装備で Ⅳ. 変化に富んだコースを走る ことにある。特に、大人数(12人前後)がキャンプするのは予備合宿の重要な意義である。

③ サイクルサッカーについて。

サイクルサッカーはサイクリング部の活動として行なっているが練習時間の都合や自転車の台数制限等で、多くの部員が参加することはなく、また費用などの点で サイクルサッカーの選手がツーリングに出られないという事態もおこる。だが、これは無理もない事で、サイクルサッカーにおける問題点はむしろ、ツーリング部員の、サッカーに対する無関心である。部員全体が、もっとサッカーを応援するようでありたいものだ。

④ 平常活動について。

現在行なわれているトレーニングは自由参加である。クラブの方針としての「強要はしない」ことからきている。冬になると参加者は減少し、トレーナーもやりがいがないで困るだろうが、トレーニングの方法として、もっとサイクリング部らしい事ができないだろうか。サイクリング部の平常活動は 大抵、サイクリングとは直接関係ないものになってしまうが、普段から自転車によく馴染んでいれば もっとサイクリングを楽しめると思うのだが。

平常活動について もうひとつ注意したい事は、麻雀である。部室に雀卓があるのは、部員の親睦のためであって、金を儲ける為のものではない。別に雀卓でなくても、碁でも将棋でもいいのである。それを、麻雀をするだけのために部室に来る部員がいるが、そういう事は外でやってもらいたい。部室は サイクリング部のものである。サイクリングの好きな連中の集う所である。

⑤ 対外活動について.

本来なら、エスカに積極的に参加し、対外的な行事も数多く行ない、部員が、マンガを読みふけったり麻雀をしたりする暇もない程忙しくなるのが、クラブのまとまりをつける上で、望ましいことである。しかしわがクラブは、それができるほど、積極的な人間が多くはないし、自分のサイクリングを楽しむ域で止まっているので、多くは望めないだろう。だが、他校のサイクリスト、あるいは社会人サイクリストとつきあう事は、決して損にはならないはずである。だから、78年も、オープン行事を行なったり、エスカに積極的に参加しようという方向で活動をしたいものである。また、OB会の方面でも 今年はいろいろとお手伝いをして、OB会の充実を願いたいものだし、OB会との親睦も深めたいものだ。

⑥ 安全対策.

幸い、わが部ではこれまで重大な事故は起っていない。しかし起っていないからこそ、起る確率は高いとも言える。安全対策については できるだけ具体的な方法を講じたいと思うが、何とんでも 個人の^{早く} 自覚が大切である。自己を過信したばかりに 取り返しのつかぬ事態を招き、仲間にも迷惑をかけるようなことのないようにしたい。

----- 以上で '78 への展望を終る。部員各位の検討を期待する ----- どうやら雪がとけてきたようだ -----

『オリエンテーリング』

曾我部成一

「オリエンテーリング」という言葉、今では誰でも知っているだろう。そう、コンパスと地図を手にチェックポイントを求めて野山を歩き回り、その時間を競うものだ。ところで「この間、サイクルオリエンテーリングをやった」と友人に言っていると「へえ、自転車でオリエンテーリングなんてやるの?」と必ず返ってくる。かく言う私もTITCCに入るまで知らなかったのだが……

まあとにかく、今年(昭和51年)1月16日、TITCCOLが神奈川県厚木市周辺で大々的(?)に行なわれたのである。参加者は次の通り。小島(4)、栗原(2)、沢木(2)、鈴木(2)、富田(2)、名取(2)、小野(1)、小島(1)、鈴木(1)、曾我部(1)、古木(1)、三浦(1)《五十音順、敬称略》

◎第一幕、新宿駅にて……「あれ、鈴木、何じゃその格好は。ワシャ、どっかの高校生かと思ったゾ!」と名取さん。そう、「茨木のり子」のイメージよりしくあの鈴木君は異なり、高校生が学制服の上から着るコートをもとっていたのだ。この出立で輪行車をついでいる姿を想像してみよ。全く、個性がにじみ出ているとしか言いようが無い。

◎第二幕、厚木駅前……自転車を組み立て出走を待つ。藤沢に住んでいながら「大塚」という山手線の駅名を携った人がカゼをひいて来ないと



いう。私は順番を繰り上げてもらい彼の所へ入り込んだ。9:57スタート。まず、配点50点のお寺へ向かう。お、と、ここでTITCCLの内容について少し触れておこう。まず、スタート30分前にチェックポイントを自分の地形図に赤ボールペンで書き込む。同時に問題及び解答用紙をもらう。それぞれのチェックポイントにより配点は5い50とまちまち。ゴールは指定されており、制限時間は2時間。どこをどう回るのは各自の自由。スタートまでに線密かつ適当(?)にコースを決める。得点の多い人が勝つ事はない。1分遅刻する毎に-3点となる。

◎第三幕、東奔西走-----最初の寺は50点の最高点だけに中々わかりにくい。時計を見ると早や30分経過している。「面倒臭い、ここで曲がるう」と持ち前の「投げやり」な性格が早くも出現。ところがこれが見事的中! 無事解答を書き込む。次のチェックポイントに向かって走り出すと、後ろから「オノヘ」という鈴木先輩の声。「ドヘシテ? ドヘシテ俺が小野ナノ? オセヘ!」と思いつつも後ろを振り向き、手を振り愛想を振りまいた。以後、ゴールの鶴巻温泉駅の位置を考えつつコースを辿った。人間の考える事なんて大差ない。これから先は、小島さん、沢木さん、富田さんとはほとんど行動を共にした。(と言っても、私は少々遅れ気味に付いていった。前の人達がポイントを見つけてくれるので大助かり) その事に気付いたのか「俺が呼び止めなかったら、常務部は知らないで通り過ぎていたんだゾ」とは沢木さんの

声。(ああ、こー言さえ言わなければ良い先輩なのにねい←
陰ッ声) 喘止の地蔵というポイントでハアニング。目にゴミが
入ってしまい御先真暗、ハードコンタクトレンズの弱味をつかれ
てしまった。近くに水道は無いし、10分近く涙水ロロ流して立
ち往生。そろそろ焦りを感じ始めた。伊勢原の学校のマークを書
き終えた時残り時間25分。「もう30点かせいでやるう」と神社に
向かう。この神社、幅50cm位の狭い道を10m位入った所に有った。
それにしても、郵便局の積算電カ計の番号やら神社の右段の教や
ら、我々をひっかけようという魂胆が至る所に見られる。問
題を作った人の人柄が偲ばれるようだ。(尚、問題を作ったのは
野崎さんと宝谷さん) 「さあ、後は鶴巻温泉駅までひとっ走り
だ」とばかりに地図を覗き込めと……アレイ?! 道が無いヨ。
直線の道があるとばかり思っていた所は一面の田ンボ、鶴巻温泉
駅に行くには伊勢原市内を通り、小田急線を一度またがねばなら
ない事に気付き唖然! 残り時間10分で5kmはキツイ。以後は
タイムトライアルに変貌、田の畔道を走りマッドガードとタイヤ
の間に泥をつめたり、変なエ場に迷い込んだりしながらも必死で
走った。しかし……天は我を見捨てた。10分遅れで-30点。何
の為に最後の神社に行ったかわからなくなってしまった。おまけ
に「お前、オリエンテーリングで時間オーバーするなんて最低だ
ヨ」と富田さんに言われてしまい増々意気消沈。しかし、逆に考
えると他の人達より10分間も早く走った、ということになるでは

ないか。そう思ったか否かは知らないが、古木だけは「カンバッタナハ」と言ってくれた。

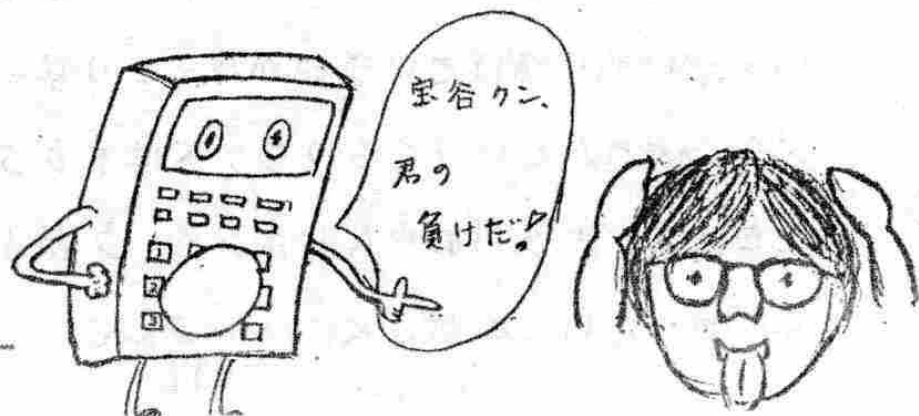
◎第四幕、成績発表………スーブ・御菓子を争って食べ、落ち着いたところで成績発表。「第一位、鈴木クン。第二位、曾我部クイン、以下略……」と言う訳で私は鈴木先輩に次いで一位、賞品はグリス2個。「なんだ、この間買、たばかりなのに」と私が言うと「グリスは消耗品だから残っ持、てた、て良いノダ！」と沢木さん。その癖、沢木さんの賞品であるセーフティライトと取り替えて欲しいと言、ても、全然相手にしてくれなかった。

何にしても、好天に恵まれ楽しい一日だった。

◎第五幕、奇跡の大逆転→電卓は神様です………翌17日、宝谷さんの計算間違い判明。私と鈴木さんは同点だったのだ。しかしタイムオーバーしている私は二位のすま、残念！

ここで終わりと思、た諸君、まだ先があるんダヨ！ その又翌日の18日、又々計算ミス判明。何と、私が一位なのたえうな。

「ヘエー、えうなの」と、まるで人ごとのような感じ。一位の賞品であるインフレーターを手にしても、別に感激の涙にむせぶこともなかった。「今や、電卓は生活必需品になりつつある」というのがOLで得た結論。



大杉谷(金谷, 沢木, 名取, 小野, 古木, 佐藤) 佐藤

3日目の朝, ついに降りつづいていた雨も止み, 宮川ダム三杉旅館に足止めをくらっていた私たちが, 主要目的の大杉谷へ向かうことが決った。中年の夫人が1人で経営する旅館は, 私たち6人だけが泊っているだけで, それも半分雨にいられていたもので, 陰気なものでした。旅に出てきて, 1日中ふとんの中で, 2人でやるというのがあったるいものでした。ち目並べと将棋です。夜は, 階級闘争が続きました。そんな私たち全員が, 大杉谷へ向かえないのは残念でした。1人大杉谷と反対方向へ, 振り向きもせず, さみしそうにペダルを踏む先輩の後姿が, 大杉谷へ向かう5人とは, 対照的でした。

登電所に自転車も乗り置いて, 登山口へ来たころには, もう暑いと思うくらいのいい天気です。川の中の石も1つ1つ数えることができるほど澄み, この暖かさに冬眠から出てきたばかりのへびも, まだ登山する人が少ないと思っていたのに, 若いええ男が5人も山を荒らしたあたりを迷惑に思ったにちがいない。雨あがりの山の緑というのは, 更にあざやかです。写真にも, 緑のあざやかさに負けじと, 春のまだ決して強いとはいえない太陽が, せいっぱい光り輝いているのがはっきり写っています。道は, 巾が50cmあるかというくらいで, 下は木もろくに生えられないがけで足をはずしたら川の中へドボンという所もありました。それで, まだやりたいことが多くにはあるんです。「私たちは, この場所

で、京工大学生佐藤君を、(不)運にも失いました。字らかに眠って
ください」、なんてことにはなるまいと思いましたが、決して、決
して1人では。少なくとも1人は道づれを心に宣いました。道
の途中には、足もと注意と書いてあり、足もとを注意していくと
必然的に、頭上に横から生えている木にぶつかるんです。

その日の宿泊予定地である桃の木小屋では、歯の抜けたこの苦
響の中でいかにして生きてきたかを物語るような顔をした老婆と、
ぬこが出迎えてくれました。登ってくる時、すれ違った唯一の老
人と、2人で生活しているらしい。ここしばらく、まあ女らしり
女には出会っていなかったが、私たちが着いて長時間くだいて
明らかに老婆の声ではない女の声がした時には、屋根からふとん
の中へ入っていた私たち全員が起き上がりました。その2人づれの
女姓が、旅行かばんを持って登ってきたのには少々びっくりしま
した。この山小屋は、まだ夏の準備ができていなくて、電気もな
く、夕食のおかずもかんづめだけでした。夕食のあと、すぐ風呂
へ入りました。まっ暗いおみじの枯れ葉の浮いている風呂へ2人
で入りました。東京にはないものです。そのあと再び登ってきた
らしい老人が、ぼくらが出る時持ってきた口ウソフのかすかに詠
れる中で、2人の女姓の白いむりっとした裸体が触れあい、せ
げんにまみれた2人の体がつれるのを想像するともらっときま
した。そこには、女姓2人の他に、大阪の小学校の教員が1人泊
りました。

次の朝は、前の晩老婆が言っていたように快晴だったのは、長年の経験と感心しました。私たちが朝食をしていました。ぼくは、窓ぎわに席っていました。そこからは、L字型になっている小屋の寝室が見え、なななんと、カーテンの横にカーテンの色とは異った色の何かが見えるんです。そうです、カーテンからはみ出したオレンジ色の模様の入ったパジャマなんです。食事は何も食べたか、よくわかりませんでした。みんなには、じっくり楽しんでから教えてあげました。大台ヶ原へは、偶然(?)に、その2人といっしょに行くことになりました。でも私には、不満でした。私は、前から2番目で、男のけつしか見えず、男のけつなんか見ても恥ずかおもしろくない。でも、先輩に、しりが見たいので後ろにしてくださいとも言えず、あれで大杉谷のよさが減りました。大台ヶ原の途中にある日出ヶ岳の山頂に近づくにつれて、雪が多い所で40cmくらいあり、シャクナゲの弱々しい枝がそこから首を出しているのなんかそっちのけで、後3人行きたかった。ガサガサという音、一瞬足が止まり、次の瞬間しかが雪の上を走っているのが目に入りました。ここでは、春はもう少し先のようです。日出ヶ岳の山頂は、日本一の多雨地帯で雨量計が三重県と、奈良県の2つ設置しており、四方見渡せるんですが視界はあまりよくありません。写真を撮ったんですが、いいんでしょうか。とるな、するな、みんなの大台と書いてあったのに。日出ヶ谷で昼食後、大台ヶ原の山荘へは雪の道30分ほどであった。

あめのち はれ …春合宿大杉谷組…

沢木 至 記

…プロローグ…

昼過ぎに降っていた雨は完全にやんだが、さすがに空は厚く雲に覆われ、星の姿は見えない。冷たい春の夜風に乘って吉野川のせせらぎが聞こえてくる。川沿りの一軒の民宿の裏手に5台の自転車が長蛇を繰え、ポンチョやシートをかぶり眠りについていた。

…第1章 決心 …

狂木劣(Kuruki Otoru)は、横須賀線のシートに座りながらまだはっきりと決心できないうちに自分と向き合い、悩んでいた。大体後は留年の責任の半分はクラブにあると考えていた。毎日毎日、部室で麻雀をし、遊んどばかりいて進級できる程には彼は要領のいい人間ではなかったのだ。そしてそんな時に、やれ合宿だの、それ大杉谷だのと楽しそうに、はしゃいでる先輩の花谷寛(Hanaya Ken)や、継木光(Nawaki Hikaru)らの態度が気にさわれた。しかし彼は現実にはこうして既に集合場所の東京駅に向かっている。後へは戻れなかった。東京駅に着き、雨が降り終えてから、鞆行袋をかつぎ、その重量を右肩に感じながら彼はようやく決心した。居直ることにした。

東京駅の階段を自転車をかついで、狂木は約束の9番線へと向かって歩き出した。居直ってみたところ、前途多難だなあと感じながら狂木の足どりは重かった。

またきょうも雨だった。もう2日もここに缶詰めだった。食堂で天気予報を見る。あすは晴れそーだなどと話しながら、布団を敷きっぱなしの部屋に寝り、このところの日課となつてくる階級闘争を始める。

また、加藤長介(Katō Chōsuke)が景気良く上がった。「チエツ! まったくかない収えや。」と狂木は叫ぶ。まったく加藤のパワーには、体格は横綱級の蚊取米(Katori Kōru)も歯が立たない。一方、対称的に無口な豊野連治(Mono Renji)は、ずっとガムを音をたててかみながらも真実な表情である。

彼ら、狂木・花谷・細木・加藤・蚊取・豊野ら6人は丁工大のサイクリング部員である。昭和52年の春合宿でここ三重県多気郡宮川村大杉へ来ていた。

合宿が始まって5日目。狂木も心のわだかまりの事は半分忘れて、だんだん従来の明るさを取り戻していった。時々フツと“うんこれぞいいんだ!”と思う事もあれば、“本当に、こんなぞいいんだろうか?”と思ったりもした。確かに、こんなぞいいんだろうか?

…第3章 おばあちゃん…

「毎日、ここぞ何をして暮らしているんですか?」と狂木が尋ねてみた。実際、たいしてすることはないと思えた。しかし、おばあちゃんも顔をほころばせながら言った。

「なあに、これどもする仕事はたくさんあつてなあいい」

このおばあちゃんは、大杉峡谷の中間にある桃の木小屋を管理していたが、電気もなく電話もないこの山小屋で楽しそうに、そしてとても元気に暮らしていた。彼らには理解できない存在なのかもしれない。



「きょうもあしたもあさつても良い天気だよ。このラジオの天気予報は、はずれた事がないんじゃないか…」と笑いながら、彼らが出発するのをずっと見送ってくれたっけ。

…第4章 勝ち気 …

女のふ2人は岡山から来たと言った。数少ない彼女たちの言葉を総合してみても、ほとんどわからぬことばかりだった。でも狂木たちは、彼女らのその純朴さに魅かれていた。全く山歩きとは無縁の装備で、スポーツバッグを背中にしよって無言で歩く彼女らはさすがに男の足にはついていくのは辛かったが、「休みたい」とはひと言も漏らさなかった。勝ち気どして女だった。狂木たちも、彼女らを必要以上にがまれなかった、ただ花谷を除いて。

…第5章 ただ感激 …

大台ヶ原の雪道を歩き、木々の下を通り、岩を登りようやく大蛇窟(Daijagura)の上に立った時、狂木は思わず我を忘れていた。「フッ—!!」と叫びたい衝動にかられた。素晴らしい。これを見ただけで春合宿に来たかいがあったと単純に思った。

自然の大きさに、その偉大な抱擁力の前に、狂木芳は自分の今までの悩みの卑小さを恥じた。桃の木のおばあちゃん生き方がわかった様な気がした。

花谷は、ひとりではしやりで2人の女の子の面にはさまって写真を撮ったり、何が話しては喜んでいた。でも今の狂木は、その姿が目障りには感じなかった。ただ苦笑いして見ていた。

…第6章 桜…

まさに満開だった。久しぶりにこうやって満開の桜を目にしていた。なんか、とても晴れ晴れとした気分がペダルをこいだ。でも、しだいに見物客の多さと傍若無人さに腹を立て始めた。とにかく、長年住みなれた家に帰る様なつもりで美杉旅館の前まで来て彼らは驚いた。店では全く見知らぬ女の子が2人忙しそうに働いていたのだ。

彼女たちもまた、田舎の素朴な娘たちであった。「お店が忙しい時期だけバイトしてるの。」と話してくれた方の、おさげ髷の良く似合う娘は、本当に素直なかわいい娘だったけど、例によって花谷が口を出し始めるとちよっぴり警戒心を抱いたのか、無口になった。もうひとりの娘は、まったく最初から彼らを相手にしていなかった。当然、からかわれたのは彼女の方だった。

でも翌朝、曇かった太杉をいよいよ去る時、彼女たちは最後の最後まで、完全に彼らが見えなくなままでずっと手を振り続けていたっけ。

狂木は心地良くパダルを踏み考えていた。大杉谷は良い所だった。良い人達とめぐり会えた。旅って、こんな具合にその土地の人々と触れ合ってゆくことなのかな。

…第7章 夜 …

ボンカレーの夕食は簡単でいい。食事が終わるとさっさと火が始まる。火の事となると鶴木は必死である。そして酒を飲む事となると、狂木は心が踊った。確かに、酒を飲みながら語り合うのは気分がいい。特に、こうやって野外で「テ」に火を燃やし、それを囲んで語るのは。

「リアカーなき村、どうせ借りるとするもくれない馬力。」などと加藤が自慢気に教養をひけらかし始めた。全く訳のわからない連中ばかりだった。こうやって話し始めると、とどまる所を知らずに話したがる鶴木や花谷や加藤。それに比べ、何やら黙っている喪野みたいな奴もいる。「でも、うん、こうやって話してる。これでいいんだ。うん！」と狂木は感じてた。

確かに自転車には、あまり乗らなかったがもしれない。でも、これだっこのサイクリング部の合宿だぞーと言いたかった。合宿に来て良かった。こんな楽しい思いは何年ぶりだろう？ 狂木は酒の酔いの中でぼんやりと考えていた。

…第8章 豪華版 …

「最後の最後まで型破りな合宿だなあ。だいたい、こんな布団にこんなにフカフカの布団の上に寝るのは俺たちくらいなものだ」

ろうな。”と他の班の連中の事を思うと思わず笑いが込み上げてきてしまう。

最後の晩の宿泊地として彼らが選んだ民宿は、麻雀完備、居間30畳、寝室18畳の合計48畳という超豪華版であった。この48畳を彼ら5人で占領し、ビールを飲み、腹いっぱい食い、麻雀をやりとして、このフカフカの布団。全く彼らに不満のあろう筈がなかった。

狂木は今ひとりでジックリと思い返していった。今思うとあの参加するかどうか迷ってイジイジしていた頃の自分が信じられなかった。大杉谷、大台ヶ原の大自然、そして桃の木のおばあちゃん、出会った4人の女の子達、キャンプでの語り、峠を登っていた自分、いろんな事を思い出すと、本当に良い合宿だったと思う。この合宿に感謝すると同時に、なんかもうやめられそうにな리ななどと思った。

…エピローグ…

ようやく18日間が寝静まった頃、ここ東京のとある下宿屋の6畳間のせんべい布団の上で、大杉谷へ行かずに帰京していた蚊取米がいた。「あしたは春合宿の集合の日が。あいつら何処にいるんだろうなあ。それにしても気分が悪いなあ。畜生!! 俺の今年の春合宿はなんだ! こいや駄目だチャンチャコリン」

終わり

宿終わりまでもつかない」と心配しつつ、朝食をとり、〇〇して、
9時、ユースを出る。走り出して10分もすると、もう前を走る3
人は見えなくなった。「いたいな。やっぱりきのうよりいたいよ
う。」しかし、そこは、ど根性の栗原君。一人、ひざの痛みと戦
いながら、懸命にペダルを踏むのである。(OH、なんと感動
的なのでしょ。う。)

But、足のいたみは増すばかり、なんとか古座峠をこえたが
その先は、足にま、たく力がはいらない。さうかい、古座峠
から先は、目的地の古座までず、と下りだ、たので、押し進みと
いうま、たくみじめな目には合わずにすんだ。

次の日、私は一人輪行して3人と別れ、帰宅の途につくのでし
た。

そこで、最後の一言

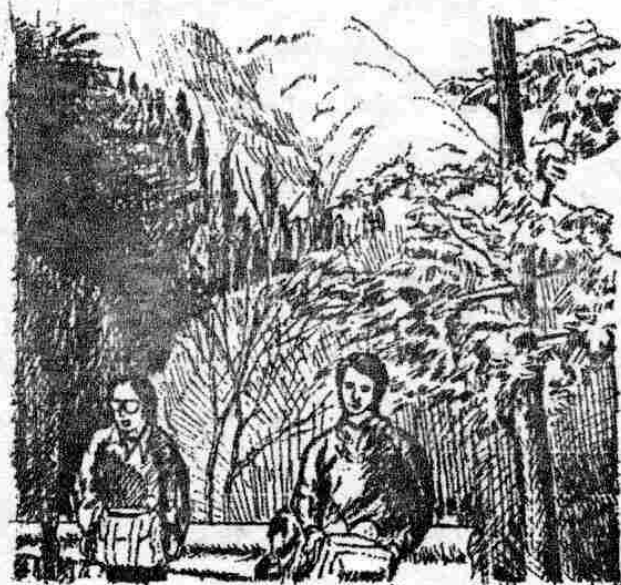
ちょっと待て

そのギアー比で

いいのかな

おもしギア比は

ひざにどくぞよ



川上から大台ヶ原、へのよりにて

恐怖! 一回生のみ合宿のたたり
〜 11977年春合宿レポート

第一話 殺人^{きんじん}的^{てい}酔^い払^{はら}電車^{でんしゃ}



どうも間違いは始めから起っていたようだ。あの悪夢のよ
うな大垣行普通電車^{おおくえさていしや}……。東京駅を出る時までは多少満員の気配
はあったが、土日の中央線の急行と思えば屁の河童ってなもんだ
ったんだが、新橋なんかに止まるのが諸悪の根源ってえもんよ。
終電間^さ近^きかの新橋駅とくりゃあもうゴキゲンなおじさん達が乗っ
てくるのは見えみえのみえこちゅん。よう来るよ、この満員電車
に。ドアが開いてみ。雪崩^{なだか}込んで来らね。「おっ、たいへんだ、原子
爆弾があるぞ〜。」ってなこと言うよな。おー。上等だよな。
そいつはよー。けっ。輪行袋^{りんぎょうふく}っつーんだぜ。てな具合に言えばい
いけど、「お、何だ何だ。」「自転車だ。」「競輪選手^{けいりんせんしゅ}が乗ってやが
るんだ。」「だいたいこんなもん乗せるから混雑^{こんさつ}んだ。」「けしから
ん、いったい国鉄は……。」「てな事言っ来れりゃあもう極地^{ごくち}って
えもんで、ついでに同類の酔^い払^{はら}のおじさんが品川で電車を遅
らしてくれりゃあもう車内の雰囲気は新幹線並のスピードで下っ
てかあね。西尾タヌキ寝入り。三浦、大塚ともにヤバイという感
じ。熱海を過ぎると通勤人はいなくなるので動ける程度に空³く。
そこでデッキへ行ってみると原子爆弾の閃光が走った。ピカッ。
ズズズーム。な、な、なんと、なんとそこにあった西尾の輪行の
輪行袋からは、西尾の自転車がそのタイヤを露出しているではな

いか。なる程、かの酔払氏が中を言い当てたのも当然。と納得しちやったりなんがすると、先古屋へ電車は到いちやったりなんがする。

普通の輪行袋三つと、必死にゴムロープでしばられ不自然な姿でかつがれた輪行袋一つが、三月二十六日早朝近鉄の古屋へ向っていったとさ。

第二話 げりのもと 川の水

我々4人、高見峠、伯母峰峠とキャンピング

グ装備のちょっとだるい自転車でひょいと越えてしまったので、疑がゆるんだと言われてしまえば、彼方を向いて煙草に火を付けるまでのことよ。ひょいひょいと出走三日目にして、今回初のテント生活とな。たのは良かったが、春といっても山中の大台ヶ原のお膝元のこと、夜の冷え込みはキビシーくて、シュラフを通して寒気団がイビりに来るのでよく寝れないというよりは、持ってるものを全部着ても寒いというシビマな現実の圧迫が苦しいからといって着ている物を脱ぐわけにはいかないことぐらい大台ヶ原のきょ人でも知っていることなのだ。それとは対照的に、日中はさすが南紀と言わせ人ばかりにポカポカする。下りっ放しても、体が暖まれば、気持ちゆるむし、減数分裂で細胞を製造している身内の皮もゆるむ。(今笑った中で中学生以下の方はあとで職員室まで来るように。) ああのだがかわいたな一と思ったときにきれいな川が流れているのを見れば、一休みしたくなるのは人情って



もんじゃないですが。手を入れれば冷たくて気持ちがいい。ちょっと飲んでみようか。うん飲むぞ。ところがど、こい上流では運命の神様が立ちジョーンをしていたとはつゆ知らずの4人組であった。鬼ヶ城など見物してYHへ向うと天気もおがくしなって来てキャンプしないでラッキーだと思ったりしたが、YHで三浦と面尾がおがしくなった。どうも風邪らしいといろのだが。そういえばこの二人、夕食のときからおがしくて食欲がなかったのだ。大塚と俺はだいじ。ぶなのにと考えれば確かあのときは俺たちだけビールを飲んだんだ。運というのは恐ろしい。などと薬を買いに行きながら考えたりしたものでした。そのころ雲の上では、さっきの運命の神様が再びオジョコをしました。下界では数日の間雨が降りました。

第三話 ^{ぼすりんこう}雨天順延

朝になると面尾は薬も効いたのか元気になったけれど三浦はいぜんとして弱々さ

く。大塚は「コマッチャタネー」を連発。外は雨が降っているしYHは団体さんがくるとかで連泊不可能という。弱り目にたどり目とはこのことである。大塚と俺はとりあえずリーチできた新宮のYHまで行ってから(むしろ雨の中を自転車で)新宮でレンタカーをかりて三浦を移動させることにした。やっとのことでトヨタレンタリースを見つけたが、免許取得三ヶ月以内はダメとあ



さり断られてしまった。大塚と俺は駅までもどり輪行で三浦の自転車を微動させることにした。西尾は走って新宮へ行くことになった。YHのペアレントさんのおすすめてバスで行くことにした。輪行料金はふみ列してしまった。YHの窓から熊野川が見える。日は夜まで降り続いていった。夕方過ぎには三浦も回復した。他の班の事などが頭に浮んだ。おもえばたたりのじゅうたん爆撃を受けたような二日間であった。たたりの神さまはどうもいねむりを始めたようで、天長も回復へむかっていた。

第四話 中略

太地→古座峡→潮岬→那智、俺→瀬戸丁と天気もよく、金谷さん達の班と古座峡で、又那智、俺と新宮市内では岡田さんやMの人たちの班と出あったりした。しつて言えば大塚がスポーリを折ったぐらいのものだった。瀬戸丁でMの堀さんらが帰ると言うことで岡田さんが俺が班と合流した。ここで種を明かすと、テントは古座峡で使ったきり串本(潮岬)で送り返してしまったのです。何と。(くわしくはシーシボを見よ。)

第五話 ^{おおたはどこへいったの}大塚独走

十津川はV字に切り立った深い谷である。合宿も残すところあと二日。熊野本宮から五采へ向う国道168号線を本宮から入り、入った所で大塚が突然のダッシュをした。大塚は腹の具合が悪いと言っていたので、おおたどこかで大がくさいをしているのであろうと思ったが、いつまでたってもいいないのである。さて

用足ししている間におい越した方と思い待たがやって来ない。
果して大塚はどこへ行ったのだろうか。前を走っているのか、そ
れとも後か。道も狭いし谷も深いので一時は事故説、死に説とい
る出る出たが、とにかくわからんと言、て50km程度本宮から
入ってしまった。風屋ダムの所で俺は、はるか下に見える道を通
らないか見ていた。西尾はその日に停まるYHまで、もしかする
といるかもしれないと大塚を探しに行った。かなり先に見える所
なので先にはまさないと考えたら、西尾が大塚をめ、けて帰
て来た。何と！大塚は50km近い距離を一人でぼちぎ、て走
っていたのだ。しかし一人で二時間以上も走ったのだ。

第五章 最後の事故

五柴へあと少しという所で運命の神様は目がさめてしまっ
たようである。雨が降ってきた。全量そろってガウ峠のサミット
のトンネルへ向う。トンネルを出ると雨はひどかった。俺は先頭
をぎって狭いワインディングロードを下り始めた。しばらく雨の
中のコーナリングを楽しんでいると、カローラバンに追いついて
しまった。コーナをカローラが回ってから俺もコーナへつ、止む
と次の直線部分でカローラのブレーキランプがついた。俺ははっ
と思いブレーキをかけ、方向転換へはみ出した。すると方向は大
型トラッキンがある。すねちがいた。俺はカバイと思って手にカを
入れる。フルブレーキング。しかしカローラの後^テが近づいてくる。
減速率がいやい。やばい。俺はガードレールとバウインドするよう

に強えたが、止まらない。だめだ。次の一瞬、僕はガードレールとカローラの間にっ、入んだ。ボスっといって止った。トラックが有ってしまいカローラは下りていった。俺も「マズったな。」と思いがろ下り始めると手がな人がぬるぬるしている。よく見ると出血している。止っているとき田氏らが下りて来た。スピードとは恐いもので、左うちの中、薬指が切れて血が出ている。治療してもらってから、五条へ向った。

帰路
帰路



打ち上げが終った次の日は、国鉄が急行以上の全列車をストっていた。たたりの神様はしぶとく我々につきまとったようであった。俺らは近鉄と各号乗り継ぎで帰ることになった。ほんとうに最始から最後までたたらまていた。

◎おわりに、

一年生のおというのはやはりきついというが、不可能というが、求して勤められるものではない。YH中心となったが、深い意味での名宿になるなかつたのはよくなが、たようにも思われる。非常時も考えて上級生と班を組むのがやはり良い。酒も深い話も出ぬまま終った床敗だらけの名宿も、そうおもいででしかないのは、どうしようもない事実ではあるが、これを読んだ人がりしても有意義なサイクリ



ングとすることを望みつつ筆を置きます。 S52年12月2日

新 歓 ラ ン

by Satoru
Nagami

だいたい、半年もたつてから、書けと言われても、すっかり忘れてしまっているのだからこの事については、簡単に話をすませることにします。入部して間もないある日曜日に、先輩につれられて、狭山湖へ行った。まあ、ただそれだけのことなのです。

私がドロップハンドルには、全然さあ、左側のない人間だと言う事を考えて以下の文を読んでもいい。(もちろん運動神経がニブイのも認めます。) まず最初の出発事は中原街道で起りました。

信号が黄色になつたので止まりました。止まったら、良いけど、車道側へ、コテンと倒れてしまつたのです。以下、新歓ランで起つた出来事の大半が、私が原因であつた事を認めるの事については終わります。

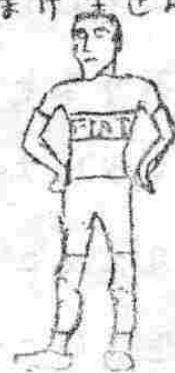
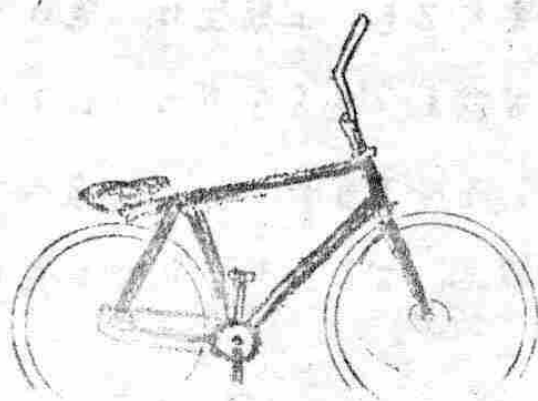
さて、話は変わりますが、合宿において、当部の部員は、ガキとなります。言うほどなつたガキでなくとも飢えた鬼の方であります。とにかく、食ひ物に関しては、弱肉強食で、先輩も後輩もありません。しかし、何と云つても、上級生は、強いのです。いかに大量の、メシを少量のおかずで食うかについては一年の及ぶところでは、ありません。そんなわけでみんな食ひなければ生きているのだといふ、恐怖観念におそわれ、たがひたす食ひ

まくるのです。そして、合宿が終ると5kgもふよっているのです。これは、由々しき事態であります。大学へ入って、たがでさえ運動量が増える所へも、ついで、トレーニングは週二回しかないのです。このままでは、たいして良しもたないプロポーションが、二十前に中年ぶとりになってしまう。しかも、大食いがたたり、胃拡張症みたいなので多少の事では、はるがふくらむないので減量にはさうさうの覚悟がいります。かくして、人にもよりますが、当部の部員は、合宿が終ると原と、たと言つては、責任のなすり合いをするのです。

新入生の私が、クラブに期待した二つのある物は、かたえられ、あるものはありませんでした。でも人はたくさんいます。

総じて、みんな、それぞれいろんな意味でアホであります。私自身も、何かとドジなアホもいれば、チンポの話をきかせれば何時間でもしゃべっているアホもおります。全体的に見てあまり程度は高くなりアホばかりですが全員のそろえれば不可能はないと信じるほど知識欲はあつていいです。

ＴＥＴＣＣのマークを見たら一つ、からが、て見て下さい。すぐ本性を表わしておもしろいですね。アホくらべならまけません。

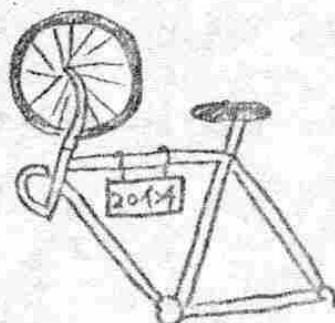
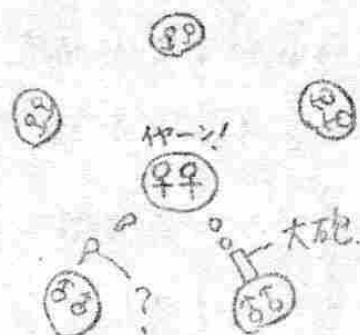


予備予備フリーラン 1年 小川武史

前日に初めて輪行して、初めてのサイクリングにやや希待して部室に集合した。いよいよ旅の始まりである。……が……輪行した自転車とはなんと重いのだろう。部室から大岡山駅までに何度も休みながら行った。古木さんがチャリンコをヒョイッノと持、てスタスタと行、てしまうのを見て、「スゴイ力持ちだノ怪物ジャー、タタリジャーノ!」と思、た。中央線、富士急行線を通、て富士吉田に着いた。修学旅行で行、た富士急ハイランドのジェットコースターなとかが見えて、なつかしいなーと思いながら駅前広場で自転車の組み立てが始ま、た。回りに興味あり気なハナタレのガキが集ま、て来た。……これが悪夢の始まりである事など知る由もなかつ、た。……無心で前輪をとり付けた。ヘッド小物の順番を慎重に確かめてから、ハンドルを付けようとしたが……ハテ……ハンドルのあるべき所に車輪がドーンとあるではないか。ガキ達が、「この自転車おかしいネ!」と言、て向こ、うへ行、た。そして皆んが次々と来てバカにして行、た。クリーゼ、かく組んだのに……!この時、この失敗について先輩である名取さんは、感無量であ、たのではないだろうか。とにかく、奥に、マコト=はすかしく、悔しいてき事であ、た。

程なく我が班は山中湖へ向、て走り始めた。山中湖では、昼食をとり、その後ボートに乗、た。ペダルをクルクル回して進ん

行くボートであつたので全く疲れた。ところでこの時女にイタズラをしてしまつた。いや誤解してはいけません。下図の様に女の子もとり囲んで、囲むのを楽しんでいただけです。

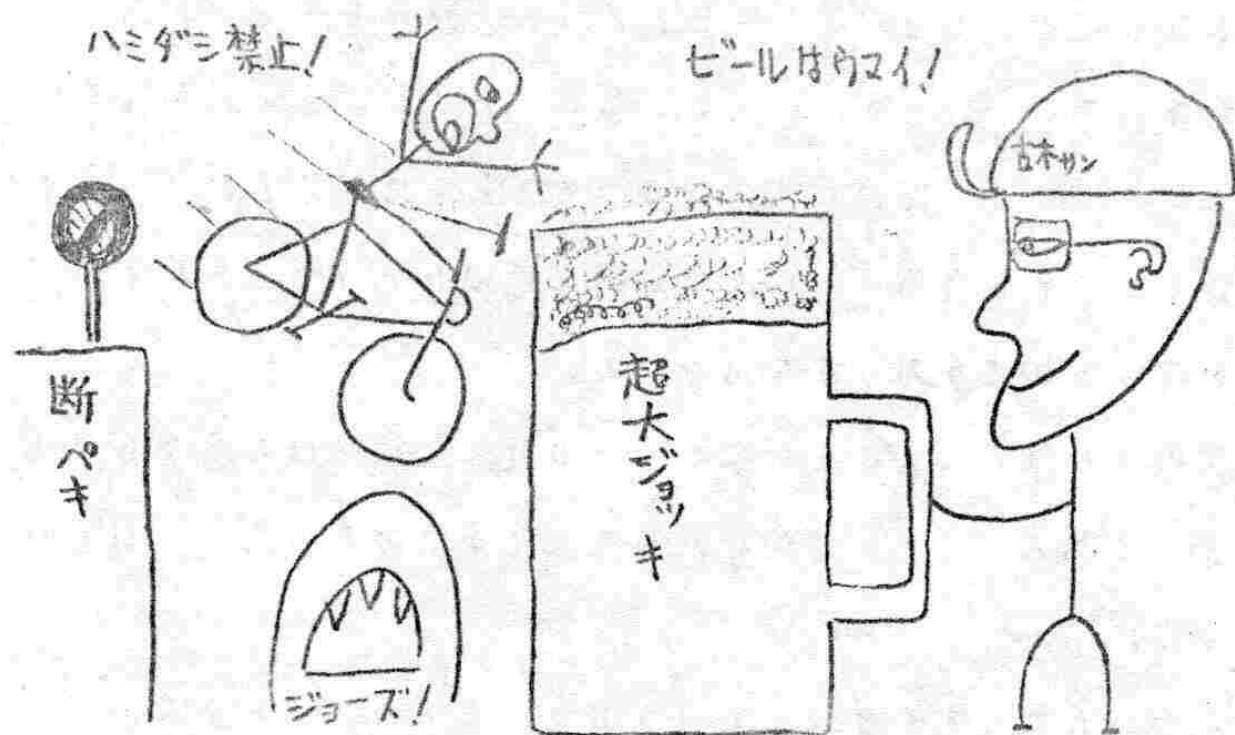


か
ー
ン
!!

疲れ切つて走り始めた。次におおまきは、初の登り坂ノ皆んながインナーにギヤチェンジしようとした。しかし、ギヤチェンジのまずまず調整不良のため一年生の半分以上はインナーに落ちせないうま置つた。中でも鈴木の銀ビカチャリンコは、イモ・シマノ600では、どうしてもインナーに落ちず、この後ドックインとなつてしまつたのである。峠からトンネルをぬり少し下ると今度は山の中のアップダウンノ「高知がなつかしい!」中でも、未舗装の下りには参つた。穴の間を必死でくぐつた。危がたかつたらしい。視界が開け舗装の下りになつた時二度目の悪夢が起つてしまつた。古木センがトップでカーブに突入ノ鈴木が俺の前でブレーキングノ(その時心の中で俺自心がサーキットの狼になつていた。)俺は一瞬ブレーキングもがまんしてカーブ直前で鈴木をぬいた。次の瞬間サーキットの狼は、サーキットの犬になつた。犬は犬でも負け犬だ。スゴイカーブであつたのだ。あわててブレーキノノノ!

しかし、チャリンコは、外へ外へ！……ダメだ！と思った時左側の
未舗装が見えた。しかたなく、そこへ飛び出しタイヤを横スベリ
にロックさせて転倒はまぬがれた。下りのカーブの恐ろしさを味
わった。この事は、ツーリング記録本「小川はみ出し」と書かれ
てしま、た。

ナンナカンノと言いなながら橋本に着いて再び輪行した。近くに
あ、た「鈴木レコード店」が「センチメンタル・カーニバル」を
何十回もかけ続けた。どうせならアグネス・チャンの曲にしてほ
しかった。このため以後輪行のため「センチメンタル・カーニ
バル」が月でガンガンなっている。ビールで乾杯して、無事フリ
ーランを終えた。色々トラブルが多が、たけど、いろいろとめ
んどう見てくれた先輩オに感謝しています。



予備々々ラン (後発) 安井孝男

輪行で富士吉田まで行くことになって、いた。電車の中は夏にしては寒く長袖、下にも長いものがほしいぐらいだ、た。

富士吉田駅に着き輪行を解いていると佐藤さんが「ドロヨケを忘れたの」と言い出した。「ロードみたいじゃないか。」と言われてみんなが笑った。ドロヨケの後半分がないというのは、こうおもしろい恰好だ、た。

自転車を組み上げ、食料を買ってこいで出発した。しばらく行くと山口がどこかがタガタいうところなので見るとドロヨケのかくしネジがぬるんでいた。それを直して山中湖を目指して走った。道はだらだらの登りだった。しなはれが伸び栗原さんが遅れ出した。そして山中湖に着くと栗原さんの姿はなくなっていた。

しばらく待ったがいっこうに来ない。「誰か見てこいよ。」という言葉に「や、ぱりこういうことはロードだね。」と言われて栗原さん捜しに出発したのです。来た道を2kmばかりもどり、道を間違えたかも知れないと山中湖町と標識に出ている方に1kmほど行ってみたがみつからなかった。

栗原さんなら大丈夫ということを出発。先発隊はここでボートに乗って遊んだらしいが後発隊はそんな子供みたいなことはしなかった。

湖畔の大家食堂(ま、たは人によっていないような店)で

昼食を取り、水を補給して出発。

山中湖と別れる道のとこで先頭のほうで止まったのだった。
たのかなと見れば「なつかしい」栗原さんがそこにはいたのでした。

全員そろって峠へ走りだしたのでした。上りはたいしたこと
はなかったのですがいそぐこともなかったの。後3のほうで登って
行、たのです。

峠はトンネルでした。バスが登、て来たので休む間もなく坂を
下り出したのです。「こんな細い道じゃバスなんか抜けないしバ
スの後ろで廃気がスス吸、てるなんてつまらん。」と小島さんが言
ったのでした。上りでは遅が、た栗原さんが下りでは速いこと速
いこと。ロードでも追いつくのにかなりかか、てしまったの。ま
途中センターラインをオーバーして車にぶつかりかけた者やガー
ドレールと仲よくなりかけた者もいたけれどみんな無事に下に着
いて店でジュースを飲んだりした。

次は地道の上り。ここは少し前に降、た雨のため少しぬかまん
でいて自転車が少々よごれたけれどもまあまあいい道でした。ここ
で永見が転んだのです。ボクは目撃していいのでくわしい状況
はわからないけれども花房が「オオそう言や永見はまた転んどら
ん。」と言、たところ永見が「もう転ばんワ。」と言、た直後は
転んでしまったということです。地道はある程度クレーブラーに
とっては苦しいのですがな.人とかバンクもせず走りぬきました。

この道ももうすぐ舗装されるようでちょくちょく舗装しており又

工事をしている所もあつた。

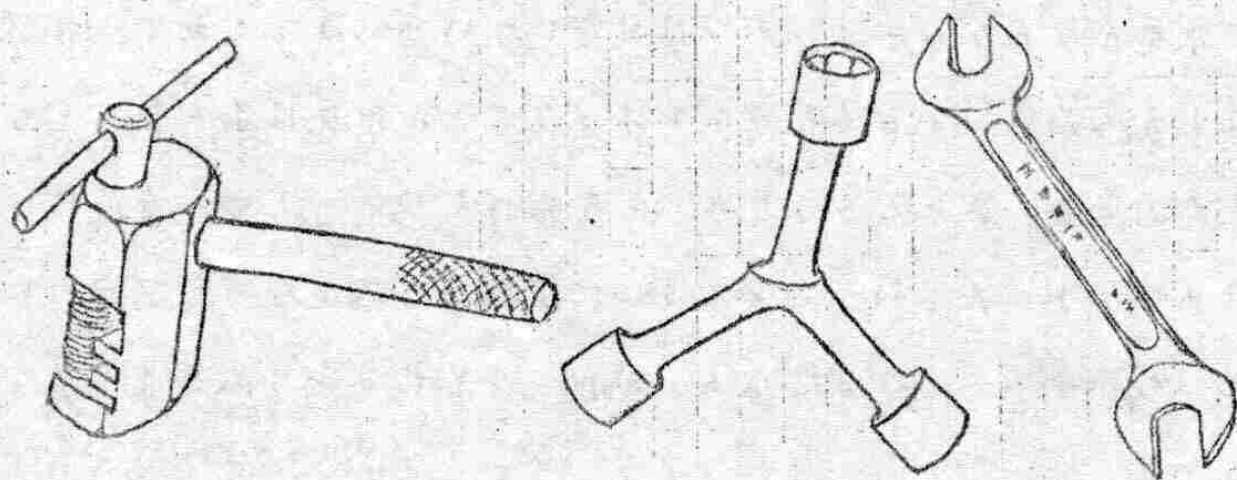
県境の橋の上で写真をとり神奈川県に入りそのあとはほとんどバラバラになつて走りどこかで集まり又バラバラになつて走るという走り方になつた。

平野に近づくとも山のすそを走る形になり長くゆるり下りが続いた。その道は景色がよかった。ここもほぼ個人々々で走る形になった。坂の終りに集合したがまた誰か走りなかつた。誰だっただかは覚えていない。又ロードで捜しに行かなければいけないんじゃないかという声が出だしたころや、とその人達が到着した。何でもバンクしたとか。

これまでは山中湖周辺の他は車が少なかつたがしだいに車の量が増えてきた。人造湖のあたりまで来ると渋滞していた。自転車は車の間をぬつて走つた。そしてや、と目的の駅に着いた。

駅の前にはバカの一つ覚えのように「流のエンドバッド」ばかりかいてあるレコード店があつた。そこで輪行して帰つた。

天気もよかつたしケガをした者もなかつたのでよかった。



予備合宿

1年 鈴木真人

7月13日の朝というか未明、部室に集まり、た予備合宿前夜班は
AM5:02の目黒線の始発に乗り込んだ。みんな寝不足でもう
フラフラで大岡山までいくのがや、とという様子でとても三国山
までいける状態ではなかった。

眠い目をこすりながらや、とのことば三峰口についた。三峰口
で買い物をしないと三国山に登りはじめたら他に買う所がないと
いうミジメな話を聞いていたためにそこで夕食の買いだしをした
さあ、いよいよ出発である。天気は上々、雨の心配もなく軽い気
持ちでペダルをふんでいた。中双里で昼食をとることにした。
川に降りて顔を洗った。水が冷たくてとってもいい気持ちだ。下
宿している人々の昼食はというと、前日部室で、大塚さん佐藤さ
ん花岸さんと私が作、たところの味の保障もない、多分食べられ
ると思わぬおにぎり。実際食べることができた。もし
食べられなかったら三国山の途中でダウニングしていたかもしれない
中津川に沿って走るのはまだ勾配が緩やかである。なのに、中津川
とサヨナラしたとたん急にきつくなる。ときどき中津川林道にはい
っていった私たちは寝不足からの疲れがど、とどきした。もうあと
はだめだった。足が思うように動いてくれない。押して登るしか
方法がなかった。そんななかでもトップを行くのが大塚さん。カ
のみぞグイグイと登っていくのだ。その後から小野さん、佐藤さ

ん鈴木さん小柳さん花房くんと私が自転車に乗ったり降りて押し
たりしながら読んでいた。大きく遅れて高野くん高橋くん金井
くん西口くん 途中で私が下から登ってきた自転車に遅れてくる
彼らについて聞いたところ、相当下のオゴ道の上に大の家になっ
ていたというからとともすぐには来そうもなかった。その後私は
花房くんと共に押し登ったのだが、山腹に迫っていく道
はくねくねと登っていきまじかまだかといやにやっってくるくらい
だ。だが目の前に山頂を切りたった三峰峠が見えた時はもう
うれしくてたまらなかった。峠に着いた時、その峠を吹きぬける
突風が凄いと一瞬のうちに吹き飛ばしてくいたようであった。峠
からみた下界の美しさはすばらしい。さうであった。ちと近くな
る。ただろうか。あたりは暗くなりかけてきたころ。全員が峠に登
りついた。峠を吹きぬける風は強く寒い。このこそ峠なんだとい
うか。時代劇にぞも出てきそうさ峠であった。私にと、これはサイ
アリニガを通しとの初めての峠だけに心に残るものはずし、と重
みがあった。海拔1745m、三峰口からは標高差があまりない
かもしれないが、よく押し登ったものだと思う。

記念撮影をすませるといよいよ下りだ。登ってくる時とはうらは
らに向こう側はどんよりと雲がたかこめている。下っていく途中
ではハプニガが脱出した。ハプニフの太さ売りなのだ。私がハプ
ニフしたかと思うと上のオゴは佐藤さんが、下では高橋くん高野く

ん西口くんがパニフをしているのではないか。パニフ修理を終えて下まで降りてみると名取さんが遅い遅いといって待っていた。名取さんと計画通り合流できたものの時間が時間である。あたりはまっ暗になっという。ここからテントをばって食事を作るなど困難はわかっているがそうするしかしかたがないためにバッテリーライトでの作業を始めることにした。テントをばっていると重大なミスが明らかになった。ポールを一つだけ忘れてきたのだ。応急処置として適当な枝で代用したもの誰がこのテントで寝るかという何だか問題がのこされた。なんとか夕食(カレーライス)を済ませビールで乾杯といきたいところだが、夕食を腹いっぱい食べたためにビールのはいる余地がない。だがそこは根性、ビールを必ず飲んだ。とにかく寝不足で出てきたものだから今日一日流した疲れたの一言ではなく連発であった。空を見上げると矢ほどの雲がなくなっで空一面星がいっぱいだ。まるで童話の世界に出てくるような空だ。山に四オモかこまれている空だけが浮き上がっているみたいで今まで見た空とは一風変わったところかなり魅せられたようであった。

鳥のさえずりを聞きながら起床である。朝日がさんさんと輝きすがすがしい朝だ。川の澄たい水で顔を洗うと身のふきしめる思いだ。今日は麦草峠の頂上までの予定である。はたして無事に麦草峠まで行けるかどうか。

出発しとすもなくまたまたパニフである。高野くくが前日のパニフの時にリムフランプがちぎれとしまつたためにリムフランプなしで走っていた。そのためじり道にはいった途端にパニフしたのであった。その次には小柳さんのパニフである。これもなかなかめんどくさいことになつた。たしかく（著者はこのことに関知していなかった）自転車屋を探して直してもらつた。その後千曲川を横切り小海線に沿つて海の方へ出ようとするところど不幸にも小柳さんが下りのコーナーで転倒してトウクリップがはずれをりたためにけがをしてしまった。村役場を診てもらつたところ競走は無理だということと騎行して帰ることになつた。事故で一人損ねてしまふなんて悲しいことである。みくまの顔が心もち暗くなった気がする。とにかく昼食を済ませ身もと直して出発することにした。いよいよ妻草峠へのチャレニジである。R.16を北上して八千穂村まで来た。大石川の橋のところまできく名取さんや大塚さんがどこぞを折していかを協議していたがもう少し先だろうといつて走つた。数キロいつたところで地元の人に聞いたとなんと来すぎた。どこまでいけばよいのかと思つた。さきほどの橋のところまでいってしまった。ここで最初から曲がればよかったのだ。ショックだったと同時に涙がドーンとどてきた。今日はあまり走らなかつたけれども、いろいろ守ることがありもう日が落ちかけといふことも妻草峠まで行ける時間などなか

ったのがキャニオン地を探ることにした。1000m地帯まで行ったところぐらいの大石村で、断工場の庭を借りることにした。さっそくテントを張、2食事の仕度をしていると、スーパー・カーがや、2来た。実はスーパーマーケットの出張販売の車をのどある。スーパー・カーに乗り込んですいか、トマトなどを買、てすあみしだ、みしだ、この日のみしは昨日のあやただし、たのとは逆に余裕をもって食べることができたのだ。じっくり味わうことができた。夕食後、みんなが相談しているとホテルがちらほらと飛んできた。子供心にかえったようにホテルを追いかける。あたりを見回すと山には木がみい茂、そして闇の中で月の光をまびて不気味に輝やいてゐる。中原中也の詩にどそきそうな情景があると思、た。

蚊に悩まされ、熟睡があまりできなかった。だがすがすがしい朝だ。テントをはい出して見たらび、くり、昨夜汚れたままにしておいた食器がきれいにな、てゐる。どがなめていったらしい。これから麦草峠まで上りのみ、を協は許されない。私は1200mぐらいまで登、たところど足が急に軽くな、てきた。よし今のうちに登ゆるだけ登ろうと思、てぐいぐいと登、ていった。登りはマイペースでいくのが最もよいと言われたので私は行けるところまで行、てみようとしていた。麦草峠は1000mごとに標識があ、てそこを見ながらいくとなぜか疲れない。日ざしが強く汗が

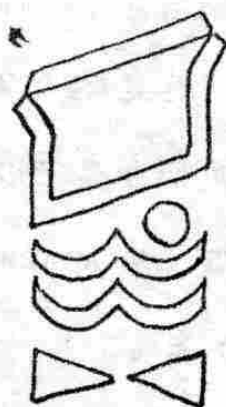
したり落ちてきたが気にせずにバザルをふんでいった。と行くうちに麦草峠に着いたのだが、あっという間に着いてしまったような気がした。麦草峠は峠といっても三国峠とはまったく違い、見はらしはよくないがまた三国峠とは別な魅力を秘めているように思われた。こゝも多分自分の力で登ってきたからであろうか。2185mという標高は登る者にとっても魅力ではないだろうか。峠だけあってさすがに涼しいというか寒いくらいだ。なぜか三国峠の時のようにまた曇ってしまった。雨が降ってきた。急いぞ下らなければならぬ。とにかく下りは寒いので防寒具に身をかたみいで出発。

麦草の下りはヘアピンが多い。佐藤さんがすごいスピードで私の横を通り抜けていった。速いなと思っっているうちに見えなくなってしまった。私は時々ブレーキを踏むから慎重に降りていった。と突然佐藤さんの自転車が見えたかと思うと前輪がぐにゃと曲がっている。ヘアピンカーブでセンターラインの上にのりすべって左側のガロップにぶつかっただけか。けがはたいしたことなかったが、自転車の方がどうにもしかたがない感じ。他の連中を待ったところなかなか来ない。もしや重大事故っているのではないかと心配していたところ、案の上、金井が転倒してヘッドスライディングをするし、西口はガードレールと接触していた。金井くんのオはみじなどにかすり傷を負っていた。西口くんはうい

ニブレーカーが破損していた。名取さんなどが、佐藤さんのリムをえんだりけったり？しているうちになんとか走れる状態になったのであと茅野までの数十キロを急ぐことになった。あと数十キロというところどついに雨が降り出してしまった。空を見上げてもそう簡単にはやみそうもない。しかたなく走りつづけることにした。金井くんは雨が傷にしみて痛そうであった。

ともかくも茅野駅に着いた。雨の中での輪行である。育中に雨が降りてきて冷たかった。

このツーリニブは名前の通り合宿を前提する予備的なものである。私たちの班はいろいろなことが起こり、なかには不幸なこともあったがみんな楽しく過ごせたと思えた。また地元の人々には1日目に店づくりをさわけていただいたし、2日目には近所の人からうめぼしを差し入れてくれた。サイクリニブを通して地元の人々にふれあえることができたことがとてもうれしかった。そして私は三國峠、麦草峠を登り、この二峠が好きになってしまった。あの登り終えた後の満足感がなんとも言えるいのである。



Mister
Donut

予 備 合 宿

通 鳥 恭 司

出発前夜、私が調子の悪いペダルをグリスアップして、自転車を輪行袋に入れ終えたのは、12時半ごろだったと思う。翌日やけに早起きした。蚊にさされて眠れなかったせりであるう眠くてたまらなかった。重い自転車を担いで電車に乗った。池袋から三峰口まで、早朝の冷気を覚しながら、け、こう眠ったみたいだった。三峰口の駅に着くと富井部たちが一足早く来て待っていた。走り出す前に駅前で記念撮影。

川沿いを上流に向って走り始めた。私の自転車はどうも調子悪くチェーンがよく歯抜けした。そのため、急激な力を加えると、異様な音が主になるので、まったくリズムが崩れた。川を上り、中津川林道の入口に着いた。これからより狭い谷へと入るのである。私は、富井部、古木と共にここを上ったことがあるが、たいていコースは覚えていた。直ぐ川から離れると道路状態も悪く坂が急になる。私の自転車のチェーンは、毎と割れたらしく歯抜けしなくなった。どういえば渡戸の自転車がデイレーターを巻き込んだのが林道に入る前だった。道路が川を離れる所で一休總。山口が体の調子を乱したらしく、全員が揃うまで20ぐらいつつたと思う。そこで谷川の冷たい水を飲んだ。谷川の水を飲むのは、久々のことだった。それだけにうまかった。

それまで左右の視界を黒い緑が遮っていたが、川を離れると
-49ページ-
右手に袂父の山々が、として雲、空が、容易に見える。この空

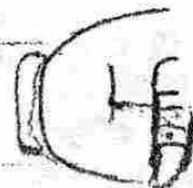
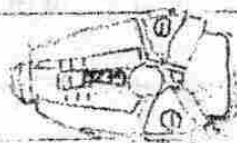
間の広がりを感じると気分的にも、根性が湧く。路面は、地道の所は、少なくなり；ガレ場みちいな所が多くなった。それゆえ、坂の途中で止まって、また登り始めるとき、じわじわと踏みぬきなりとスリッパしてしまう。陰しり登りトってから安井と一緒に走った。しかし、安井には、まりつた。42.24の重いギヤでよく登れるものだ。野崎さんと途中一緒になったり、ならなガったり、野崎さんは、ペースを一定にして、あまり休まな人んで、あいう走り方ができるのは、たいしたものと感じた。“目的地に着くまで、休まなこと立止ってもしけな、したがって歩調はななりゆっくりと汗の出なりていどに歩りつづけること。”を守た走りが私の理想なのだがなかなかなりものである。

ボトルの水が全部飲み尽くし、峠までのどが乾りてしようがなかつた。峠の手前の木材を出すケーブルの所におじさんが一人いたので「峠は近いですか？」と聞いたら、「あとこのガードレールをちょっと行った所だよ。」という返事が返って来た。霧がかか、山の山頂付近がはっきりと見えなかつた。ガードレールがある曲りを曲りま、た所ト来て先を見るとなにかの隙間からもれる光が霧の中に輝りていた。「峠だ！」と叫んだが音にはならなかつた。もうここまで来ると普通の坂は坂と感じず、ややゆるり坂は、並に「下り坂じやなりかな」と思えてくる。峠の前に坂があった。けっこう急だった。峠ト立、た。後から来た安井が「やったあ！」と叫んで登、て来た。全員峠ト立、た満足感をもって、記念撮影。

峠というところは、前に行こうと後に行こうと下りなのである。

下り坂であるが、あまり気分のリリ下りではなかった。しめが私の前でパンクして転倒。安井も下りでとばしすぎたせいかパンク(チューブラーでは当然だろう)。下ってビールで乾杯(と此からが大変だったキャンプサイトを探し回って、結局どこかの橋のたもとに決った。食事の準備にとりかかったのが10時近くだった。快い疲労感が体にあふれ、11ちおう手があき、砂利の上に敷いたシートの上に寝ころがった。背中に感じた不快感もどこかに、消えうせ、11つのまにか眠ってしまった。食事を終え、再び眠った。朝、起きたのは、9時ごろだったと思う。かなり疲れていたためであろう。麦草に私は行きたかったけれども、出発時間が若干遅れたため、軟弱コースを取ることにになった。このコースは、野郎山を通りハッカ丘道路に行くものであった。まったくこの日は、軟弱に尽きた。美しきの森でテントを張った。その夜、花火を十字路のと真中でやって楽しく過ごした。

次の日のやや下りぞめのアップダウンの続くハッカ丘道路は、安井と11っしと先を争って走ったひじょうに壮快であった。最後の下りは豪快でもあった。小淵沢の駅に着き、帰る準備にかけると麦草へ行けなかったことが残念に思えた。



予備合宿のある日 (三国峠越) (鈴木俊明)

何を書けばいいものかと、今年一年振り返ってみると、一番先に思い出すのが、予備合宿。特に第1日目。何しろきつかった。今まで一番きつかったのが、2年前の予備合宿(明神・三国峠)。今年の夏までは、もうあんなきつい所は走る(押す?)事はないだろうと、半分位忘れかけていたのだが、今回の予備合宿で、名前も同じ、中味も同じ、三国峠(中津川林道)へ行くと事になってしまった。

何しろ、長い(30km)、砂利道、急勾配と三拍子揃っている。特に長いというのがよくない。はやくも、峠から、約10km位前から、自転車をこきかしていった。その時点で、午後2時頃だったから、出発前に配布された青焼の予定表ではもうそろそろ峠に着いている事になっている。

それにしても、富士五湖の明神、三国の道と、まるでそっくりじゃないか。道が曲がる毎に、山かげからまた新しい坂道があらわれてきて、進んでも進んでも峠に近づいていくという気がしない。このまま進んでゆけば、そのうち峠に着くはずなんだけれど、峠に立つ自分を想像しようと思っても、そんな事はこの先いつまでもありえないような気がしてくる。

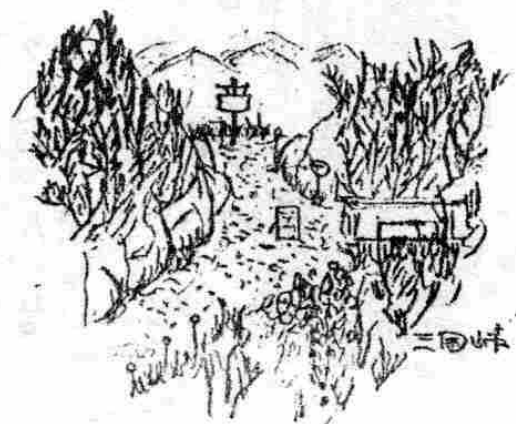
道がつつら折になっていて、はるか下まで見える所で、下にいる誰かと、またさらに下にいるだれかが大声で叫び合っ

ていた。先頭は、林直入口付近でもう見えなくなったから、先頭と最後尾は1時間以上離れているらしい。

というような事を考えながら、ただひたすら自転車を押してゆくと、どうにかこうにか峠に着いた。全員が峠に着いたのはもう5時前後だったと思う。峠の向うで合流するはずの名取も、待ちくたびれ終って、我々がもう来るものだろうと思っていただろう。これで一日の労働を終えて月々としたという思いだった。が、そう簡単にほっとしてはいけなかった。

砂利の上ばかりには苦しみがあるのと同様に、砂利の下りにはバココという厄介な物があったのだ。それも、一回の峠の下りで延べ五六人近くが。一人目(確か鈴木1年)の時は、やはり一人位はと思った。二人目の時もそう思った。最後尾を下っている、カーブで誰かが自転車を倒してチェーンを入れ替えている、それが終ってしばらく下るとまた2、3人が止まってごそごそやっているという具合だった。

そんなわけで、名取と合流できたのは、暗くなる直前だった。10時半から待っていてもうあきら果てたのか、名取はにこにこ笑になから「あまえら何やっただんじゃー。」と僕達を叩いた。本当に長く感じた一日だった。



上野駅にて

19番ホームには、僕らの外に輪行袋をかかえた一団が対峙していた。自転車の置き場所を巡って対立は避けられない見通しとなったので、僕らは対策を協議した結果、この攻防に敗れた場合には片側のドアの封鎖も辞さないという結論に達した。しかし辛いことに、運転室を占領することができたので最悪の事態は回避された。ざまあみろ！通路やドアの前なんかには自転車を置いて乗客に迷惑をかけちゃあいなだらうな、あの連中は！

八甲田（列車）にて

闇の中をひた走る列車の中で、いよいよ腹がへってきた僕らは安井パンの御登場を願った。なにしろ安井は食パンからマーガリン、レタスにハムにサラミに卵と、およそ一般人は持って来ないようなものを用意してくるからえらい。冷蔵庫の中のものを全て出してこなきゃならないという理由があるにじてもた。特に安井マーガリンは力作だった。マーガリンの中に砂糖がまぶしてあって、これをパンにつけて食べたら合宿の味だった。

空が白み始めたころまた腹がへて、一人いい気持で寝ている安井に、「安井、安井パンもらうぞ！」と馬の耳に念仏して安井パンをまた食った。東の空はもう赤味がさしていて、東北の1日が始まるんだなあという実感がこもっていた。

佐井の見知らぬ海辺にて

第一日目にテンパったところは、佐井の町から数キロのところ
で何の特色もないうらぶれた海岸だった。めしの用意も忙しく、
風の中でガスの火を立たせようと懸命だったのだ。安井は、どっ
かから板きれを捜してきて風よけにしようとするのだが足りなく
て、僕らの顔を代わりに使おうというのか、「おい！だれもつら
を出せ!!」などと言う始末だった。めしを食い終わったあとで、
「ああ腹ふとった。なかなかうまかったじゃないですか。そう思
いません？ね～え、小島さん？」ちょっと味噌汁は塩からかった
がなかなかいけた。「僕はこれからウリをしてきたいと思いま

空には不吉な雨雲が広がりつつあり、その夜の雨は新テンでなけ
れば耐えられないものだった。

佐井にて

ここでA班と落ち合った。金谷さんや曾我部さんなどの顔を見
ると、なんとなくほっとした気分になった。近くには眠そうな顔
をしたさえないやつが吉田さんといっしょにいたし、おじゃま虫
もいた。しばし言葉を交しているとき、港から船が一隻出ていく
のが見えた。この船は脇野沢を経て青森へ行く船だという。ガビ
ッチ！！次の日僕らは再び佐井の港へやって来て、船に乗るバエ
か考察したのだった。これから仏ヶ浦までは一時間ぐらいで行け
るだろう。船賃がもうかるや。

仏ヶ浦にて

伝家の宝刀「押し」は間もなく出た。みんなの姿はもはやない。いや、いた。安井がシュッシュッやっている。追い抜いたのもつかの間、ぴったり後について、「みんなに追いつけ追いつけ」と言う。船に乗らなかったのがガビッチだったのだ。佐井から仏ヶ浦までの間はジャリ道が延々と続き、海岸から遠くはなれ、山の中を登ったり降ったり。おまけに途中で食ったパンにはカビがはえてるとくりゃあ世話ないよ。

↓
仏ヶ浦の上の売店まで来たら、店の人が「船がもうすぐ着くからいそいだ方がいいよ。」などと言うもんだからこっちは200mほどの階段をかついて走り降りるはめになった。下まで降りて、間に合っただかな、と安心していると、「その船はここには寄らないよ。」ときたもんだからどうしようもない。小島さんが受付のねえちゃんを拜み倒して船をとめてもらったからいいようなものを、そうでなかったら、僕たちどうなっていたでしょうね。仏ヶ浦の海に浮いていたでしょうか。

赤川駅(むつ)にて

恐山から田名部に帰ってきて、今夜の寝場所を捜していた僕らはおあつらえの無人駅を見つけた。待合室は広くてベンチがあり、戸も締めることができた。さ、そくめしの用巻に取りかかると、この駅を委託管理しているという近くのおばちゃんがやってきていろいろ親切にしてくれた。前日には同窓社のグループも泊った

という。

ああ、めしを食った食ったという頃、急に外が騒しくなってきた。なにかと思つて外を見ると、子供ねぶたの山車が近づいて来るじゃないの。およよと思つているうちに駅前広場は子供でうまり、窓から珍らしがって中を覗いている。いい見せ物だ。祭りよりこっちの方がおもしろいとばかりに窓という窓には小さな顔があった。

恒例の食後のコーラの分配が始まった。蟻の多い中でコーラに入らないようにするのはなかなか難しい。半分ほど飲んだところで、僕のコーラの中にとうとう蟻が入って飲めなくなりました。「僕も蟻が入ってないか聞きたいと思います。」安井がそう言つてコーラの入った食器をろうそくに近づけた途端、大きなかげろうが「ドボン！」とコーラの中に落ち、ばしゃばしゃ泳ぎ回った。それでも安井は冷静にかげろうを摘み出し、澄ました顔をしてコーラを飲み続ける。こんなところが人間とちょっと違うんだなあと思つた。

一番列車が通過してからしばらくして、外がまた騒がしくなってきた。なんだろうと思つて目を開けた途端、「ラジオ体操第一！今日も一日元気にまいりましょう。まずはラジオ体操の歌から！」こっちは眠いんよ。

小川原湖にて

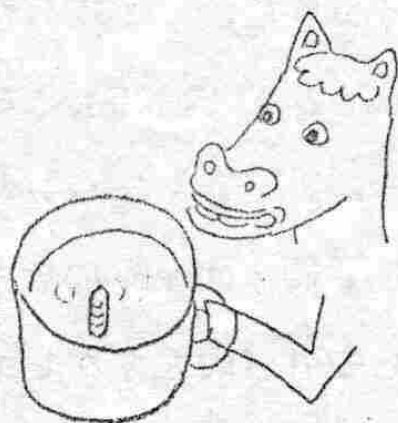
湖畔のキャンプ場には店屋がほとんどなく、とてもめしの材料

など調達できそうにもなかった。そこで、小島さんたちが買い出しに行くことになり、安井と僕は残ってテントを張ることにした。テントを張ってしばらくすると、安井が「おーい、コッヘル持ってきていよ。」大テントを張って救助訓練に来ていた自衛隊の連中が豚汁と御飯を分けてくれるというのだ。安井と僕はコッヘルを持っていて肉ばっかりの豚汁を大きいコッヘルに入れ、めしを小さいコッヘルにパンパンに詰め込み、これを逃がしたら悔根やみ足らずとばかりに豚汁はやかんにも満載し、自分の食器にもめしを詰め込んだ。これだけボリュームのある食事はかつてないことだ。豚汁は一人二杯はまわるだろう。あとは小島さんたちを待つばかりだ。ところがなかなか帰って来ない。帰って来たのは出発してから1時間近くたってからだった。「さあめしを食いましょう。」と言ったらみんな急に不機嫌になって黙りこくってしまった。聞けば往復10数キロの道のりをとばしてきたのだという。僕と安井が腹をすかして待っていると思って。こちらは豚汁を前にして、早く食べたいなあ腹をならして待っていたのだ。どうもすいませんでした。「せっかく遠くまで行ってボンカレー買って来たんだからつくって食うぞ。」「こんなにおかずがあるから僕はボンカレーまでは食べないと思います。」「それでも食うんじゃ。」「おまえらやかんまで豚汁入れやがって。中の汚れが落ちないだろ。あとでちゃんと洗ってけよ。」「なんだかんだあったけど、やっぱり税金でつくった豚汁はうすかったのだ。

川要グリーンユースにて

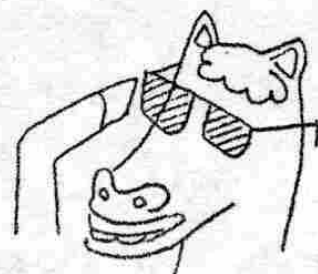
畠田さんたちと三沢で合流した日は、雨にたたられて走れる状態ではなかった。三沢駅から5キロほどのところに牧場が経営している川要グリーンユースというのがあり、そこの予約がとれたので、この日はユースまで走るだけにした。

このユースの朝はパンと牛乳で、牛乳は牧場からしぼりたてのを取ってきて好きだけ飲ませるというので期待していたのだが、出て来た牛乳のなんたるすっぱさ。これがしぼりたての味かと感心しながら我慢して全部飲んでしまうと、だれかがヘルパーにこの牛乳はすっぱいと苦状を訴えた。ヘルパーは1口飲んで、もともと崩れた顔をさらに崩したので、牛乳は腐っていることが判明した。しょうがないんで代わりに紅茶を出してきた。こちらもしょうがないと思ってパン食って紅茶飲んでいると、「おや、茶柱が立っている！」と安井が言うので覗いてみると、なるほど棒が立っている。しかしよく見ると、色が白く横に縞が入っている。「うじ虫だ！」とみんなが騒ぐなかを平然として安井は、「なんだ、茶柱じゃないのか。」といいかにも残念そうに言ってその茶柱をすくい取り、再び飲み出したのだ。ますます人間との違いを見せつけられたことに僕は感慨を覚えた。



十和田市にて

この町のデパートらしきところで安井や山口が安物のサングラスを置いて喜んでいた。そのサングラスをかけて電機屋の看板を見て、安井が突然騒ぎ出した。



SONY

「なんだこのサングラスは！SONYの文字がだぶって見えるぞ！」やっぱり安物はだめだなあと思いながらその看板を見ると、僕にもSONYの文字はだぶって見えた。看板のデザインがもともとそういうものだったのだ。みんなの大笑いのなかで、やはり笑いながらも僕だけは安井に同情の念を忘れなかった。

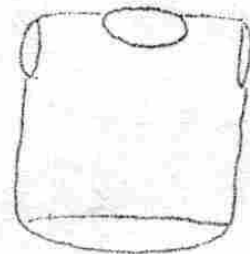
大沼ユースにて

この日は小雨が降っていて寒かったのでとてもテンパる勇氣はなかった。ユースにかけ込んでロビーにしけ込んでいた。ようやく僕らの部屋が決まったとき、安井が「どの部屋だ？」と遠くから聞いてきたので、「しゃくなげ。」と答えてやった。「え？なに？」「しゃくなげ！」「え〜？」「しゃくなげだってば！」「なにい？しゃぶらないでえ？」僕は答える元気もなくなった。

ようやく夕食の用意ができたらしい。食堂へ行って自分でめしをどんぶりに入れていく。入れ終わった安井がどんぶりの中のめしをほうり上げてはもどし、みんなの注目を集めている。「こうするとめしがうまくなるんですよ。そう思いません。」負けじと

小川もめしをほうり上げ始める。ほうり上げる高さがどんどん高くなり、ついにめしは空中で爆発して無惨にもあたりに散らばってしまった。僕は反射的に小川から離れ、小川とはなんの関係もないように装った。

さて、いよいよ八幡平に向けて出発だ。雨が降っているので僕はアノラックを着てその上にポンチョを着る。装備は万全だ。ところが小川はヤッケを川要グリーンユースに忘れて来てしまったのだ。忘れ虫の小川は十和田湖の手前で焼山のめし屋にナップザックを忘れたのに気付き、10数キロの道のりを取りに戻った前料がある。なんと小川は大きなビニール袋、すなわちあの青いゴミ袋を頭からかぶり、穴を開けて頭と手を出してノースリーブのヤッケにしてみた。体にぴったりフィットしていてゴミ袋も使いようである。



盛岡にて

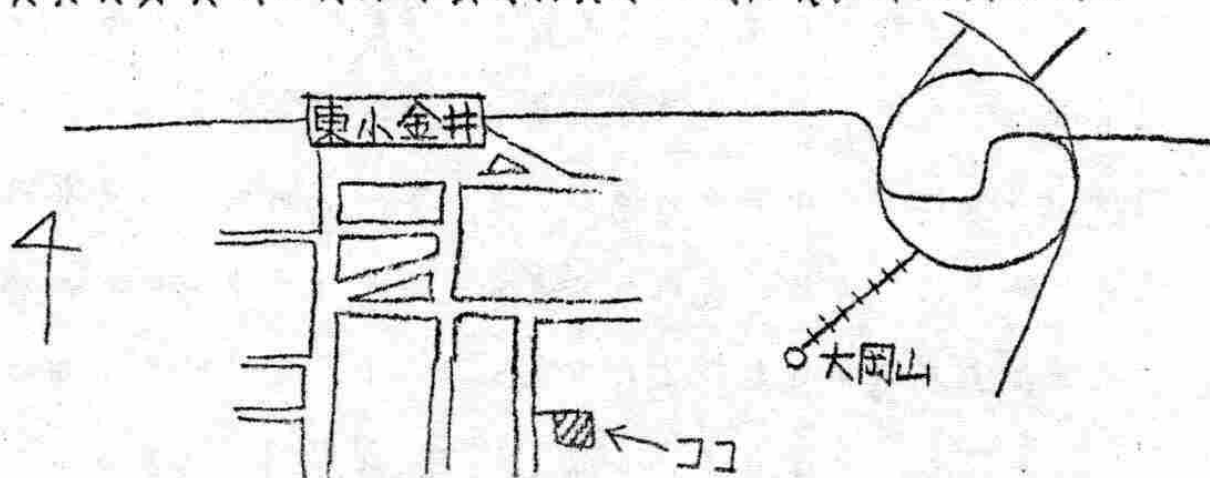
僕らは集合日より2日も早く盛岡に着いてしまった。とりあえずめしをというんで近くの公園でめしを作ることになった。ここで問題になったのが言葉使いである。「～なわけ」というのは先輩にも後輩にも同じように使われ、よくない。「実に～」というのは他に言いようのあるものを、表現力の貧困の表われだ。というわけで、これらの言葉は禁句となった。「実に」というのを用いたのはもともと安井だったのだが、安井は今度「誠に」

を使うようになった。「この肉は誠においしいですねえ。誠に。」
結局この禁句令も効めはなかったようだ。ただ安井の「だれも」
はこの夏合宿でほとんど直ってしまい、もはやあの「だれもクソ
したわけ？」は聞けなくなっているようだ。

XXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXX

最近、オカルトマージャンがはやっている。特にS₂氏のオカルト
は強力で、元祖オカルトも手がつけられないありさまである。
S₂氏のオカルトの特徴は、中、西、白、ろびのオカルト牌の双ボ
ン待ちが多いことである。また、七対子でリーチをかけ、一発で
振り込ませ、振り込ませた牌が表ドラでもあり裏ドラでもあると
いう驚異的なはなれわざもやってのけている。その犠牲者は様で
あるが、しかしその最も悲劇的な犠牲者はなんといってもT氏で
ある。彼はオカルトの威力に圧倒され、最近ではXX!、XX!と
言って半狂乱になっている。僕は同情がやまない。このオカルト
旋風がいつまで続くか見ものであると同時に恐怖である。

XXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXX



今回の合宿は いろいろと思ひ出の多い合宿だったが、ここではあまり知られていないと思われるうさ話を紹介したいと思う。

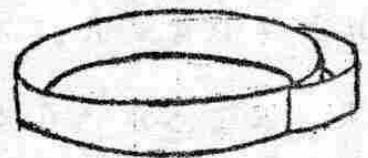
あの事件が起きたのは、弘前の駅前でチャリンコを組み立てている時だった。突然1人の若い女性が話しかけてきた。何事かと思つた。自転車のタイヤの空気がぬけていて、それを直してほしいというのだ。ところがよく見るとムシがなくなつていて、その場で直すことはできず、近くの自転車屋まで押していくように言っただけだった。今から考えると、今回の合宿と女性とのかがわりあい、このときすでに始まっていたのだった。しかし、この時、だれもそれを予測できなかった。

その事にみんなが気づいたのは竜飛崎だった。A班は2日後の朝に青森で小野さんと合流する予定だった。その確認のために、金谷さんは、キャンプ場から4,500m離れた所へ電話をかけた。ところがいくら待つても帰つてこないのので全員で出かけていくと、金谷さんは土産物屋の店員(高校生;もちろ女性)と話こんでいたのだ。この時以来全員の気持ちが変わつたようだ。それから女性を求める合宿となつてしまつたのだ。その兆候が、最初に現われたのは、青森から佐井へ渡る船の中だった。途中の脇野沢から水着姿の女性2人が乗ってきた。この時は吉田さんと山口が佐井へ着くまでず、と話をして、星薬科大(武蔵小川の近く)

の2年生であることや、これから大間崎へ行くことなどを聞き、工大祭へ来るように言った。佐井に着いて僕たちは大間崎へ向かい、彼女たちより先に着いてずっと待っていた。しかしいくら待ってもあふられず、彼女たちとは二度と会うことはなかった。もちろん工大祭にも来なかったのだ。

次は恐山であった。そこには太鼓橋があり、それを自転車で登れるかどうかというのが問題になっていた。3人失敗した後、ついに西口が登りこった。これが一部で有名な挑戦シリーズ第一弾である。そこに2人の女性が現われ、「登れたのだから、降りれるでしょう?」と言った。そこで西口はその頃になって、太鼓橋下りが行なわれた。彼は橋を順調に降りたが、その先が砂地になっていて、そこでおしくも転倒。挑戦シリーズ第二弾は失敗に終わったのだ。もちろん彼はけがをしたかそれは無駄ではなかった。彼女はバンドエイドを取り出し、やさしくそのキズにはってくれるかと期待したが、彼に手渡しただけだった。それでも彼はそれを大事に何日間もはったままにしておいたようだ。

その後A班は予定外のコースへ進み、青森市内へ入り、ねぶた見物をすることにした。ところがそれは見物では終わらなかった。ぶらぶら歩いていると見知らぬおじさんに声をかけられ、가가シコで酒を飲まされ、いっしょ



가가シコ

にハネらせられたのだ。その後、酔ったいそおりで、女の子たちと手をつないでハネ、地元の青年と競争してハネ、全員ハネ狂ったのだ。宿泊地と帰っても、みんなねぶたの感動が忘れられず、次の日も行こうということになった。次の日はみんなでユニホームを着ていったのだが、TITCCの文字が読めなくて、地元のサイクリストが道を教めてくれた。2日目も好調にスタートしたように思われたが、その日は観客が多すぎて、どうしても道のまん中へ入ってハネることができなかった。見ているだけではつまらないので、一部の観客の非難もあがるが、道の中へ入り、ついでにハネることができた。もしこの日、ハネることができなければこの合宿全体がつまらないものになっていただろう。夏に青森へ行ったな。絶対にねぶたに参加し、ハネ狂うべしだと思った。

次の大きな出来事といえは^{スリユ}酸ヶ湯だろう。酸ヶ湯には混浴があるということかガイドブックによってわかっていたため当然のようにそこで一泊することになった。期待に反して、おばさん、おばあさん、子供しかいなかった。しかしわれわれは執念深く1時間以上もねばった。そのかいあって、大学生らしい3人が入ってきた。ところがそれまでばらばらにいたわれわれは、その時遅悪く全員が集まっていたため、彼女たちもいざうかつたらしく、1人はすぐに出ていってしまった。われわれが顔を見合わせている

と、こちらも1人いなくなっていることに気づいた。金谷さんだ。
どこへ行ったのかと捜してみると、なんと残りの2人の女性のす
ぐ近く(半径3m以内)にいるではないか。「さすがは金谷さん、抜け
目がないなあ」と言っているうちにその2人も出ていってしまった。
しかし一番目玉めなのは金谷さんだった。彼女たちが少しの
時間はそこにいたのだらうと、そこで髪を洗っていたため、彼女た
ちが出ていくときには、一目も見れなかったというのだ。まことに
残念な話だ。

最後の事件は十和田湖で起こった。予想通り多くの女性がいた。
雨が降っていたためユースに泊った。夕食までの時間に僕と西口
は乙女の像を見に、散歩に出かけた。観察力の鋭い西口はさっそ
く2人づれの女性を発見、ところが僕があまりのり気でなく、そ
の場ではうまくいかなかった。しかし西口は「彼女たちはさっそ
ユースに泊まっているから夕食の時にチャンスだ」と言って、そ
の期終とともにユースに帰った。西口の考え通り、彼女たちはユ
ースに泊まっていた。そして夕食後、ついに声をかけ、トランプ
をやるどころまでこぎつけた。しかし、その場はそれで終わり、
住所、氏名ともわからず、熊本看護学校の学生であり、これから
北海道へ行くことを聞かされただけだった。次の日の朝、いっし
よに写真を撮ろうと、朝食後、捜したがすでになかった。青森
行のバスがまだ出ていなかったのも、バス停まで捜したがい、たが、

それでも見つけることはできなかった。西口はその後、彼女のことをあきらめず、みんなの意見もあって、プロポーズ大作戦に応募した。テレビ局からアンケートがきたが、それ以上には発展せず再会の夢は破れてしまった。しかし西口はまたあきらめていない。彼は春合宿にかけている。九州に在ると考えているのだ。たぶん彼のコースには熊本が入るだろう。

これでこの合宿のうら話はほとんど書いたつもりだ。今回の合宿では、出来島(島ではない)から見た日本海へ沈む夕日、竜飛崎から見た荒々しい津軽海峡、大間崎から見た北海道、尻屋崎での夜の海を照らす灯台と漁火、八甲田山から見た陸奥湾、竜崎から見おろした十和田湖、と数々の美しい風景をながめてきた。しかしそれだけではやはりつまらない旅行になってしまう。ゆえわれの場合は、自転車を使っただけの旅であり、風景以外のものも求めるべきだし、それが本来の目的でもあるのだ。そういう点においてもこの合宿は非常に意味のあるものだったと思う。

最後にA班のメンバーを紹介しよう。

金谷さん：唯一の3年生であり、あきらめず意味でA班の中にあった。それにもまして、竜飛崎での火つけ役はみごとだった。

小野さん：ねぶた祭では、普段の彼からは考えられないけど、ハネ狂って全員を驚かした。

曾我部さん：ねぶた祭で、あまりにもかんばりすぎて、足首を、

ネンザ、みんなを心配させたが、元気に、笠松峠、八幡平に登り、完走。しかし、飛荷峠ではみごとな転倒が見られた。

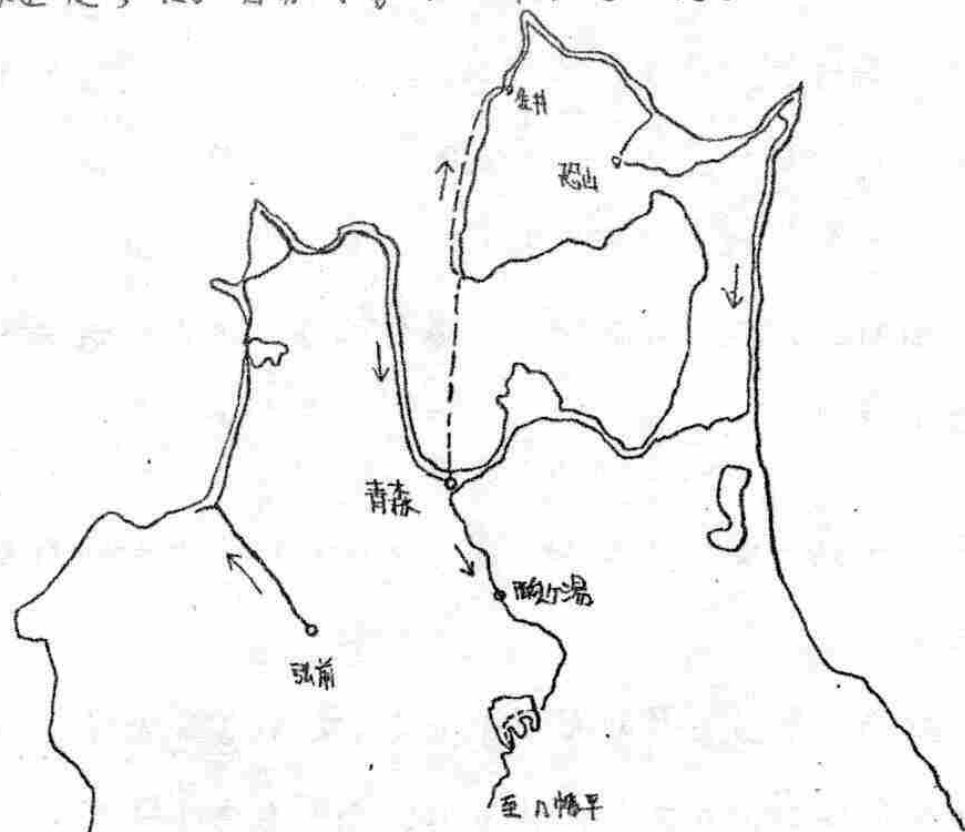
吉田さん：ねぶた祭に参加できたのは彼のあかげ。西口とともに合宿全体を盛り上げた。

永見くん：「ビューンと飛んでく永見、個人行動」の歌ができるほどの注目の人。酸ヶ湯では混浴に入らなかった唯一の人物である。

西口くん：うら話登場最多数をほこる、話題の人物。彼については、もう述べることもない。

浪辺くん：ねぶた祭にはれこんだ男。来年は、合宿の前、後に、衣裳をそろえて参加するといふ声も聞かれる。

高橋：物見崎でディシーウー故障、驚怖の固定ギヤで青森まで、80 km以上走った。自分でもよくや、たと思ふ。



私にとっての夏合宿 — 20才の夏 —

3年 金谷 健

くプロローグ

7月28日、早朝。私は、さまざまな想いを胸に青森駅から弘前駅へと向かった。15日間ひとりだけで走った北海道、走ることが、旅することがどんなに素晴らしいことなのかを、マザマザと思ひしうされたツーリングであった。私はひとりであったが、それ故に孤独ではなかったような気がする……。さあ、これから2週間、なにが待っているのか。何と云えることは、それは私にとって今までの合宿とはかなり違った色まいのものになるであろうこと。つまり今までの合宿では、行動の「判断者」が「誰か他の人」であり、グータラ人間たる私はそれに乗っかっていただけに対し、今回は私自身が「判断者」でなるからだ。これを快感をもって受けとめるか、ダルイものと感じるのか……。

ともかく列車は弘前駅に着いた。曾我部、吉田、(小野)、高橋、永見、面口、渡辺、そして私の夏合宿がここから始まるのだ。(小野は途中参加)

く最初のころは……

弘前から^{おじ}鰻ヶ沢、十三湖と走っていくにつれ奇妙な気分になっていった。

「オレは今、本当に『みんな』と走っているのか？」

考えてみれば当然のこと。オレは、高橋たち1年生のことは何も

知らないのだから。

「こいつら、何がうれしくて東北まで来てオレとい、しょに走って
いるんだろう？」

そんな素朴な疑問がわいてきた。

3日目は、津軽半島の先端である竜飛崎でキャンプした。この
ころから、なんとか打ちとけてきたように思える。後で1年生に、
「竜飛で売店の女の子とニヤニヤして話している金谷さんを見て
から、合宿が楽しくなり、リラックスしてきた。」

という、非常に偏見に満ちたことを言われたが、とにかくどんな
ふうにもいいから、「打ちとけて」きたのはいい事だ。夜、竜
飛崎の灯台の近くで、面口や吉田、渡辺などから、彼らのさまざま
な「体験」もウツウツと聞けたのは更によかった。

くこころで休と休み……

何故か、旅における「出逢い」などという「^めめしい」ことを
書きもくなくなった。もっとも、夏の夜、ムサウルニイカロウドモが
星でも見ながら語りまうのはスバウニイなんて言うのも、なんか
テシワサク、そういうものを求めて旅に出る、合宿に出るとい
うのに対して、私は99%共鳴しながら、残り1%でもってそれをせ
せら笑いたくなるのが正直な所持です。

私は旅に出ると社交的になれるような気がする。その根底には
「旅の恥はかき捨て」的意識——つまり、その場での自分の行動
は旅を終えてから、好むと好まざるにかかわらず帰らねばなら

ない「生活の場」にたがひては来ないという確信からくる、自分の言動に対するせえ？しかし自分ではそれをいり意味で使っていると思っている——と、それと表裏一体となっているものだが、日常生活における自分の非社交的態度——特に未知の人間に対して自分を閉じている、なかなか「自分の世界」を拡大しようとしていない保守的傾向——に対する1%の反発心との、二つがあると考えている。

それから、そこから生じる「出逢い」——土地の人の時も、同じ旅人の時もあるだろう。——には、ある意味で生活の奥行きがない。つまり互いに話しても仕方ないという部分をかなり持った上で話している。しかしそれは反面、安楽であるし、逆に日常生活では話しても仕方ないと思っているようなことが話せるという面もある。

やはり旅において、大自然の中、見知らぬ人との語らひの中で人間は、つかの間の「自然への復帰」をなしとげている、そしてげられると思っているのだろう。

くまとも

話がややこしくな。たので、ここらで合宿を総括してしまいたい。

①やはり、集団行動の「判断」が最終的に私に求められた。それは、最初快感、したいにダル感……。しかし、ある判断をする場合の発想を、

「どうしたらオレ自身が楽しいか？」

もなく、

「どうしたら、オしもみんなも楽しいか？」

に変えていく——これは「大人」になるための条件だと思われ、大げさに言えば、みんながこう考えていくなかで、社会はよくなっていくと思う——それを求められ、それが体で少しはわかってまたことが、非常によかった。

②走るという面でも得たものは大きい。ひとつは、以前のオしのように、15分～30分に1度休むのでなく、1時間に1度くらいのがさが距離も伸び、行動範囲が広がり、時間的余裕もできることが身にしみたこと。もうひとつは、ハダ平アスリートラインをコンスツツでのぼれて、苦しくてもがマンすればオしたってのぼれるんだという、坂とか峠に対する自信がついたことだ。

③ほとんど毎晩のように酒が入り、自然と心が開かれてきたようでよかった。私自身は酒をあまり好まないが、キャンプ、夜、星空とくれば酒がないとおかしい。それに下宿とか飲み屋よりも夜空のもと、大自然にいたかれて飲まれるのが、酒だっとうれしいでしょうよ……。 (系冬)



2027年の回想

—いま明がされる事件の全貌—

2年 三浦 洋嗣

あれは、そう50年前のことになるだろうか。私は大学のサイクリング部にいた。私は大学2年で、その年の夏、東北へ合宿に出かけたのだ。—————

——「ケンという方が下で事故を起こしたので助けに来てくれと言っている。」と後から来た車のドライバーに告げられた私は、雨の中をもと来た方へひき返した。—————

——7月29日夜、上野をたった我々5人（私、N、K、H、T）は30日に自転車で大湊駅を出発し、恐山—大間崎—福浦—青森—八甲田山—十和田湖という道をたどり8月5日、悪天候の中を八幡平頂上をめざしてアスピーテラインを登っていた。

この日、昼ごろどんよりとした空の下、大沼キャンプ場を出発した我々だったが、登り始めるとまもなく雨が降り出し、その雨は一日中断続的に降り続いた。最初から元気を見せるNは先頭をきって先へ先へと進み、やがて2番手の私の視界から消えてしまった。黙々と雨の中をのぼっていく。時おり車が通りすぎる。孤独だ。暗い。つめたい。道ばたの道標の数字が7km、8km、9kmと変わっていく。私のあとからは、T、H、Kが続いているはずだ。

13km、いや、14km地点をすぎたあたりだろうか、雨が一段

と激しくなり、ゴーッという音をたてて降ってきたのは、顔、手、足、露出している部分は容赦なく雨滴を打ちつけられる。痛い。前が見えない。それまでは雨の中「早く登りきってしまおう」と思ってペダルを踏み続けてきたが、さすがにこの雨でくじけて、「止まろうか」という気持ちになった。しかし、雨を避けられる場所はない。登るしかない。するとまもなく展望台が駐車場から少し開いた平地に出た。展望台の端の柵のところまで行ってみるか何も見えない。晴れていればよい景色なのだろうが、残念だ。展望台をあとにして進むと、道が下りになっている。一生懸命ブレーキレバーを握りしめて進んだ。この豪雨のため、視界は3mほど、そしてブレーキもきかない。下りは怖い、雨の音以外何も聞こえない。大声をはりあげて歌を歌い、自分をほげました。雨がさらに強まる。視界がさらに悪くなる。後から来る者が心配になった。「危険だ、みんなを待ってからいこう。」と思い、どこか雨を避けられる場所を、と捜したがあきらめてその場に止まった。自転車から降りて体を伸ばすと腰が痛い。フロントバックから鉛を取り出してなめる。車が何台か通り過ぎた。また一台と見ているとその車は私の脇に止まった。車の人が「おい大丈夫か、あと500mくらいだぞ、がんばれ。」と言ってくれた。私は「はい大丈夫です。」と答えた。こんな時、他に答え方があるのだろうか、たとえ大丈夫でなくとも。なかなか仲間がこない。

10分ぐらい待たさるうか。もしかしら5分程度だったか
もしれないが、あの豪雨の中で私は時間感覚を逸していた。時お
り通り過ぎる車の中で1台の車が私のかたわらに止まった。「ま
たかな」と思った。ところがそうではなかった。50代ぐらいの
夫婦が私にそのしらせをもたらしした。「Kさんというのはあなた
の仲間ですか。」何があったか、という気持ち、不安が胸をおおっ
た。「はいそうですが」と私。「そのKさんという方が下で事故
を起こしたので助けに来てくれと言っている。」私はびっくりして
車の人に礼を言うと自転車の向きを180°変えて来た道をひき返
した。事故と聞いて私は「車とぶつかりでもしたのか」と心配し、
Kの顔を思い浮かべた。さきほど通った展望台を過ぎて道は下って
いた。雨は小降りになった。下っていくと、道ばたにTの自転車
が横倒しになっているのを見つけた。Tの姿はない。不審に思っ
て、Tの名前を大声で叫んだが応答がない。どうしたんだろうと
Kのことに加えて私の不安は大きくなったが、まずKのことだと、
また下っていくと、誰か人が前を歩いている。「事故現場に人が
あっているのか」と思い不安はますます大きくなった。しかし、
近づいていくとそれがTだとわかった。視界が悪いために遠くか
らはわからなかったのだ。Tも車の人に聞き、自転車を置いて歩
いて下ってきたのだという。私はTに先に行くと言って、なおも
下っていくと12~13kmぐらいの地点だろうが、前方にH、そ

してその先にKの無事な姿を見つけたのだ。私はHに「どうしたんだ。」と尋ねると、「Kがチェーンをフリーの内側におとして、くいこんではずれなくなったんだけどもう直った。」と言う。Kに「事故を起こしたなんて聞いたから、車にでもぶつかったのかと思った。」と言ったら、「そう言わないと来てくれないうと思った。」と言う。HとKのふたりでチェーンをはずそうとしている間も、私たちが来ないので2年生は薄情だなと思ったという。こちらこそ事故だなどと心配させられて損したという気持ちなのに。まあ、無事でよかったと思い、Kの後からしんかりで登っていった。雨はあがっていたようだ。これで「あゝ、よかった、よかった。」と言って登りきれたなら、のちに「アスピーテ事件」として世に有名(?)になることはなかっただろう。それまでのことはアスピーテ事件の第一幕でしかなかったのである。

第二幕がきっておとされたのは、再び登っていた14km地点あたりだったろうか。Kが眼鏡がないと言いだしたのだ。雨の中、眼鏡は非常に見づらいのを、眼鏡をかけている方は知っているだろう。Kはあの豪雨の中、眼鏡をはずしてフロントバックの上に置いて走っていたという。それが今見るとないというのだ。「どこで落としたかわからないのが。」とよくと「チェーンをくいこませて直していた所に置いてきたにちがいない。」と言うので、私は、自分のためにこれ以上遅れるのがすまないと思っでか「もうあき

らめる。」と言いはるKを引っばって2人で捜しにまた下っていった。眼鏡といえど何万円もするものであり、これから先ないと不便でもある。少しぐらい遅れたってどうということはない。雨もいちおうあがっていて、下りは風を受けて爽快だ。このあとまた登らなくてはならないことを一瞬忘れた。Kがここだという左カーブに着き、カーブの内側を入念に捜したが見つからない。Kは「Mさん、もういいですよ。眼鏡がなくとも大丈夫ですから。」と言うが、私はあきらめきれなくて、Kに「先に行っている。俺はもう少し見ていくから。」と言って先に行かせ、ひとりで捜した。10 kmが11 kmぐらいの地点に使われていない料金所のようなものがある。Kが、眼鏡をなくしたのはそこより上だと言ったので私はその料金所まで下った。そしてそこから自転車でゆっくり登りながら、時には自転車からおりて、地面をそしてU字溝の中をなめるように見ていった。なかなか見つからない。だいぶあきらめ半分になってさしかかった左カーブ（それはKとふたりで捜したカーブのむとつ下の左カーブだった。Kのおんちがいだったのだ）の内側の中ほどにそれはあった。まさしくあった。つるを開いた形で逆さになって、自分の存在を主張するように、それはそこにあった。私は、胸の高鳴りを抑えられずに、喜々としてそれを取り上げるとレンズの無事なことを確かめ、フロントバッグにおさめた。そしておお急ぎで坂を登った。ペダルを踏む足も快調

だ。やがてKに追いつき、「あ、たそ」と言うと、「え、本当ですか。」と驚いたようす。私は内心得意だった。そしてその後は何もなく（あったらこまる）頂上のレストハウスにたどりついたのであった。

予定では2時間のつもりが登るのに4時間近くかかった。私はゴール500m手前で無念のUターンをして結局10kmぐらい余計に走り、半分の5kmぐらい余計に登ったことになる。アスローテを1回半登ったことになる。まあこれも50年たった今ではいい思い出である。その後私は、車でアスローテラインを訪れたが自転車で登る若い人の姿を見ると懐しかった。

ところで、あの時の仲間は今どうしているだろう。Nは白黒テレビを専門に作る会社を作ったが倒産して、その後どうなったか。Tはレストラン〈MEME〉を経営していたが、失恋レストランもはやらなくなりつぶれたらしい。Kは優秀な成績で大学院へ進んだが、気が狂ってしまい、精神病院に入れられて毎日、「エーマル、エーマル」と叫びながらわけのわからないレポートを書いていたというが。そしてHは、あいつは学生の時、K・F・Cのバイト先の女の子と姿を消して以来50年も消息がない。私はHのことを考えるといまでもあのHの卑猥な踊りが目に浮ぶ。どうしているのだろう。

2027年12月14日 晴れ

“富士”タイムトライアル

1 年 渡 辺 秀 樹

10月23日朝、天気晴朗なる中、私はひたすら自転車のペダルを、ヒーコラ、こいでいた。「あそこカーブをまがればもうそろそろ、2合目だろう」という期待が、裏切られる予、数回、ペダルを踏む必然性と、ひいてはサイクリング—自転車を楽しむ事—自体に疑問を感じながら、それでも私はこいでいる。「カリカリカリ、ガッタン」ギアがまた一段落した。五合目に着くまで、再びもとのギアに戻ることはないう。しばしのお別れじや……。くだらない事を考えて登ってゆく。「ガタン、ガタン」、今度は路面の段差である。「あの穴ぼこには入るまい」と思う自分に反して、前輪はどんどんその穴に入っていく、やがて、前輪そして後輪が落ちる。軽い衝撃が、手から頭へと伝わり、これも、単調な登り坂に飽きてきた私には、気晴しになっているのだ。後ろからペダルを踏む音、そしてチェーンのきしみの音が聞こえてきた。その音が極大となる瞬間、「お先に！」という声がかかった。「もう何人に抜かれただろう？」と思う私は、そして「もう何人を抜いただろう？」と、おそろく思っている。は遠くない彼。両者の心境の違いを考え、思わず苦笑する。しばらくすると、彼は前方のカーブにすっ飛ばれ、見えなくなった。再び、孤独感の中、ペダルを踏むことになった。右向き、車が

走り抜けてゆく。その流れゆく車の窓を、のぞく事にした。ほとんどどが、家族づれ、アベックである。運転者はともかくとして助手席、後部席の人向は、車窓の景色を楽しみながらジュース類を飲んでゐるようだ。そして私に気がつく。どんどん後へ遠ざかる私に視線をそそいでゐる。ある者は嘲笑の笑みをたたえ、ある者は、私に手を振り、時には窓から身を乗り出して、声をかけてくれた。――バスが通り過ぎた。エンジンの回転数が一杯に上っているためか、排気ガスは真黒である。その黒煙が路上を漂う中、私は息をとめて走り抜ける。そして大きく息をつく。――

ふと前を見ると、標高1800mの標識が立っていた。ゴールが2300m余であるから、後500mを登るわけである。「まだ長いな」と思った。空腹感を覚えたので、フロントバックを開け、パンを取り出す。口はほおぼり、クチャクチャやうてゐると、むせて吐き気がしてきた。ゲージからボトルをびっばってくる。ここからが大変である。まずボトル本体をしっかりおさえて、アルミのフタを回す。そしてそのフタを、フロントバックに投げ込み、続いて現われた、コルワの栓を口ではさんで、ポンと抜く。片手は常にハンドルに置いているので、非常にきつかった。よろけて、車に、警笛を鳴らされる。やうして、やっと水はあり付く事ができた。こんな時の水は、月並な事だが、どんな飲み物よりうまいと思った。

3合目をすぎると、下代が道端に自転車を止めて、ガチャガチャ

ちゃっていた。瞬間にして、チエンがハブとリアスプロケットの間に、くっ込んでしまった事が解った。止まって半時けしてやるうかと考える。だが、彼が私に気付かないのを「事には、どんな人通り過ぎてしまった。今でも彼は悪かったと思っている。ギアをどっと落として、登る事にした。やけにペダルがくるくる回る。それにもすぐ馴れてくると、前方に石を見かけるようになった。彼はそれほど疲れているようにも見えないが、いかにもたるそうな後姿でペダルを回している。二人の間の距離が縮まり、そして彼を抜いた。すぐ前にも、夏合宿を共にした先輩のK氏が走っていた。彼も抜く事にした。「やけに人に会うようになったな。」と、内心ほっとして登る。後に人と自転車の気配がした。振り向くと、N氏である。目で合図をしあう。彼にくっついて、ゴールまで行く。4合目で、役員の先輩のN氏の声援を浴び、きつくなった坂を、それこそ必死になつて登った。道が急に平坦になり、ゴール付近のレストハウスが見えてくる。戻る事のないだろうと思っていたトップにギアが入り、最後の力走をする。そして、最後の本当に最後の坂を、心臓が破れんばかりにして、私、——清田君——はゴールしたのである。 (おわり)

タイムトライアル

1年 金井 均

10月23日、その日は、恐怖のタイムトライアルの日であった。とにかく、その日が近づくにつれ、僕の心は恐怖心と猜疑心とでいっぱいになってきた。「なんで富士山を1500mも登らなきゃいかんのや、疲れるだけやないの」と考えるようになっていたのである。前日、川口湖Y.H.で、出走順位が決定された。僕の順位はなななんと、5番目、そしておまけに、沢木さんの次で三浦さんの前の前ではないか。出走時間差は、30秒おき、これでは、後ろからどんどんぬかされるだけやないの。これは、もう恥辱のタイムトライアルになることは必定であり、僕は、どうにでもなれと開きなおった。とにかく、完走を目標に走ろうと心を決めた。だが、三浦さんは、「金井に勝つ」などと言って、僕の心を惑わせる。よくないよ～。

そして、ついにその日が来た。朝、緊張していたのだろうか、トイレへ3回も行ってしまった。そして、不安に入り混じりながら、9時32分30秒、出走した。初めは、たいした上り坂でもなく、ちんたらペダルをこいでいった。少し時間がたったところで、僕の次に出走した16番のやつが、まるで特急列車のごとく、僕をおいこしていった。そして、次にとうとう三浦さんにもおいこされた。それから、数人にまたおいこされた。もう、悪夢である。僕は、自分にマイペース、マイペースと言い聞かせながら適当に登

っていった。ところが、4合目の手前の所で、必死にこいでいる前の人を、なんの気なしにぬいたら、その人は、なななんと三浦さんではないか。三浦さんか、どうしてここに。僕は、あっけに取られたが、その次、「やった」と内心思った。それから、マイペースでどんどん登りつめた。だが、4合目を過ぎたところで、ついに力もつき始め、フラフラきたが、地図とにらめっこして、あと少しだと自分に言い聞かせて、必死で重い足でこいだ。なんとか登って行くと、向こうの方に、休憩所らしい八角形の建物が見えた。「あれだ、もうすぐ5合目だ」。時計を見ると、11時50分前。よし、2時10分代でなんとか登ってみせるぞと思い、僕は最後の力をふりしぼって必死にこいだ。そして、やっとゴールイン。「やったぞ、とうとう走りぬいたぞ。」時間は、2時間19分44秒、なんとか救われた。

そして、全員が完走したあと、みんなで小カクローフになって、下山して行った。そして、ゲート横で、表彰式。1位は、あの16番で、1時間40分25秒だそう。僕は、23位だったが、23日にちなんで、なななんとフロントバックを賞品にもらった。恐怖の10月23日ではなく、喜びの10月23日となった。

それから、解散。我々は、富士山をあとに、川口湖駅へと向って行った。タイムトライアルは、非常に疲れたけれど、「やった」という気がした。本当によかったと思う。あの5合目で、吉田さんの作ってくれたおしるこが、とてもおいしかったです。

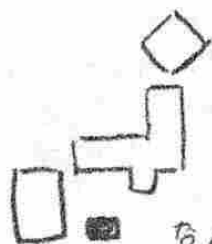
ESCA RALLY

1年 花房 秀治

登場する人——花房君 尾田さん 古木さん 小島さん

小川君 鈴木君 山口君 金田さん

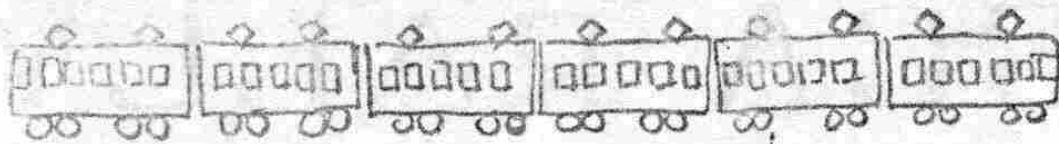
八月の終り、たしか30日だったと思うけれど、ぼくたちは、
部室に朝、集りました。当日は、古木さんと小島さんが車で行く
ことになっており、それにたれが乗って行くかでいろいろ、
ごたごたしたのですが、結局金田さんが乗りたいということに、
それに小川がメンキョを夏休みにとったので交代用員として、
乗ることになり、またそのメンキョというのも本土からはなれた



高知でとったもので無事には、軽井沢へつければよい
が、……—と思いましたが、そこはさすがの小川君、

なんとか、うまくのりに合したようでした。

一方のこりのめんは、ゴトゴトと山手線で上野へ。そこでちょっ
としたでき事があったのだった。品川をすぎたあたりから、尾田
さんが、ぼったりぼったりと思い出したのだった。まずはじめに、目
黒線の中に、お菓子とサニバイザーをゆすんできた車、続いて、
2つか3つ取をすぎて新橋あたりでまたこんどは、しゅっつをゆ
すれたことまで思い出したのであった。尾田さん あのしゅっつ
どうしたんでしょね——。それで尾田さんは上野からひき返
して、3人で列車にのりかッタンゴットンとゆられて軽井沢へ



軽井沢へつくと、駅のまわりではいっぱい輪行していきまして、
まるで軽井沢で何か、自転車を使った行事でもあるみたいでした。
五人ちゃ。その輪行を終えて、キャンプ場につくとちょうど車の
おもとうちやくしました。夕食もみんなで輪になって食べ、その
から、次の日のオリエンテーリングの相手が発表されるのであっ
た。うちのクラブで最初に決まったのが、ええと……わすれまし
たが、ぼくは、明治の大場さんという人でした。それもおかり、
こんどは、バンカローに男7人が入ったのでした。あらあじり、
駅前の酒屋で、買っておいだ酒とつまみで、てっそくはじまりま
した。われわれの事だから、どんちゃんさわぎだと思ったら、お
っとど。こい、どうはいかのキータで、なんと、その夜はまじ
めくさって、自転車の事、クラブについてなど、酒をくみかわし
て、話しあったのであった。その内容はどうも、とても、し
らふでは書けないのでやめまして、その夜は一応小島さんとぼくは
ムサコウ太のバンカローでぬることになっていたのでしたが、酒を
飲んでおそくなったので車の中でぬることにしました。

次の日は、前日かっておいだパンで朝食をすませ、地図の配布
を待ちました。地図をもらって、明治の大場さんとうち合わせを
しました。まあちゃんたりやりましょうという事で、いい人とべ
つが、あつた。オリエンテーリングも金車で昼食も

しっかりと食べてなんとか終わりました、なんとうちのクラブから小島さんがかんばんで3位入賞おめでとう。それをけで夕食を終えて、ゴニバがはじまりまして、はじめはいいうんいきでしたけど途中から、たんだんといいになってきて、うちのクラブもいろいろ用意していたのに順番がまわってくるころには、おそがやっってしまった、けっきょくやつたのが、Tきのうとうちゃんと……とヨカチニチンでした。しらふでぐくやりましたなあ東工大のみおさん。ゴニバがおわると二次会へ行った人とバニがほーを酒をのんびんがいたようでした。

無事に1日になりましたほくと山口と飯木は高崎まで行きそこから急行でかえりました。金田さんは、明治の人というしよに走って帰ったようでした。あとの女人はしりません。

ただ今の出演

黒田さん 古木さん 小島さん 金田さん

小川君 鈴木君 山口君 花房君

特別出演…… 明治大学 大場さん

提供

Kentucky Fried Chicken®

サイクルサッカーのこと

2年-上原秀秋

まず簡単な活動報告から

・春期リーグ戦

1勝3敗 1不戦勝

・関東大学選手権

Aチーム 1回戦敗退

Bチーム 2回戦敗退

・秋期リーグ戦

2勝3敗 2不戦勝

※以上の結果により東工大は、Bリーグ6チーム中第4位でした。

上に見るとより、今年の戦績は全くだめでした。しかし、12月18日東工大において行われる新人戦では、「恐怖の鳥取チーム」が初登場を飾るのです！これは期待できる。あの猿としか思えないふたりがコンビを組むのです。12月18日ですぞ。東工大であるんですよ。万人必見。彼らは今から皆の来てくれることを期待して、お化粧の練習をしています。真赤なルーージュにブルーのアイシャドー、安井君素適よ。

大阪のと根性…富田氏は2年に満たぬ短かい選手生活の末、体のサイズが合わないことを理由に「深っこやし屋」沢木氏と相談しました。彼の弁によりますと、「沢木君のって大きすぎるの。いつも私が女役じゃ体がもたないわよ。今度一年生の中から素適な子を探すことにしたの。もう大体めぼしはついているんだけど。ラフッフッフ。」富田さんと言っとくけど当分の間山口は僕のもの

だからね。僕だって沢木さんとはサイズ合れないんだから。

ぬえみんな聞いてよ。涌島ったらひどいんだから。関東屋千権が終れるとすぐに、僕のことを捨ててしまったの。そして安井の元へ走ったのよ。あんな猿だからんだからあんな奴のどこがいいのかしら。でもそのおかげで僕は、若いピチピチした山口君と一緒に暮れたわけ。やっぱり耳下って可愛くっていいわね。あら、誤解しないでよ、僕だって好きで二人をことして暮わけじゃないのよ。でもサイクルサッカーってふたり、きりどやるでしょ、だからみんな自然に二人をふうになっちゃうの。僕、思うんだけどサイクルサッカーをんて呼びかたやめちゃって「ホモホモサッカー」にした方がいいのよ。

時々思うんだけど、となりでフォークダンスをやっているわけよ。あれを見てて、やっぱりああやって男と女で楽しむ方が自然なのかなって。あの人達っていつも僕らが男だけで楽しんでいると変な目で見るのよ。やっぱり僕達は異常なのかしらぬえ。でもだめなのね僕達って、ああゆうのは合れないわ。

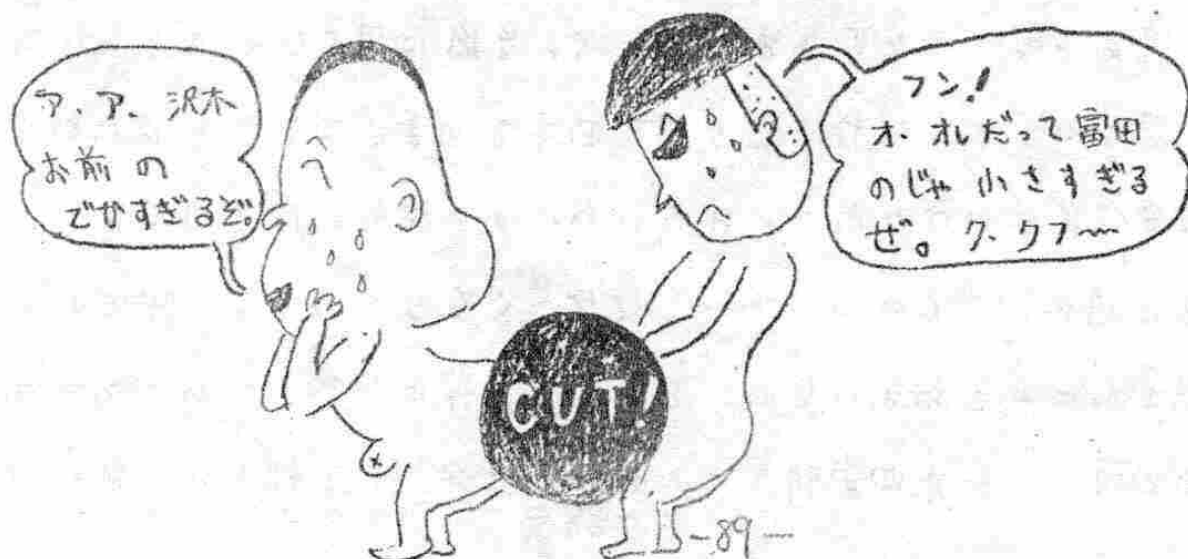
涌島を見てると「ああ、僕もあんな風に男らしくなりたいな」と思うの。だって彼ったら週7回もなのよ。でもさすがに彼も高知原住民にはかなわないわたいね。あの原始人は1日に2つ、しめて週14回だものね。あ〜、負が速くなりそう。よっぽどの人を奥さんにもらぬわいとね。そうそう、僕は提言したいことがあるのです。「一夫四妻制」これを僕は法律化して欲しい。何故か。

金は寒いですよ。とうするとあたたかいふとんで寝りたい。な
んとい、てきも一番あたたかいのは肉ふとんです。とこですず、し
まふとん一枚、かけふとん一枚は絶対に必要です。しかし、それ
だけでは横からスースーと寒気がは入って来る。とこですず左に一
枚ずつ。計4枚必要なのですよ。よって僕は言いたい。「一夫四妻
制を認める。働いて帰って来た男は、あたたかいふとんで充分
な睡眠をとる権利があるのだ。」

話が私事になってすみませんでした。まあそんなわけでサイク
ルサッカーをやっているものは楽しくやっています。この楽しさを
分けて欲しい人は僕のところに来て下さい。顔、サイズ、男役を
やりたいか女役をやりたいか、などの質問をした上で楽しませて
あげるかどうか決めます。メ切は2月末日まで、部屋で受付をや
っています。特にやる気のある一年生を求む。

それから、おひまだったら試合の時見に来てね。僕達、男の人
に見られるとすごく燃えちゃうのよ。

文責—ウルトラオマンタ



'77 My Cycling Report

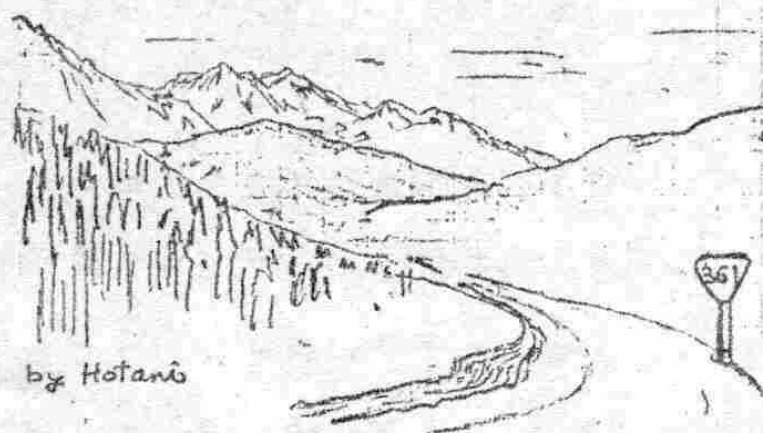
3年 宝谷一夫

朝7時起床、昨日は天気雨に降られて 出鼻をくじかれ気味だったが、今日は五月晴れ、絶好のサイクリング日和だ。朝食を腹いっぱい詰め込んだ僕等二人は、伊那の旅館を出発した。連休の最中とはいえ今日は土曜日だ。通勤、通学の人で混み合う駅前通りをさっと通り抜け、橋を渡るとここからは檜久衛街道だ。しばらく川沿いに走ると町並みを過ぎた頃から道の両側は田んぼになった。ほんの数十分走っただけで田舎道の雰囲気味わえるなんて東京では考えられないことだ。在前方彼方にまだ頂上に雪を抱いた高い山が見えた。

木曽山脈の駒ヶ岳である。後を振り返ると南アルプスの雄大な山並みがかすんで見える。

思わず口笛でも吹きた

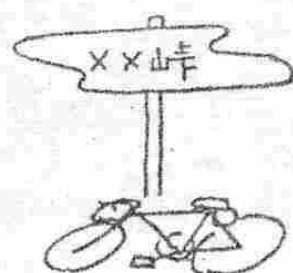
くなるような気持ちだ。実に beautiful ちょっとくどく書き過ぎの概です失礼。道はまだ平らなのでペダルかといんこが。一時間程走ると 近くの山が急に両側に迫って来た。木曽の山並みはもう手前の山に隠れてしまった。やがて舗装もなくなり地道になった。それでも 国道なのかと腹たたくもなるが、地道



地道なりにまた良いものである。カーブを曲がると、先へ張りき
って走っていた鈴木が笑ってこっちを見ている。何と土砂くず
れで道が半分以上ぬまがっているではないか。これから先はもう
自動車は入ってこないんだと思うと何となく誘らしい気持にな
る。ここでしばし休憩した後僕等はグチャッカリ記念写真をとって
出発した。

道はしだいに勾配を増しはじめた。こんな所でへばってたまる
かと力んでペダルを踏み続けるとついに登山口入口にいった。そ
うですこれから先は地図で言えば点線の道つまり登山道です。時
刻は10時を少し過ぎた頃だった。さっそく愛車をかついで登りは
じめた。もちろん押せる所は押した。走っている時は全然使わな
い筋肉を使うのでもう腰らはむがっつりもうだ。まったく自転車は
押すには不都合というよりジャマである。いっそ捨てるか。とに
かく歩く時間の倍はかかるだろう。ハンドルを押す手が汗ばむ。
この稚犬衛街道は現在は信濃路自然歩道に指定されているが、
その昔は「木曾へ木曾へとつけぬ米は伊那や高遠のあまり米」
と唄いながら馬子達が通った木曾と伊那を結ぶ重要な道だった。
まあガイドはこの辺にしておきましてと、押しても押してもなか
なか進まないが途中に小川が流れていたり 堰の横をバラス
よく愛車をかついで通ったりしながら なかなかどうして楽しい
のである。「カンバッチあと30分」とか「もうすぐ昼ごはん」と
と遠足の道案内を示すカンバンがあらち目につく。小岩生の足

であと30分かと思えるがそれがまたどうして時間が食うのです。
トレーニング不足のにたりジャ〜。あともう少しあの角を曲が
れば峠だぞと自分に言いまかせるものの、その度、失望が重な
る。そろそろ腹も減りはじめた。すると前方にくぼみが見えた。
やった峠だぞもうすぐだ。最後はややなだらかになったかもう
押しの一手。ついに峠に到着。この一瞬のために苦勞して参っ
てきたんだ。この爽快な気分はサイフリニアの醍醐味と言えよ
う。今回のフリーランの目的の一つである
山道の挑戦も実行してみるとなるかいい
ものである。僕にとってはとてもいい体験
になった。



—— 権兵衛峠 ぶ52 4月30日 ——

朝7時、もっと寝ていたり気持ちでいっぱいだ。自宅なら即、
この誘惑に負けて寝てしまうだろう。加バツと山とんを蹴って飛
び起きた。まだ体の節々がれたむ。10月の飛騨の朝は寒い寒い。
そして天気もあまり好くない。昨日一晩中に泊まった高専のサイ
クリストと二人だけで食事を済ませ、出発の準備にとりかかった。
彼の自転車は5段変速のスポーツ車で、金がないからしばらくは
この自転車で走るしかないよと言ってた。もちろん輪行車ではな
い。そのガッツさに僕は脱帽してしまう。合掌造りの五箇山YH
の前で記念写真を取り出発した。彼とは行き先が逆なので手を振

って別れた。R156を僕が一人寂しく走りだした。今日は月曜日なのでサイクリストはおるか観光客にもほとんど会わない。ソロツーリングは2年ぶりである。僕が1年生の時に京都神戸を走った時は工具などというものは持たず、メカニックの知識も持っていなかった。今考えるとよくまあ無事に走り通せたと思う。その点今回は用意万全、フロントバックはパンパンだ。ついでにパンも買ひ込み。おかげでフロントバックはパンコオ前。天候は良くなく、曇った空はあいさつ代わりに霧雨までよこして来た。工具は万全であったが出発前の点検に時間をかけているが、た為チェーンとデイルーの調子が悪い。RDのアルビは最近御不快らしくトップに落ちる素振りも見せない。それに釣れてFDのフォレスターも何かもう一本調子でない。デイルーが調子悪いとより坂で本当に困ってしまう。床川に上ったこのR156は到着所にダム



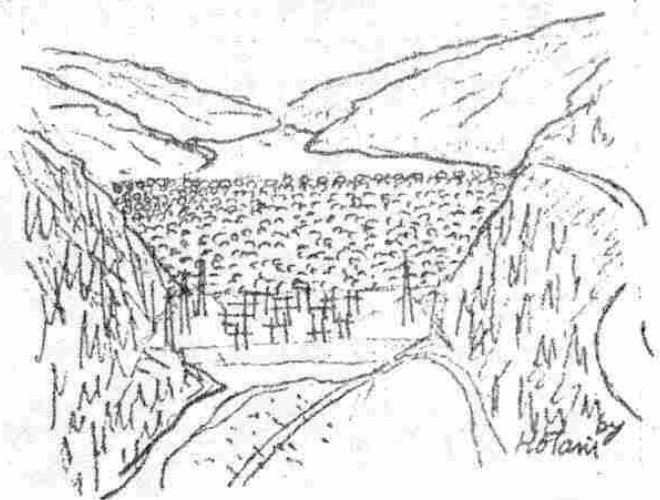
合掌造り

が作ってあって その度毎に急なより坂が現われる。そしてダムだけでなく トンネル工事、新橋工事、新しいダムの建築など各所々が地道になっている。その為チェーンが上下に踊り、とにかく走りづらい。雨は降ったりやんだり、で実に寒い。2kmも続く長いトンネルやまた赤い道路橋、要する姿

のダムがあつたりしておもしろい街道だが やっぱり天気がよくないと今一つ物足りない。

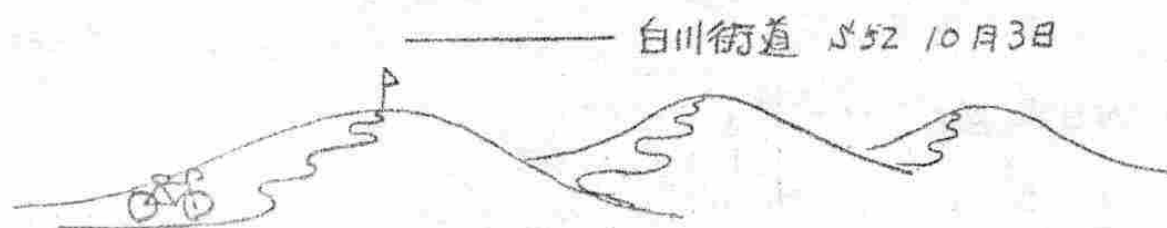
午前10時頃 白川郷に着いた。ここは白山スーパー林道の入口になつてゐる。スーパー林道を少し登つて白川郷合掌村に行った。この合掌村は見学科150円程で 家の中にあがってお茶を飲ましてくいた。家の中のりりにはすすで黒光りしてゐる自在カキがあつてその古さを見せつける。合掌造りは2階3階4階とあつて日本の建築の中では最高の傑作と言われている。皆さん飛騨へ行つたら是非見に行つて下さい。ここで一時間程休憩した後、再び小雨のパラツク国道へ出た。白川街道は両側を山に囲まれて、その間を流れる庄川の狭い岸にハバリツく様に走つてゐる。白山登山口の平瀬についたのは11時半頃だったと云う。ここで民俗館を見物したら 中京11PMの取材車に偶然出合つた。どうも縁側にきまひるせの人が居ると思つたら マスコットgirlでしたか。フ〜ン。

雨が一時やんだのでこの間にキョリをかせこうと思つたが ちょうど昼時なので昼食を取つた。腹半分目程だったが満足して外へ出ると すぐ雨がバラ



—ロックフィルダム— 御田後

パウ、今日は一日中 雨らしい。もう半分やけくそでパダルを踏み続ける。しばらく行くと異様なピラミッドが現われた。あれがかの有名な御母衣ダムか。山と山の間を大きな石が積み上げられて川をせき止めている。いったいどうやって造ったのかね名取君!? ダムを横目で見ながら上り坂を登る。ダムの上まで道は続いている。ミビア〜 白川街道は高山側から金沢へ傾ける方が絶好景である。ダムの上へ出ると満々と水を貯めた御母衣湖が眼前になる。これから先は湖の岸を走るため 比較的スピードが出るようになった。しかしチェーンの具合がおかしくて時々 カチッ カチッと異音を発する。しかたなく降りてチェーンを見ると水溜が一ぱい付着していた。本当にやになっちゃうなあ〜 も〜。油をさして再び走り出し 午後4時には敦戸(R156とR158の分岐点)に着いた。ここで本日最後の見学場 莊川の里を見て 今夜泊まる所をさがした。丁度近くに民宿があったので直接交渉して 泊めてもらった。今夜は腹いっぱい飯が食えるぞ!と思ったら安心感がドゥ〜と押し寄せてきて 急に疲れが出た。今日は天候に恵まれず グラをフカフカにぼしながらか走っていたが、ふり返ってみるとなかなか良かった。今夜は着にでも もう一度訪ねてみようと思っながらフカフカフトンの中に入り込み テレビを見ながら寝た。



2つの一人旅 2年-鈴木 道夫

人間、やる気のないものは、しょせん〜をやらずと決心したところで、睡眠を優先させてしまうものだ。最近つくづくそう思う。ぼくは、高校時代は数学の問題を解くことに生き甲斐を感じていたが、大学に入ってからサイクリング。そして最近サイクリングにこだわることなく、自分の足で行く『旅』というものに生き甲斐を感じている。そこで、今回は、^(後判)今年あまり活動に参加しなかったクラブ活動(これに関しては色々書きたいことはあるが...)について書くよりも、今年行った2つの一人旅について書くことにする。

まず、夏休み(というより、前期) 
をかねて行、た東北・北海道への一
人旅——このサイクリングに行くこ
夏 部屋に閉じこもっているなんて若者
ではない。

とは、既に春休みが終わった時、決定していた。そして夏休みが始まるまで、いつもこのことばかり考えていた。どうしてあんなに一生懸命になっていたのか。今考えると良くわからないが、いずれにせよ、自分の求めるサイクリングはこれだ。そしてそれは今回やらなければならないことだ。と確信していたし、今でもそう思っている。クラブ行事の復命宿をす。ほかして行ったことは、部員、そして両親の反対などもあり、大決心が新んだが、その確信が、結局は、このサイクリングを優先させた。さて、このサイクリングだが、7月9日の午後、胸はずませて出発してから、約

の日間、随分色々なことがあった。そして、その一つ一つがぼくのこれからの生き方に影響してくるものである。長い旅の間、色々な人々に出会った。そして、その一人一人が個性を持っている。色々な生き方をしている。こんな人もいたのか。と思うような人はいれば、どこにでもいるような人もいる。一人で行ったから、すぐに、そうい、た人々と打ち解け合うことが出来た。そして、昔は、人間が嫌いだ、だが、だんだん好きになってきた。この人間嫌いの思想からの脱皮は、今後、ぼくの生き方に大きく影響するだろう。



それから、長い旅だから、色々なところを、色々な状態で走り、そして歩き、とどまった。そしてそれにより、一層自然というものに触れられた。ぼくは自然を、そして、女を愛したい。しかし、ただそう思っているだけではどうにもならない。(このことは、エト祭で田尻さんの話を聞いて一層、そう思ったのだが...) ただ、おこがれだけで終わるのではだめだ。やはり、太陽の下、そして雨の中き... 大自然の中で喜びを感じ、苦しみを感じ、ときにははいびけ、そしてときには無感動な状態になっても、その中で、直接それを感じることにより、始めて愛せるのではないかと思う。この旅によって自然というものに対する感じ方も大きく変わったと思う。また、それに関連して、この旅で、完全に登山の味をしめてしまった。やはり、人間は自分の足で一步一步進むのがいい。(登山に限らず) 大雪山、そして

て、雌阿寒岳、阿寒富士への登山は、ぼくの登山の第一歩として大変ふさわしく、有意義なものであった。そして野付半島を歩いたことも。

そして、秋休みには大杉谷 --- これが今年2つ目の一人旅である。大杉谷に秋休みを利用し行くことも、春休みの後半、既に決定していた。(その後、色々と決心が変わり、だが、結局...)

実は、大杉谷には、今年の春、行くつもりだったのである。それが、色々と事情(accident と 雨)があり行けなかった。しかし、春合宿で大杉谷一本で、素晴らしい旅をした人達がいた。彼らの話を聞くと、もう行かないわけにはいけなくなった。好条件が重なってれば、ぼくと曾我部の方が先に大杉谷に行っていたのである。(そういった意味でも、曾我部、そして都合で好天候の中を渡り、大杉谷班と別れた名取さんには、是非行ってもらいたい。) 彼らの大杉谷との出会いも素晴らしいものであったが、ぼくも、大杉谷と素晴らしい出会いが出来た。雨の中を、暗闇の中を、朝4時半に浜松の家を出発した。5段変速自家発電(高校の時に通学用に利用していた。)号は、ひたすら大杉谷を目指して走った。やがて明るくなり、そしてフェリーで海を越え、ひたすら走った。やがて雨も止み、雲も消えてきた。紀伊半島を走るのは春以来であるが、どうやら紀伊半島の感じがつかめてきた。(そして今回の旅で、一層愛着がわいた。) 平和な山間の村にも開発の手は押びてきている。それは、無くてはならないものだ。しか

し、いつまでも静かであってほしいと望んでしまう。やがて宮川は谷間を流れるようになってきた。そして大杉谷部落がそこにある。(昔は宮川貯水池もなく、滝と溪谷とが互いに連なり合いながら延々40 km にわたって峡谷美をほこっていた。) 大杉谷は静かな谷間の部落である。一日のうち、陽のあたるのは一体どのくらいだろうか。我々は、たまに旅行に行くだけであるが、その人々は、毎日、そこで暮らしているのである。ぼくは暗くなってきた頃、松原というところの西村屋旅館に宿を決めた。ここからなら宮川湖も、その先にある登山口もそう遠くはない。西村屋旅館では、夜、隣りの部屋の人達が酒を吞んで騒いだ。なかなか眠れず、窓を開け、空を眺めた。すると、谷間に星が輝やいていた。明日は晴れた。雨の中を走ってきて良かった。と思った。

次の日は、ほどよい頃起きて快調に出発した。もう野原には太陽がいっぱいの時間なのに、大杉谷には、山と山との隙き間から光線が円錐を作っているだけだ。そしてその光が、とてもありがたく思う。川の上には smoke on the water, そんな冷たい空気の中をえっちら、ほっちら走ってゆく。冷たさと静けさが一緒になるとすがすがしさを与え、そこに光が射すと静かな喜びを与える。そんな中を、車が走って行った。そして静けさにあらためて気付いた。やがて宮川湖に着き走って行くと、だんだん見覚えのあるところに近すいてきた。(実は、今走ってきたところだって、ずっとならぬ。昔我部と一緒に走っているのだ。) それは、船着

き場の売店であり、新大杉橋である。ぼくは春のことを思い出して立ち止まった。やがて登山口に着き、発電所に自転車を預け、歩きはじめた。大杉峡谷は、思っていたより明るかった。それは天気だ、たせいもあるだろうが。水が青く澄んでいる。そして岩に砕け、白くなる。谷にももう太陽が照っている。思ったより暑い。夏と秋の中間のようだ。ぼくは滝があるたびに水を呑んだ。全く気付かうことなく。山のて、ぺんから水が落、こちらできているような千尋谷……以下詳しく書いていたら切りがない。

平等峠というところで昼寝をし、弁当を食ってから桃木小屋へと向かった。桃木小屋、そして、そこのおばあちゃんの話は、春合宿-大杉谷班の人達から何度も聞いていたのでとても楽しみだった。木間に川を隔てて、思っていたよりずっと立派な小屋(というより山の家)が見え、その前に吊り橋がかかっていた。吊り橋には洗濯物が干してある。吊り橋を渡り行くと、石段のところに、おばあちゃんが立っていた。これがおばあちゃんとの初めての出会いである。思っていたとおりのいい人で、思っていたよりずっと元気であった。そして古木たちのことを大変良く覚えており、よろしくと言っていた。この先、まだ書きたいことが一杯あるが、一体何枚になるかわからなくなってきたのでこの辺にしておく。

(以上、題して、大杉谷との出会い-前半-)

最後にふたこと…「大杉谷に行こう。」「ゴミは持ち帰ろう。」

小野賢治

本格的にサイクリングを始めて一年半。最初は「かゝたるい」と思いつつのぼっていた峠越えも、いつの間にかこれをめざしてツーリングに出かけるようになってしまった。峠越えにもいろいろあるが、最近最も印象深い時は、秋休みのフリーランの時に越えた野麦峠である。その日、私は桑鞭高原から高山まで、約94kmを走る予定で朝8:30に出発した。本日の天気はくもりのち雨とのことであった。スーパー林道を通って、野麦峠の入口である寄合渡に着いたのは10:40ごろであった。ここで今日の宿泊の手配をしようと思って近くの食料品店に公衆電話はどこかと聞いてみたところ、公衆電話はないが、うちの電話を使ってもよいとのことであった。その時ずいぶん田舎に来たんだほと思いつつ、店にあるハンドルをグルグルまわしてかける電話で宿泊の手配をした。峠の頂上に着くのは昼になるだろうから、パンでも買っておいこうと思ったがあいにくパンは売ってなかったので、ビスケットを買っておいた。

さて峠に向けて出発である。雨は朝方少しふったが、今のところやんでいる。登る高さは約550m。三国峠を越えた者にとってはそれほど恐れる高さではない。ということで何の不安もなく走りだした。最初のうちは舗装路で、快適に走っていたが、それも少しでジャリ道になり、登りが急になってくる。そしてこのあたり

で、ついに雨がぱらぱら落ちてきた。まあ小降りならどうってことは無いと思ってみるものの、不安も次第に高まってくる。あの登りの時の何ともいえぬいやな気分の復活である。だいぶ疲労もしてきて、休憩も頻繁になる。この状態が続くならまだいいのだが、そのうちついに雨が本降りになってしまった。着替えはあまり持っていないのですぐぬれになると困る。よしということでもこで用意させたポンチョを登場させた。これで楽になるのではと思って走り出したものの、苦しさはどんどん増すばかりであった。ポンチョで雨は防げるが、中はぬれて、着るものは汗でビショビショになる。直路は悪路で時々後輪がから回りしたり、バランスを失なっていたおれそうになる。休憩にも雨やどりを避ける場所がないし、体を動かさないと冷えてきてカゼをひく。つまり何がなんでも走らねばならない事態に追い込まれてしまったのである。不安も高まる一方で、頂上に着いたとしても雨やどりを避ける場所があるだろうか。登りは体を動かしているからいいが、下りになったらさらに冷えてしまう。そうしたらカゼをひいてしまってせっかくの旅行もここで終りになってしまおうのだろうか、察々さまざまな不安が頭をかすめた。途中、直路工事をしているおじさんに、「もう半分位登ったところだ」と聞いて、少し元気がでてきて、とにかくがむしゃらに登り続けた。しかしながら体力の方が限界に近づき始め、激しい疲労のために、体が冷えるのものがまわらず足を休めることがしばしばあった。腹もぺこぺこになり、頂上

に着いたら食べようと思っていたビスケットも途中で封を切って
しまっ、まるで飢えた獣のようにむさぼり食った。そしてさら
に登りつめていって、頂上に着いたのが午後1時であった。しか
し頂上に着いてもいつもの感激ほどはなく、雨のために視界が数
十メートルしかきがないので、景色どころではなかった。とにか
く、雨やどりの場所がほしかった。見るともう少し登った丘の上
に屋根のついているところがある。とにかくそこへ行ってみよう
と走り始めると、アッ8888なんとすぐそこに小屋があるではな
いか。しかもちゃんとした休憩小屋が。ああ助かったと思って自
転車を置いて中で休ませもらった。その小屋の名は「お助け小屋」
というのであった。……

そう。つまり全く私のとりにし苦労であったわけで、出発前に
この時についてよく調べておけば、余計な心配などしなくて済ん
だのであります。しかし今にして思えば、こういう峠越えも独特
の味があって、いいものだという気がします。



エピソードフリーラン

高野俊彦

改札の長い緊張を抜けると成田駅であった。ホームに、何やら大きく重そうな袋が2つ置いてあった。

「やった〜」

150円の切符を持て（西口は、70円）僕たちは、ホームにあつた輸行袋をかつぎあげ、さっと電車を乗ってしまった。

事の始まりは、こうである。その日の朝、僕と西口は房総半島先端の館山駅で自転車を組んでいたのでした。そして、海沿いの道を、話しをしながらあるいは、カニとたわむれ、海に落ちて、ゆくりサイクリングを満喫していたのでした。やがて、お日さまが少し西に傾きかけたとき...

「おい、たーるいなあ〜。何km走ったんだ？」

「えーと、このあたりだよな」



「なに!? まだここかよ。じゃあ、30kmぐらいじゃないか。」

「**ガ**ビ〜ン。もう100kmは走ったと思たぜ〜」

「そっ、そ〜だよなあ。」

「じゃあ、とてもあすじゅうに、蛇波になんて行けないじゃん。」 「無理。無理。」

「早く蛭波ト行きてえなあ〜」

「お〜、行きたい、行きたい。」

「じゃあ、輸行しちまおうぜ。」

「まあ、いいけどぬ。」

というようなわけで、その日の夕方には、自転車を分解し始めていたのです。館山駅から、2つ先のその駅は、いなかの古びた無人駅だったので、切符を買わずに電車に乗ることになったのです。そして、成田駅まで、そのまま乗るときに僕たちは、輸行袋をホームにおいてホームから、外に、とび出たのです。

そして再び成田から、2つ先のいなかの駅であり僕たちは、人のよさそうな駅長さんにお願いして、待合室で泊めてもらうことになったのです。

夜空にきらめく数えきれない程の星、そして虫の音。僕は、こらえきれない調子で、

「おい、やろうぜ〜」

「あ、オレもだ、よしやろう、やろう」

2人の影は、暗やみへと、消えて行ったのです。



次の朝、4時半に、1番列車が けたましい音で通過したときは、大きな荷物をかついだ行商

のおばちゃんたちが待合室にはいてきたのでした。

才2部「波は、広か、た」

畑の中をどれだけ走ったのでしょう。突然、一大未来都市が、目の前に、うかび上がりました。

「おい どうやら ここは、大学の中らしいぜ。」

「どうかな ～」

「どうも、んかいないな ～」

「どこが本館なんだ？」

「あ、あの手に、きいてみよう。」

「よし」

「あ～ 消えちゃった」

そんなことをしているうちに、ようやく大学の中心らしいところにたどりつきました。かこいい建物、ロマンス坂など問題にならない程、雲田気のおい散歩道として女の子、とにかく最高の楽園でした。

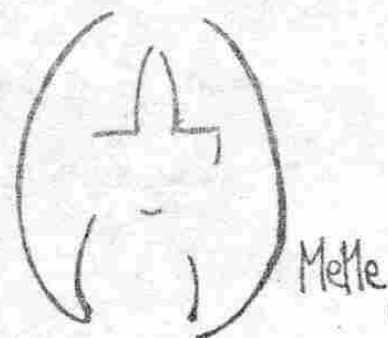
「おい、大学の中パブがあるぜ」

「あ、ホントだ、ホントだ。」

そして……

「あ、純子ちゃんだ。おーい おーい、純子ちゃんじゃないか？」

「え、ちょっと待て、え～？……タカくん？」



「うん」
「えー、どうしてこんなところにいるの？これから、
英語なのよ。夜、遊びに来てネ。」

「うん、絶対行くよ。」

向こうから、自転車に乗ってやってきたのは、中学の時、
同じクラブだった綾子ちゃんなのでした。

その夜、生まれて初めてはいったきらびやかな女子寮
に、ぼくも西口は、すっかり酔いしれて、トランスに
熱中しているうちに、いつしか時計は、夜中の3時
をさしていたのでした。.....

フカフカのベット、新しいツーツ、絨波の寮は
すべての面で、めぐまれ満足のいくものでした。

絨波ですごした4日間は、矢のように過ぎ去りました。
その間、いろんな人と出会いました。大学のまわりで
やと見つけた赤ちょうちんのおばさん。以前、石
川台に住んでいたのに、東工大を知りませんでした。
そして、麻雀をやった仲間たち。いっしょに
走ったサイクリング部の女の子。そしてそして.....

サイクリングの楽しさは、走りぬける町、訪れる町
の雰囲気を感じとれるところにあると

思います。カンカン走って、距離雫や 登。た 標高差の
 みに 気をとられても、おもしろくないと思います。
 ゆくり、景色をみながら、あるいは話をしながら、
 そしてその土地の人々にあいさつをしながら、旅の
 気分を味わうのが、最適であると思います。自転車
 でしか出来ない 静かで、のんびり 気ままな旅、
 ねむくなたら、野原に自転車を倒して 昼寝をし
 てしまうようなのびかな サイクリング、そして人との
 出会い。そんなものを大切にしたいと思っています。

。最近読んで おもしろかった本

「僕、何」

「そっとサヨナラ」

「遠藤同作 オモイユモアハ 説集」

「他人の顔」



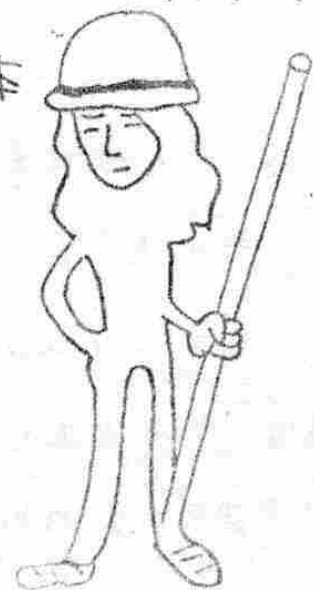
。最近読んで つまらなかった本

「雪国」

「エピソード科学史 物理編」

。途中で挫折した本。

「日本の歴史 オ1巻」



初めてのフリーランとOBラリー

—フリーラン編—

7年 山口 晋二

10月2日

やっ、と前期の試験も終わり、いよいよ初めてのフリーランの出発の日がやってきた。午後9時部室を出発。部室にはたくさん人が居たがみんな冷たい。かろうじて高野と西口に大岡山の駅まで見送らせて目黒線に乗り込む。いざ小川と2人だけになると、じわじわと不安感がオレを襲ってきた。もちろん、コースで夜小川に襲われなにかという不安である。思えば2,3日前、小川はオレのケツの穴をリーチしたとわめいていたのであった。小川のこゝだから本当にやりかねない。

11時58分上野発。妙高5号は意外にすいていた。乗客が数えるほどしか居ない。1人で何ボックスもとることができたが、そんなバカなこともしていられないので1人で1ボックスとって寝ることにした。

10月3日

5時39分豊野着。結局2時間位しか眠れなかったが、すがすがしい朝であった。何といっても空気が澄んでいる。天気もいい。そんな中で輪行をすませ駅前で写真を撮って、いざ出発。

快適そのものだった。が出発して15分も走ったところか、小川が突然後ろからわめいた。

「おーい。パンクだあ。」

オレはアゴが落ちた。仕方がないからパンク修理につきあい再び出発。なんのかんのいいながら志賀草津道路に入り、10%の坂が続く。やはり睡眠不足のためか、すぐに足がきれ、まいってしまった。休憩しているとすぐ眠たくなる。小川は路肩に乗り上げてはガタンと落ち、それを繰り返している。あれでよくもまあナガミでないことだなあと感じながらオレはウトウトと走った。

やっとの恩いで今日の目的地熊ノ湯ユースに着いた。このユースは何と熊ノ湯ホテルとい、しよになっている。フロントで受付をすませると、オレたちは部屋に荷物を置いてま、先に温泉にはいった。温泉からでて気が付くとゲーム場に足を運んでいた。初日からこんなことで先が思いやられると思ったがけ、こう楽しい。免許とりたての小川はレーシングカーのゲームをして得意がっている。その後夕食までひと眠りして、夕食後また温泉にはいりそれから寝たのであった。

10月4日

非常によく眠れて疲れもとれたようだ。しかし外は雨。心が重い。オレは部屋にサンバイザーを忘れてきてしまったのだ。あれがないと雨の中の走行、とくに下りはシビアである。仕方がないからホテルの売店で500円もだして買った。

やみそうもないので雨の中を出走。しかし思ったほど雨はひどくなく、難なく渋峠に着いた。雨とはいえやはり紅葉は美しい。少し休憩した後、軽井沢のユースをリーチして雨の中を白根山ま

て下った。観光バスが駐車してあるのでもうやら白根山に書いたらしいがガスで何も見えな。オレは高校の修学旅行で一度来たことがある、だから真白いガスのむこうに黄土色の白根山を見ることができた。

「よし。上まで登ろう。」

オレたちは細い道をチャリンコで登っていった。が、少し歩くと道がこわれていて道ではないところを登らなければならぬ。こんなはずではなかった。2年前に来たときはちゃんと頂上まで道があったのである。しかしオレたちは引き返しはしなかった。押しとっかぎでゆくり登っていくと復たから人声が聞こえた。振り向くとガスの中から2、3の人影が登ってくる。やばい。こんなところを見られたら、「バカや、でさ。」と言われそうである。オレたちは必死で上がった。

昼食後白根山を背にまた下っていく。いつの間にか雨もあがり非常に快適で、思ふ間もなく草津に着いた。そこでオレは自分の着ているおニューのウィンドブレーカーを見てショックを受けた。何と泥玉模様になっていたのである。畜生。小川め。覚えてる。

草津道路を出て国道146号線にはいる。最初にきちがいみたいな上りがあった。オレたちはそこでもうめげてしまった。急な上りの後はゆるやかな上りが遠々と続く。平坦に見えたがやはり少し上っているらしい。全然進まないのである。はたして夕方までに軽井沢に着けるのだろうかという不安が頭をよぎる。足がき

れた。昨日の熊ノ端までのときと同じ状態になってしまった。もうこうなるとは休み休み行くしかない。小川が、止まるうとして足をトラウリップからはずした方と逆の方へ倒れて転倒。バーテープに傷がついた。オレは笑った。まだ笑うだけの元気はあった。小川はこれが初こりびである。何としようばい初こりびである。思い出すとまたおかしさがこみあげてくる。

さ。さまでずと前方に見えていた浅間山がだんだん近づいてきて、やっとの思いで浅間山の真東のところまでたどりついた。あとは軽井沢まで下るだけ。無性に嬉しくなった。あ、という間に下りおわりノ8号線を東へ走る。あの池、この橋、あの踏切。見覚えのある景色だ。思えばひと月ほど前、ESCAラリーのオリエンテーリングでこのあたりを走りまわったのである。だからまだ記憶に新しい。小川とあの橋がどうのこうのと話しながら走っていくと。

「がんばってエー。」

という声がした。オレたちはと、さに振り向き。

「おお——。」

といいながら必死で手を振った。するとその2人の学校帰りの女学生はキャハハと笑っていた。しかしオレたちは非常に嬉しかった。このフリーランでサイクリストとしてそういうふうに声をかけられたのはこれが初めてだったのである。

なんとか暗くなる前にユースに着くことができてホッとした。

このユースは軽井沢友愛山荘というしょ、とかわ、た名前である。
風呂に入、て汗を流してから夕食を食べた。昨日の熊ノ湯ユース
はホテルのような感じでミーティングもなかったが今日はあるよ
うだ。食堂にみんなが集ま、てきていよいよミーティングが始ま
る。3:2位の割合で男の方が多し。2人1組にな、ているんな
ゲームをやった。オレは当然女の子と組んだが、小川はや、ぼり
ホモの気があるらしく野郎と組んでや、ている。オレと組んだ女
の子は九州のOしで、ユースは初めてだそうぞ。話してるとな
州訛がとってもおもしろい。連れがもう1人いてそ、ちの方はいか
にもOし風であ、たが、彼女はあまりOしという感じではなかつ
た。最後にはほとんどの女の子がエイトマンを踊らされたりして
非常に楽しいミーティングであ、た。

偶然小川と同じ高校出の人がいて、小川はミーティング後その
人と土佐弁で10cの話をふけ、ていた。オレはそ、のよ、こで
今度はまた別の大阪の女の子と話していたが、すぐに消燈時刻に
な、てしま、た。

10月5日

どうやら今日は天気がよさそうぞ。ユースの前で九州の二人連
れと大阪の女の子ににもはい、てもらい写真を撮、てから、さ、
そうと出発。今日の目的地は麦草ヒュッテだ。今年の予備合宿で
先発隊が麦草を登、たからい、るい、るとうわさを聞、いてい、る。まあ
たいしたことはい、ないぞら。

ゆるやかな坂を下、ていくと間もなく佐久市に着いた。佐久市の市役所があ、たのでそこで休憩することにした。非常に立派な市役所だ。建物の裏側は広い公園のようにな、てあり、芝生など手入れがいき届いていてとてもきれいだ。パンを食べて少し休憩した後、小川が市役所の観光課へ麦草ヒュッテの電話番号を調べに建物の中に入、ていった。オレも行こうとしたが、小川が一人でいいと言、たし、チャリンコもみていた方がいいと思、たので残ることにした。しかし10月だというのに何という暑さなのだろう。太陽が容赦なく照りつけ、じっとしていても汗ばんでくる。オレは太陽を見上げて

「アホか！」

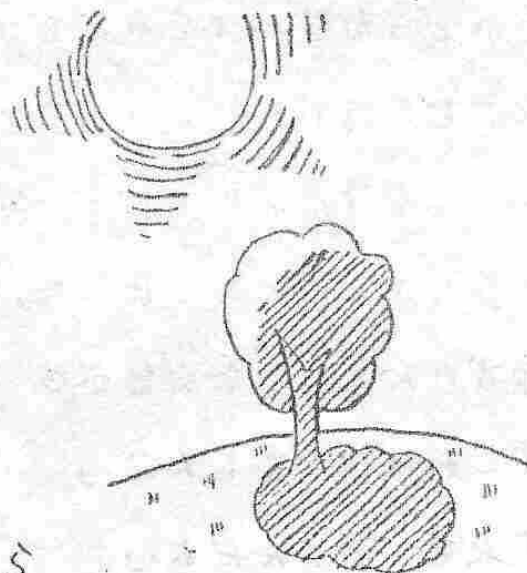
と言、てみたが無視された。

とうとう暑さに耐えきれず、オレは木陰へい、て芝生の上に寝ころが、た。木の枝ごしにコバルト色の空を眺めながらいるんなくださ

ないことを考えていたが、さすがに10月だけあ、て風は涼しく5分もたたぬうちにオレは寒くな、てしま、た。何ということだ。日なたにいと暑くて日陰にいと寒い。

「アホか！」

とオレは風に言、てみたがやはり無視された。それにしても小川は遅い。小川が建物の中に消えてからもう30分近くになる。



あいつのことをたからき。と市役所のおっさんといろいろと話しこんでいるに違いない。オレは建物の入口に向かって

「アホか！」

と言ってみた。すると小川が出て来た。あいつはやっぱリアホだ。結局ここに着いて約1時間後にここを出発した。

麦草峠の方へ国道を離れてしまえば食事をするところはないだろうということであまり早い昼食にすることにした。食堂らしきところがあったので入って行くと、客は1人もいないらしくとても静かだった。店の人らしいおばさんが奥にいたのでやっていいのかどうか尋ねるとやっていってと答え。オレたちは宴会場のような広い座敷にあがらされた。水をもらようと持ってきたもののまたないボトルをどこに置こうかと一瞬間、だが、座布団の横の畳の上に置くことにした。またないボトルといえば、この間、親戚の人とこんな会話があった。

「これは何するもんだ。」

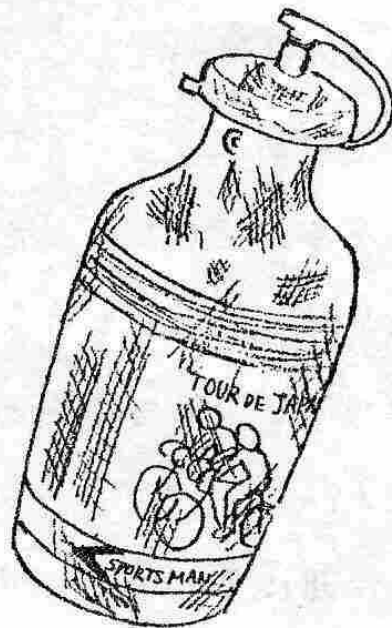
「水を入れるんだよ。」

「その水は何に使うんだ。」

「飲料水だよ。」

「……………」

サイクリングを知らない人から見れば、このボトルは飲料水を入れるにはきたなすぎ



るのである。親子丼を食べながらオレはその一件を小川に話した。勘定を払ったときにオレたちはボトルをさし出して

「すみません。これに水を入れて下さい。」

と頼むと、おばさんは水を入れながらこの水は何にするのかとオレたちにきいた。オレたちは一瞬顔を見合わせて笑ったが、飲料水だと答えると少し驚いたような顔をしてボトルを渡いだした。しかしそんなに簡単におちるわけがない。

「内側はきれいですからいいです。」

と言うと、おばさんもあきらめたらしく、水をいっぱいに入れて手渡してくれた。

いよいよ麦草峠にセリ。天気もいいしからだの調子もいいし言うことなし。国道141号線から離れて登っていく。そんなにたいした坂ではない。それに標高100メートル毎に標識があるので気分的にも非常に楽である。標高1100メートルを越えともう人家もみあたらなくなった。それにしても暑い。まるで真夏のようなのである。オレたちは上半身下着1枚で走ることにした。1200、1300とたんたんと登っていく。こんなに登りが苦しく感じられないのは初めてだ。小川はタバコを吸いながら走りそのタバコの火を走りながらどうやって消そうかとまじめに悩んでいる。まったくバカやっているとしか言いようがない。標高1600メートルを過ぎるとさすがに風が少し冷たく感じられ、上に1枚着て走ることにした。

標高1700メートルあたりであらうか。前方から何かがかなりのスピードで走って来る。

「あゝ！ チャリンコだ。」

2台のチャリンコが下って来る。オレたちは必死で手を振った。1台目が走り去り、そして2台目とすれちがう。何と2台目に乗っていたのは女の人である。なんとなく夫婦という感じであつた。「オレはあんな結婚がしたいんだ。」

と小川は自分の顔のことをたなにあげて言った。それにしてもこんないい季節に全国のサイクリストは一体何をしているのだらう。このフリーランでサイクリストに出会ったのはこれが初めてである。などと小川とボヤいているうちに麦草峠に着いてしま、ちゃったりなんかして。

麦草ヒュッテには客は1人もいないようだった。受付で住所を人かを書きながら、小川が

「今日の予約は僕達の他に何人くらいいますか。」

と尋ねると、

「女の方が2人です。」

という返事が返ってきた。オレたちは期待に胸がはずんだ。と、ちょうどその時女の人が2人入って来た。予約の人たちだらう。

「……………」がビーン。だめだこりゃ。」

顔はけなふまでも愛想も悪い。それも2人そろって。見事に期待を裏切られてしまった。続けてヒゲをはやした男の人が入っ

て来た。どうやら飛び込みの客らしい。結局客はこの5人だけで、オレたちとヒゲの男の人は屋根裏部屋のような部屋へ連れていかれた。そのヒゲの男の人は大宮の人で"なかなかいい人だ。夕食後その人のおごりでワインを飲みかわしながら いろんな話をした。

10月6日

今日もいい天気のようにだ。今日の予定はまた来まってない。とにかく白樺湖まで行こうということになった。やうべワインをおごってくれたヒゲの男の人と写真を撮って出発。

麦草の下りは予備合宿で金井さんがこらんでいる。気を付けなければならぬ。オレはまだ一度もこらでないし、バンクもしてない。これだけがオレの自信である。しかし、下り始めて1分後にはもうそんなことはオレの頭の中にはなかった。急峻の下りは悪天候のためそんなにおもしろくなく、たから、ここは十分下りを満喫したいのである。

2, 3回ゆるやかなカーブを曲がって直線へ。オレはペダルの回転を速め小川を追い抜いた。抜き終わると待っていたのは急カーブであった。オレは左カーブには少し自信があったし対向車も来ていなかったのど、少しふくさんでいけば曲がれるとふんた。しかし甘かったのである。道路の端の方には砂がたまっており、そこに前輪がさしかかるやいなやスリップしてオレは左肩から倒れた、頭を打ち、背中左半分で滑っていく。とうとうやってしまった。オレの初こらびである。ところがそれだけでは終わらな

った。新たな衝撃がオレを襲い、次の瞬間オレは自分のチャリンコにエゼがタメをくすり完全に身動きがとれない状態になってしまった。オレは何がどうなったのかさっぱりわからなかったが、小川の声がしてすべてを悟った。オレがこるんだとこるへ小川がつっこんで来たのである。オレは身動きがとれないため小川にチャリンコをどけてもらって起き上がった。からだのあちこちが痛かったがそれよりもチャリンコの方が心配だ。ここで走行不能なんてことになるのはたまらない。それにオレはまたこのチャリンコのお金を払ってないのである。ラッキーなことに故障はおるかバーテープに傷さえもついてなかった。あんなに敷しくこるんだのに。ラッキーとしか言いようがない。しかしおニューのウィンドブレーカーに穴があいてしまったのはいたかった。ゆっくり下ろすということになり、ブレーキの調子を見てからまた下っていく。麦草ヒュッテをたって何と5分後の出来事であった。

迷いながらなんとかゼーナスラインに入り登っていく。坂はそんなにきつくなく、目の前には蓼科山がそびえていた。

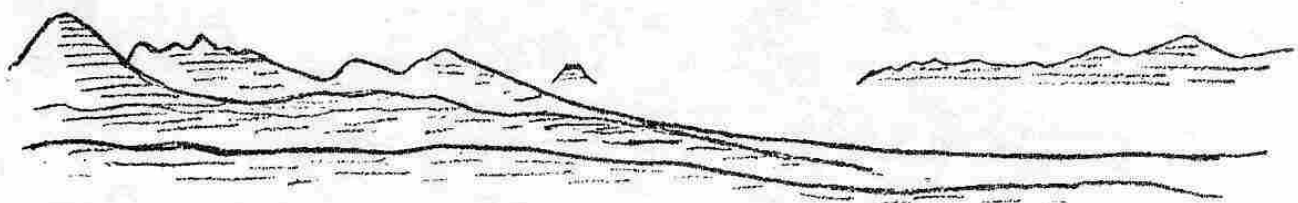
難なく白樺湖に着いた。修学旅行の制服を着た学生たちがうようよしている。昼食にはまだ早い時間だったので20分ほど休憩して霧ヶ峰へ登っていく。霧ヶ峰の富士見台というドライブインで昼食にすることにした。中に入って注文をすると、店のおばさんが、

「今日は天気がよくて富士山が見えるんですよ。」

と言ったので、オレたちは驚いて窓の外を見た。あれが富士山か。ハケ岳の山すそが懸垂線をなしていてその上に小さな山がちょこんとのっている。日本一の山もここから見ると小さく見えるものだ。

結局今日美ヶ原の山本小屋まで行、ちやおうということになって出発。途中諏訪湖が展望できたりして非常に見晴らしがよい。気分爽快であった。和田峠で有料道路を出て中山道（国道142号線）を和田村まで下る。トラックが多くてとても中山道というイメージではなかった。あ、という間に和田村に着いたが問題はこれからだ。和田村の標高は約900メートル。山本小屋は標高2000メートル以上ある。つまりこれから標高差1000メートル以上も登らなければならないのである。それに今から行く道がどんな道であるのかさえも知らないのであった。とにかく、水を補給してから、山本小屋を目指して和田村をたつことにした。

両側には山が切り立っており、その間を溪谷沿いに登っていく。ゆるやかな登りで道は狭くそれでも舗装はされてあった。少し行くと道端にバスの停留所があった。和田村から山本小屋までバスが通っているらしい。止まって時刻表を見てみると1日に数える



ほどしかない。しかしオレたちが山本小屋に着くまでに一台バスに抜かれることが予想された。それにしてもバスが通るとは思えないほど道は細い。どこかのサイクリングロードのような感じである。

地図の上で自分たちのいる位置がはっきりとはつかめなかつたが、三分の一位来たと思われるころからだんだん坂がきつくなってきた。そして半分位まで来るとますますきつくなり10%をかくく越えるような坂が現われた。

もうそろそろバスが登って来るだろうから休憩しようとして小川が時計を見て言ったのでそうすることにした。道が狭いので、バスに抜かれるときはいずれにせよ止まらなければならぬのである。パンをかじりながら小川が言った。

「おい、山口。バスに女の子がいっぱい乗ってるといいな。今頃の時間に上に上がるってことは今日は山本小屋に泊まるしかないだろう。なっ。」

言える。鋭い指摘だ。さすがのオレもそこまで考えなかつた。小川君らしい。しかしバスはなかなか姿を現わさない。かたも冷えてきてしまったので仕方がないから出発することにした。

「なんのかんの。」と言いながら登っていくと、4、5人の人夫が工事をしていた。オレたちは自分たちの位置を確かめるために止まって尋ねてみた。するとまた半分位だろうという返事が返ってきた。もう三分の二位来ただろうと思っていたのに。こんなこ

とならなきゃければよかった。なにか損をしたような気分である。オレたちは礼を言っ、また相変わらずきつい坂を登っていた。

少しいったところで、上の方の山はだに道が見えた。あんなとこまで登るのがかと思っていると、そこを車が通過するのが見えた。こっちへ下、て来る方向である。その車がオレたちとすれちがうまでにどのくらい時間がかかるかであの上に見えている道までどのくらいあるか見当をつけたことができないと思いながら登っていた。しかし車はなかなか来ない。4、5分後や、と姿を現わしオレたちとすれちがった。なぜそんなに時間がかかったのだらう。もしオレたちとすれちがったときぐさのスピードでずと走、て来たのだとしたら、あんなまで相当あることになる。それとも途中で止まっていたのだらうか。あれこれ考えながら次のカーブを曲がった。その瞬間解答がでた。何と残酷にもアスファルトはそこまでしかなく、そこから先は未舗装だったのである。いつかはこうなるだらうと予想はしていたがやはりショックであった。

ジャリ道に入、てからも相変わらずきつい坂が続く。どちゅうかふともなく押そうという意見がでてオレたちは押すことにした。それでも30メートルほど押したところでやっぱり乗らうということになり再び乗、て登、ていく。一度押しをだして気分が楽にな、たせいか、登りが少し楽になったような気がした。

それからたんと登、ていくと、オレは自分のチャリンコが

異音を発しているのに気づいて小川を止めた。マッドガードのかくしねじがゆるんだのである。後輪をはずしてねじをしめる。そんなに時間はかからなかった。水を少し飲んで出発しようとしたとき、後ろから車の音がしたので振り返るとバスであった。オレたちはバスのことなんかもうすっかり忘れていた。バスがオレたちのそばを通る。オレたちはバスの中を見た。小川が嬉しそうに大きな声をあげた。

「おっ。いる、いる。」

女の子が何人か乗っているのが見えたのである。しかし次の瞬間も、と嬉しいことがあった。バスの後ろの窓から女の子が2人オレたちに手を振っている。

「あれっ。あーっ！」

オレたちは手を振るのも忘れ、彼女たちの方を指さして叫んだ。信じられない。手を振っているのは、なんと軽井沢のユースで会った九州のりし2人なのである。オレは自分の目を疑ったがやっぱり間違いない。オレたちは必死でバスを追いかけた。が、しょせんバスとチャリンコ。それに登り、かなうわけはなかった。みるみるうちに離されてとうとう見えなくなってしまった。

しかし、オレたちはいっぺんで元気になった。山本小屋まで行けば彼女たちに会えるだろう。早く山本小屋に着きたい。その一心でパダルを踏み続けた。

や、との息いで山本小屋についた。山本小屋の前には、彼女た

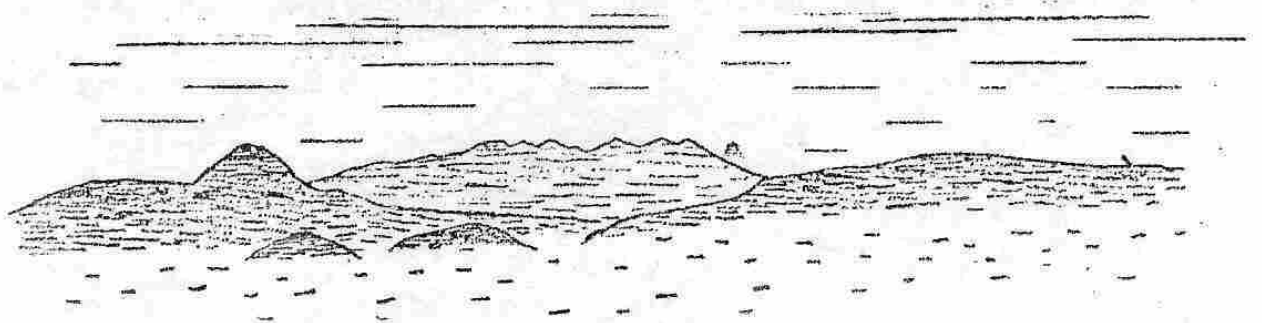
ちを乗せてさっきオしたちを抜いていったバスが止ま、ていたが、当然そこにはもう誰もいない。オしたちは山本小屋の中へ入、ていったがそこにも彼女たちの姿はなかった。バスはすいていたので誰かにきけばわかるかもしれないと思い、同じバスに乗って来たふししい人に彼女たちのことをきいてみると、ユースの方へ行、たんじやないかということだった。ユースは百曲りという遊歩道を40分ほどいった三城というところにある。ガビーン！せ、かく会えると思っ、て一生懸命登、てきたのに。

彼女たちのことで頭がいっぱいで気がつかなか、たが、夕暮れの山本小屋からの眺めは最高であった。霧ヶ峰の女性的ななだらかな曲線の左の方に蓼科山がそびえ、そのむこうにはハケ岳が連な、ている。今朝あのハケ岳をた、たとはとても思えなかつた。

山本小屋は、食事と部屋はよか、たが非常におもしろくなかつた。退屈なのである。8時頃売店の方へ行、てみたが真暗で誰もいない。仕方がないから部屋に戻、てもう寝ることにした。

10月7日

6時。まず小川が起きてカーテンを開き嬉しそうな声でオレを呼んだ。何がそんなにうれしいのだろうと思ひながらまだ半分ね



まけたまま窟のところにいくと、そこには昨日の夕方よりもっとすばらしい景色があった。八ヶ岳の右側には富士山も見える。オレは一発で目がさめた。その景色のすばらしさは言葉ではとうてい言い表わすことはできない。

今日はまずユースまで行ってチャリンコをおき、ノ田美々原をめぐってユースに泊る予定である。軽井沢であった九州のあの二人に会えるかもしれないという期待を胸に、時坂山本小屋をたった。

百曲りの道のひどさは予想をはるかに上まわった。登山道のような坂で大きな石がごろごろしている。とてもチャリンコに乗って下ることは不可能であった。仕方がないからチャリンコを押しながさ、いや正確に言うとひきながさ下っていった。なんて疲れるのだらう。やっぱりチャリンコは乗るものだ。

百曲りがおわると勾配は少しゆるやかになった。しかし岩が多くてまだ乗れそうになかったので押していくと、前から4人の女の子が歩いて来た。少しの間立ち止まって会話をかわした。その4人は昨日ユースに泊って今日も連泊するらしい。

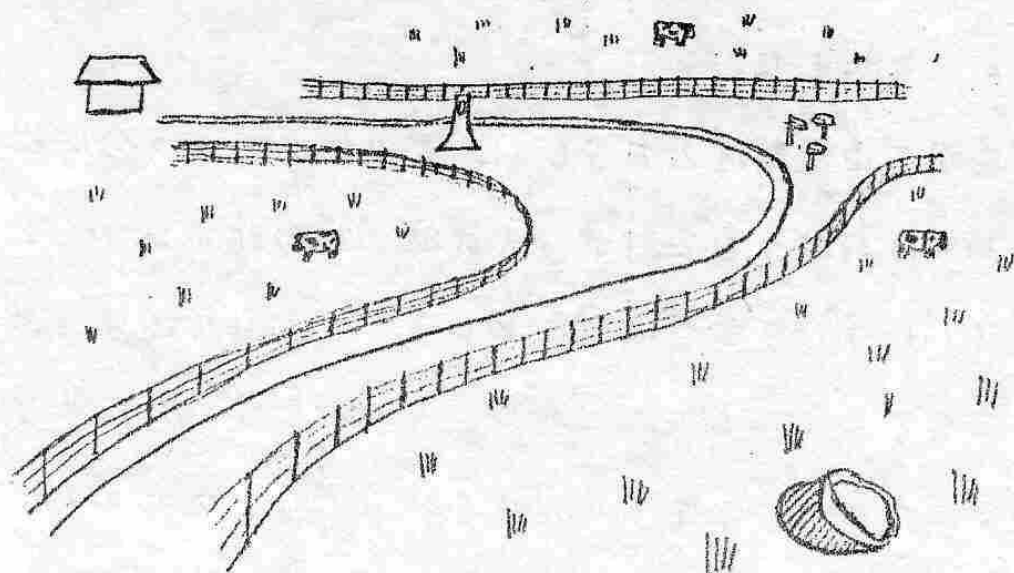
それからすぐにユースに着いた。山本小屋から1時間以上もかかってしまった。もう10時をすぎている。当然ユースには誰もいない。九州のあの二人もいなかった。オレたちは裏にチャリンコを置かせてもらいフロントバックなどを預けてすぐにユースを出た。また美々原へ登るのであるが、今降りてきた百曲りをまた

登るのではおもしろくないというので、観光案内図で別の道を探しそっちに行くことにした。

どうやらどこかで道を間違えたらしい。登り始めて10分ほどでオレたちはそれに気がついた。が、人が通った形跡があるし上へ上へと登っていけば必ず着くはずだというので、引き返すのはやめてそのまま登ることにした。しかし、それが間違いの始まりだったのである。少し行くともう道は完全になくなってしまい、生い茂っている草木をかきわけかきわけ登らなければならなかった。まるで十二単としているときのようなのである。あるときは岩をよじ登り、あるときは地面をはいつくばって登った。飢えと渴きがオレたちを襲う。もうここまで来たら引き返すことはできない。とにかくオレたちは上へ向かって登り続けた。

苦しくて、そして少し不安な2時間が過ぎた。オレたちはやよとの思いで頂上にたどり着くことができたのである。しかし、目の前には牧場が広がっており道はその向こう側にあった。道に出るには牧場を横切らなければならぬ。幸い牛の姿は見当らなかった。オレたちは囲いをくぐって牧場の中を歩き出した。ところどころに牛のフンが散乱している。それをよけながら少し速足で歩いた。道に出てやっと何か落ち着いたような気分になった。

オレたちは美しの塔の方へ歩き始めた。突然、オレはサンバイザーがなくなっているのに気づき立ち止まった。牧場の中に落ちてきたに違いない。サンバイザーとウィンドブレーカーをいっ



しよに手に持。て歩いてゐたのである。オレは、また圃いをくぐりて牧場の中へ入。ていく気はとて起こらなかつた。仕方なく返さうめてまた歩き出した。

美しの埜にもたれて休んでゐると、変な歌を歌いながら4人の女の子が山本小屋の方から歩いてきた。今朝ユースへ行く途中に出会。た4人である。彼女たちにシャッターをおしてもう。てからちょ。との間彼女たちと立話をした。彼女たちは愛知教育大学の1年で、うち2人は豊橋に住んでゐるということだ。た。オレの家は安城で同じ西三河である。こ。うい。う旅先では少し家が近いとい。うだけで何か親しみを感。じるものである。オレは愛教大とい。う名を聞いただけでなにやう嬉しか。つた。

それじゃあまたと言。て彼女たちと別れ、オレたちは再び山本小屋へ行。つた。そこでカレーうどんを食。べ、熱いミルクを飲。んだ。それにしても美ヶ原はどうしてこ。うも女性が多いのだらう。昨日

の山本小屋の泊り客も、20人位居たが男はオレたちの他に2、3人しか居なかった。やはり美ヶ原という名にひかれて、美しくなりたいという女性の欲望がここへ来させるのだらうか。などと小川と話しながら山本小屋を出た。

もうそろそろユースへ戻ろうということになり、今度はおとなしく百曲りを下ることにした。3時半頃ユースに着き受付をすませた。あの4人はまだ帰ってないらしい。他の客もいないようだった。

小川がユースのおじさんに、昨日は泊り客にサイクリストは居たかどうかを尋ねた。というのは、高橋が昨日あたりここに泊ったのではないかとこの勘がしたのである。高橋もフリーラングニっちの方を走る計画をたてていたからひょっとしたらとオレも思った。が小川の勘は鋭かった。昨日は2人のサイクリストが泊ってそのうちの1人が新宿のタカハシという人であるという返事が返って来たのだ。まずそれは高橋に間違いないだらう。

暇つぶしにマンガの本を読んでいるとやがて4人が帰って来た。どうやら今日の泊り客はオレたちと彼女たちの6人だけらしい。しばらくの間彼女たちと廊下で立話をしていたが、立話もなんだからということになって空いている部屋に入って話すことにした。高橋のことをきいてみると、髪型背格好などが一致した。チャリングの色はときくと、4人のうちの1人が覚えていてブルーだと答えた。やっぱり高橋に間違いない、それから軽井沢であ、た九州の

の2人につけてもきいてみた。彼女たちは今朝9時40分のバ
スで松本に下ったらしい。9時40分といえばオレたちはユース
を目指して一生懸命百曲りを下っていた。もう1時間、いや30
分早く山本小屋をたっていたら会えただろうに。残念であった。
話もはずんで非常に楽しかった。が、突然

「男の方からお風呂に入って下さい。」

というおじさんの声が出て場をしどけさせた。オレたちはしぶ
しぶ風呂に入り、続けて彼女たちが入った。

やがて夕食の支度ができたと叫ぶ呼び声があった。このユース
は食堂がなく、料理を自分の部屋に運んでそこで食べるのだ。あ
ままた小川と顔を合わせて食べるのかと思ひながら料理を運んだ。

夕食が終わるとミーティングかなと思ひながらこのユースはミー
ティングはないらしい。仕方なく部屋で小川と明日のことを話し
合った。明日でフリーランを終え、その足でOBラリーに出席す
るため午後4時半までに山中湖へ行かなければならぬのである。
松本から急行で大月まで行き富士急行に乗りかえて富士吉田へ。
しかし、松本から大月までの適当な急行がない。小川と話し合
わなくても堂々巡りをするばかり。もう6日間も顔を合わせている
とすぐ口論になってしまう。結局少し遅れても仕方がないという
結論に達した。

それにしても女の子たちの部屋から聞こえてくる声が気になる。

しょうがない。どうやら彼女たちも明日の計画をたてているよ

うた。小川が彼女たちとミーティングをしようと言いだした。言
いだしっぱが誘えばいいのに、結局ジャンケンで誘い役を決める
ことになった。何となくオレは負けそうな気がした。ジャンケン
というものは負けそうとか負けるといやだなあとか思うとたいて
い負けてしまうものである。やっぱり負けた。

かくして楽しいミーティングが始まった。オレは、豊橋がどう
のこうの刈谷がどうのこうのと local な話を持ちだし、小川
をのけ者にして楽しんだ。しかし時がたつのは早いもので、気が
つくと消燈時刻はとくにすぎている。もう寝ようということに
なり、小川と相談して2人ずつ分けそれぞれ3人で仲よく寝たの
であった。というのはまあ、かなうりで、実は小川と2人きり
でまた夜を共にしてしまったのであった。

10月8日

朝食を終えて食器を洗おうと流しのところへ行くと、彼女たち
がもう2ヶ所の流しを両方とも占領していた。オレたちは食器を
置いて少し待っていたが全然譲ろうとしない。小川は先に顔を洗
おうとさっさと行ってしまった。オレは考えた。もしここで食器
を置いて立ち去ったら、彼女たちに洗ってくれと言っているよう
なものである。といって彼女たちはオレたちが後で待っている
のに少しも譲ろうとせず、わざと知らん顔をしているようにさえ
思われた。はたして洗ってやると言っているのだろうか。もしそ
うだとすると・・・・。考えたあげく、オレも顔を洗いにいく

ことにした。顔を洗って帰って来たときに、もし彼女たちが洗ってくれていればそれはそれでいいし、洗ってくれてなかったら食器は自分たちで洗えばいい。そしてそのときは彼女たちが最低な人であることがわかるのである。

小川と並んで顔を洗った。洗面所の窓からオレたちのチャリンコが見える。今日はどうやらあまりいい天気ではなさそうだ。空はどんよりとくもっている。

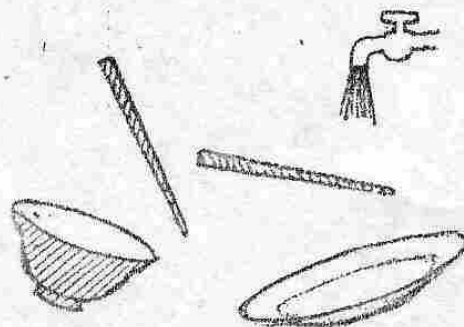
顔を洗い終わりに流しのところへ帰ると、やっぱり彼女たちはオレたちの食器も洗ってくれていた。小川は真面目に驚いて「あれっ!？」

と声を上げた。

オレはしじゅうしく

「あれっ!」

と声を上げた。



彼女たちは少しづつと静かにオレたちの食器を洗い続けている。オレは非常に嬉しかった。しかしそれにしては小川はなんて鈍感なのだろう。とても人類とは思えない。

9時前に彼女たちといっしょにユースを出た。彼女たちは9時40分のバスで松本へ下るのである。オレたちは11時36分松本発のアルプス3号に乗る予定だ。下りでバスといっしょになると危ないからということでオレたちは9時30分に出発することにした。それまで彼女たちと写真を撮ったりしながら時間をつぶ

した。松本駅でまた会おうと言。てオしたちは9時30分き、かりに出発した。

松本駅は観光客で割合に込んでいた。駅前もにぎやかである。オしたちは駅の横の方の人の通行のじゃまにならないところで輪行を始めた。今にも雨が降って来そうである。輪行が終わった頃に彼女たちが現われた。しかし、オしたちが輪行袋をかついで駅の中へ入、ていき、切符を買っているとき彼女たちの姿は見えなくなった。どへへ行ってしまったのだらうと思ったがまあいいやということになり、オしたちは手回り品切符のことを考えることにした。改札口を見ると年輩のこわそうなおっさんが改札をやっている。やっぱり買わなければだめだらうということ、オレはここで買った方がいいのかをききに切符売場の窓口に行、た。帰って来ると今度は小川の姿が見えない。まわりを見回すと少し離れたところ、小川は誰かと話している。誰だらうと思いがふかけよると、何と小川と話していたのは、軽井沢で会った、そして美ヶ原ですれちがったあの九州の2人であった。こんなこと、であるだらうか。オレはとても信じられなかった。

人ごみの中で彼女たちと少し話していたがすぐに制限時間いっぱいとなり、オしたちは別れを告げて改札を通、た。ホームに降りて電車を待ちながらオレは、これで初めてのフリーランにピリオドがうつれるんだと感じ、しばらくの間感慨にふけ、ていた。やがて、電車がホームに入、て来てオしたちが乗り込もうとす

ると、九州のあの2人がやってきました。見送りに来てくれたのである。発車までの数分間、窓を開けて彼女たちと話した。ちゃんと4年間で卒業するようと痛いところをつかれたりしたが笑顔で答える。初めてお互いに名まえを教え、そして最後の別れを告げた。発車のベルが鳴ってドアがしまり動き出す。彼女たちが小さくなるまでオレたちは窓から顔を出して必死で手を振った。

電車はぐんぐんスピードを上げて松本から遠ざかる。これでオレたちのフリーランが終わったわけである。が、オレは何か忘れ物をしてきたような変な気分がしてしようがない。小川にきくと小川もやっぱりそうだと言う。やはりあの4人とあやふやな別れ方をしてしまったせいであらうかなどと考えながら、さ、き松本の駅で買ったアンパンをかじりながらマンガの本を読み続けるのである。

後でわかったことだが、6日には、高橋はオレたちより1時間ほど早く霧ヶ峰を通っており、その夜オレたちが山本小屋に泊っているとき高橋は目と鼻の先にあるユースで九州のあの2人と知り合い、2人から、軽井沢と山本小屋への途中でオレたちに会ったことを聞いていたのである。そして7日、オレたちが山本小屋でカレーうどんを食べているとき高橋はすぐ近くをうろうろしてきて、翌8日、オレたちが松本駅であの2人に会っているとき高橋は同じ松本の街でそばを食べていたのである。しかしオレたちは、そんなことは知る由もなかったのである。

以下〇Ｂラリー編は、一部の登場人物の要望により全登場人物の名前を伏せてある。あしからず。

——〇Ｂラリー編——

アルプス3号はかなり込んでいた。甲府あたりでさらに込み具合がひどくなり、からだの不自由そうな老人が乗、て来たのでオレたちは席を譲ることにした。窓の外はとうとう雨が降、てきたようだ。心が重い。

大月で富士急行に乗りかえ、3時40分頃富士吉田についた。集合は4時半だから間にあわないだろう。とにかく輪行をしてしまおうということになり、霧のような細かい雨が降、ているのを眺めてはやまないかなあと思いながら4時すぎに輪行を終えて、オレが宿に電話をかけた。東工大サイクリング部の関係の者と呼んでくれと言、てから相当待たされた。たぶん知らない〇Ｂの人がでるだろうと思い、なんて言おうかと考えていると、突然「もしもし。」

と聞こえてきた。

「あのお。1年のＹですけど。」

と言いかけると

「おう、Ｙか。」

という声が返、てきた。

「なんだ、Ｈか。かくかくしかじか。」

電話にでたのは1年のＨであった。オレは遅れることを話した

が、まだあまり集ま、てないというこゝだ。た。

オレたちは霧雨の中を出発した。予備々々ランで走、たので山中湖までの道はわが、ている。それにしてもや、ばり雨の中の走行にはサンバイザーがほしい。

『O君、ボクのあのサンバイザーどうしたでしょうね。ほふ、熊ノ湯で500円も出して買、て美ヶ原の牧場に落としてきたあのサンバイザーですよ。』

オレたちは雨の中を走り続けた。予備々々ランでは山中湖まで非常に軽快に走、た覚えがあるが、今日は雨のせいか全然進まない。5時すぎにや、と山中湖畔にたどり着き、集合場所のな、んとか富士荘という宿を一生懸命探したがなかなかわからず、結局着いたのは5時半であ、た。着くとHと同じく1年のSがむかえに出てくれた。HもSもオレたちと同様フリーランから直接来たのである。

と、ころで、このOBラリーには現役はオレたち4人の他に誰が来るのだろうか。もう集合時刻を1時間も過ぎてい、るのに、現役はオレたち4人だけである。思えばひと月ほど前、部会でOBラリーの出席者を募、たとき手をあげたのはESCAラリーに出席したオレたち4人だけであ、た。しかし、2、3年が1人も来ないということはないだ、ろう。そんなことを考えなが、らチャリンコから荷物をはずし、てい、ると、F氏がチャリンコに乗、て登場した。F氏に尋ねると現役はこの5人だけだ、そう、た。

部屋に行、て着がえてからうろろしてると、OBの人が続々と集ま、て来た。当然のことだが見たことのない人ばかりである。しかし、かんじんの幹事であるHo氏がなかなか姿を現わさない。やがて夕食の準備ができたから食べてくれと宿の人に言われたが、幹事が来ないことは始まらない。早くメシにありつきたいと思、ているとや、とHo氏が登場し夕食となった。

夕食が終わると、境のふすまをあけて2つの部屋をつなぎそこにテーブルを並べてそれを囲むようにみんなが座、た。そして上の方から自己紹介をし、それが終わるといろんな会話がテーブルの上を飛びか、った。

やがて、酒を買、て来、という声がOBの方から飛び出し、オシたち現役が立ち上がると、た、腹のOBの人からポンポンと金が出てあ、という間に1万3千円集ま、た。いよいよ酒を飲んで肴歌を歌え、というのでOなんかは嬉しさをかくしきれない。

ジョニ赤とリザーブと現役用に角ビンと、それにコーラとたくさんつまみを買、て、や、との思、いで1万3千円を全部使、て帰ると、OBの人が、

「全部使、ちゃ、たのか。それじゃあ現役にもちゃんと宿代を払、てもらわにや、いかんぞ。」

と言われた。しま、た。そういうことだ、たのか。それなら、全部使おうとわざわざ苦勞することはな、か、たのである。

酒もはい、て雰囲気も盛り上が、て来たところへ初代のK氏が

オールドを1本手に持、て現われた。K氏に1曲歌、てもらおう
ということにな、てK氏は歌いだした。ところが歌詩を忘れてし
ま、たらしくすぐにつ、かえてしま、た。すると、オレのとなり
に座、ていたH。氏がK氏にむか、て

「あーよか、た、よか、た。どうもごくろうさまでした。」

と言、た。オレはおかしが、た。これが元祖の「あーよか、た、
よか、た。」なのかと思、いなが、らも、わがサイワリング部の昔から
かわ、ていないカラーというが霧田君のようなものを、ま、りと
感じと、た。そしてこれが東工大サイワリング部なのだと思、た。

それから次々とOBの方から歌が飛び出し、ワ代目のH。氏とH
氏がピンクレディを踊、たりした。それに続いて待、てましたと
ばかりにオレたち現役がESCAラリーで学、んできた春歌を歌、
出した。OBの人たちはあ、けにとされて、いたようだ。Oとオレ
はフリーラン中、軽井沢のユースで覚、えてきたエイトマンの踊、りを
初披露した。

いつしか時は過ぎ、12時をまわ、ていた。記念撮映をしよう
ということになりみんなが立ち上がったとき、オレは少し驚、いた。
今まで気がつか、なかつたが、OBの人は2人な背が高い。オレな
んかは見上げるような人ばかりである。

写真をと、てからおひらきになり、部屋に布団を敷きつめた。
布団にもぐりこんでから眠、るまでの間、となりでHとOが、セン
ベリがどうの、この、1日2回がどうの、この、と相変わらずバ、カな

話をしている。フリーランでもう何日もやってないから欲求不満のかたまり4E11になっているのだ。

10月9日

目がさめて頭の上に手を伸ばし腕時計を見るともう7時だった。7時にしては暗いなあと思ひながらカーテンを少し開いて外を覗いてみると案の定雨だ。蒼生、また雨の中を走るのがかと思ひ、ていううちにOBの人がポツポツ起き始め、Sが起きF氏が起きOが起きて、そしてHも・・・・・・まだ眠っている。

「おい、H、起きろ！」

「う~~~~ん。セシ△リ~~~~。」

朝食後H氏が金を集めた。現役は1600円、OBは2000円ということだった。食って飲んでせわいで治ってた、た1600円。こんなとこ他にある？

雨は全然たいたことなく、ガヤガヤと宿を出てレンタサイクルをやっているところへ行った。OBの人がチャリンコを借りるのである。レンタサイクルは非常に整備が悪く、OBの人がちょっと修理しようとSから工具を借りた。そのとき、Sの工具入れにOBのN氏のネームが入っているのをN氏に見つけたのである。いいえSは部屋にこそが、ていたジヤージで工具入れを作ったのだ。それがN氏のものだったのである。悪い事はできないものだ。

みんなで山中湖を1周した。今日は日曜日明日は祝とあって

道路は割合に込んでいた。つ、ぽりおにいさんがつるんでにぎやかに走っている。

1周した後、食堂の2階の座敷に上がり、4人それぞれビールとかコーヒーとか紅茶を飲んでバンザイをさっさと解散となった。

オレたち現役5人は、富士吉田から乗ったんじゃ座れないだろうというので河口湖駅まで走ることにした。雨はもうすっかりあがって晴れ間も見えていたが、富士山は全くその姿をかくしている。迷走している車の列の横を走って河口湖駅についた。輪行をすませ切符を買ってから駅前の食堂で昼食をとり、14時34分発の新宿行きの急行に乗り込んだ。

都室に帰ったさマージャンをやろうと、F氏、H、Sそしてオレの4人で話がっついていった。Oはマージャンが得意なのである。みんなそれぞれ闘志をみなぎらせて勝負満々でいる。オレだって負けてはいられない。もう1週間以上もやってないから早くパイを握りたくて仕方がない。絶対負けるもんか。

5時半頃大岡山に着き、更科で4人な大カツを食べた。もちろん勝ったための繰り上がりである。誰かは負けるのに、誰も負けたことな人が全く頭にはない。おろかなものである。

大カツを食べてた腹になった4人は、もうすっかり日も暮れて暗くなった中を学校の正門の中へと消えていったとせ。その後4人がどうなったかは誰も知らないということである。 完

僕のサイクリング

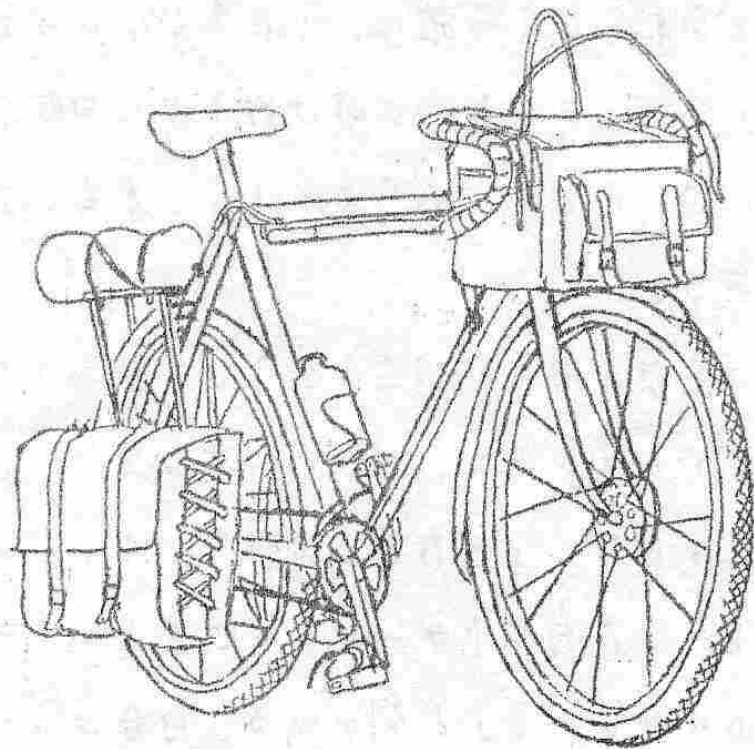
西口正之

僕がサイクリングを始めたのは、高2の夏からである。クラスの友人に勧められて輪行車を買って、信州のビーナスラインへとサイクリングに出かけたのが、そもそもの始まりである。霧ヶ峰高原から見渡した景色の素晴らしさは、今でも忘れることができない。それ以来、サイクリングというものの味をしめてしまって今日に至ったわけである。自分の足のかで登った峠や山から、景色をながめるときの喜びは、何ものにもかえ難い。車や電車や他の力を借りず、自分の力だけで目的地に行くのである。輪行は、してもいいが、あはあと息を切らして、時には自転車を押して、それでも景色をながめながら、登るのが僕は好きだ。どんなに辛くても景色だけは見る(意識的に)ようにしている。なぜなら、それだけ僕のサイクリングの目的だからである。思い切りペダルを踏んでスピードを楽しむのもいい。しかし僕の場合は、ゆっくりと自分のペースで走りながら、景色を楽しむのが一番好きだ。疲れたら休み、気が向いたら又乗り、をくり返しながらかける所まで走る。というのが理想である。合宿などでは、そういうわけにいかないだろうが、それはそれで又別の面白さがあるし、風景を楽しむことだって、いくらでもできる。今年の夏合宿で、特に印象に残っているのは、合宿初日にキャンプを張った、津軽半島の日本海側に面した所にある出来島という海岸で見た日没の美し

である。左の端から右の端まで海が広がっているのである。
水平線がくっきりと見えて、そこには太陽が没してゆくのである。
全く絵に描いたような風景であった。本来島では、もう1つ思い
出がある。夜、蚊に悩まされて、はかばか眠れなかったことであ
る。蚊とり線香をものともせず、テントの中へ侵入してくる蚊
の群れには本当にまいった。シユラフに入ると暑くて汗がサラサ
ラと出てくるし、シユラフから出ると蚊に刺されて虫血が痒(?)で
死んでしまう程であった。外へ出て海岸でシユラフに入って寝た
先輩もいたけれど、僕は結局テントの中で蚊とり線香を3個ぐら
いたいて寝たのである。こんな事も、あとに振り返って考えると
面白い思い出である。もう1つ合宿で印象深かった景色は、下北
半島のつけねの太平洋側から陸奥湾側へ横切る道である。回りは
ずっと高原の牧草地帯であった。ちょうど僕達が走っているとき
小雨が降っていたのである。雨がやんで夕日が見えはじめた時で
ある。真赤な夕日が濡れた路面にキラキラと反射してまるで夢の
世界であった。(あっとオーバーかな? いやいやオーバーではな
いのです。) この景色は僕の網膜にしっかりと焼きついて、一生消
えることはないだろう。こんなわけ僕がサイクリングの楽しさ
を合宿で存分に味わいました。今思い出しても、合宿はおもしろ
いことばかりだったと思う。班のメンバー構成が僕にあって
いたということもあると思う。スピードを楽しむ人よりも、景色
を楽しむ人の方が多いかったのだろう。そのことは僕にとって、お

る意味では幸運だったと言えるだろう。

今後も、無理をしないが、自分のサイクリングというものを楽に
んてゆきたい。



つかれた？

「まあね」

名取暢

列車に乗っていると、気になるのが、自転車である。田舎に帰る列車の中で、ふと「自転車だいじょうぶかなー。」などと心配になる。よく考えてみると、ツアーではないので自転車は持ってきてないのである。それほどもでに自分の場合旅と自転車が付着しているんだなあー、なとこのごろ思う。よくよく考えてみると自分は今まで自転車なしの旅は、した事がないのである。列車に乗る時はたいてい（田舎に帰る時は別）重い自転車を肩にかけ他の乗客には、白い目で見られ「まっしょ」と言っ、て列車に乗り込むのが常である。

田舎でたまに高校の時の同級生に会う。「今年の夏はどこにいったかよー。」と聞かれる。それに対する自分の答えはいつも「自転車でちょっとよ。」である。自転車でちょっとよと答える時相手はいつも「また自転車かー。」と口をとがらせる。「そんなに自転車がいっかよー。」と聞かれる。自分はいつも「まあな」とニコニコしながら答えるのである。相手はあきらめて、自分の旅の話に耳を傾ける。そして最後には、このように言うのである。「おまえも、いっかげんに免許を取れよ。もうチャリンコをころがして喜んでいとしでもないだろう。」いつの間にか田舎では、名取が免許を取らないのは、自転車のせいだと思われているのである。まったくは否定できないが、自転車に乗ることと

、免許を取ることはまったく別問題である。「名取く〜ん、久しぶりね。」と女の子に会うと言ってくる。「そう、土木科にいるの、名取君らしいわね。」とまず言う。次に「え、サイクリング部、うそみたい、それほんとー？」と言ってくる笑うのである。名取君は土木科にはい、たして、サイクリングには無縁の人に見えるらしい。こう思われるのも、自分としては、まったく否定できない事なんだが、多少が、かりする事でもある。「それじゃあ、ミニサイクルになんか乗って、リンリンしてるわけー？」と多分に軽蔑っぽく聞かれる。そう言う人に誤と説明するのはたいへんであるので、自分はいつも「まあーね」と答えておくのである。多分そう聞く人の頭の中では、次のような式が出来ているのである。サイクリング＝ミニサイクル、リンリンキ名取君。正確には、名取君ではなく、名取君のイメージである。自分でも前から、ある程度は、この事に気づいていたのだが、それにも増して、自分の自転車熱は、高まっていくばかりである。

「おまえ、家庭教師のバイトしてんのかー、金にまるだろう。」
 「そうでもないさ。」「1ヶ月くらいだ。」「2万円位かなー。」
 「何に使うんだい?」
 「だい部分自転車にっぎさんでるなー。」
 「また自転車か、」
 「まあーね。」
 「そんなに金がかかるもんか?」
 「まあーな。」
 金なんか、かけたくなければ、かけなくても済むものである。部品にしても、こわれた所だけ、なおしてあげばいいのであって、その他には金はかからない

3
だがどうも、自分はそうではないらしい。次から次へと新しいものを買って、喜んでいるのである。どうも麻薬の味を覚えたみたいなき感がある。自分はこれがほしいと思った部品は、できるだけ早く買って買ったのである。3度の飯が1度になっても、パンツを買うお金をまわしても。なにしろ買って、自分の自転車につけてみたもののだから仕様がな。性能がどうだこうだではないのである。「いいが、こうしているな。日しているな」ただそれだけ買って買う理由は十分である。性能がどうのこうのは、使ってみてからの事だと自分では思っている。日曜日、気に入ったパーツをつけて多摩川あたりを、四方の景色を見ながら、ゆっくり、ゆっくり走るのが、一番の楽しみである。(このごろ、や、ていなきが。)走りながら、チラッと新品のパーツを見てニターとするのがなんともいいのである。完全に自己満足の中に浸りながらぶらぶら走るのである。何がいいと言って、この自己満足は最高である。ニターとする自分の顔が想像できる。この最高の自己満足を得るために、パンツを買う金もおしんで、部品を買うのである。自己満足であるから、自転車についてあまり知らない友人には、わがってもらわなくてもいいのである。だからくどくど説明する必要もなく答えは「まあーね。」となってしまうのである。

「名取、今度の休みは車でどこかに行こうぜ！」

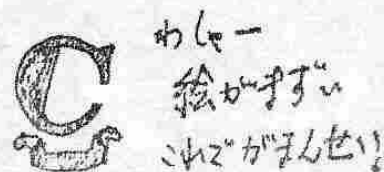
「名取君、さようよ。私も誠司君もいいよ！」

「今度の休みがー。ちよっとな。」

「また自転車かよー。おまえいつも自転車、自転車であいてる休みは、ないじゃんかよー。」

「そんなに自転車の旅、マハハの？」

「まあーね。」



my CHERBIM

ほんとうに「まあーね」である。「まあーね」としか答えようがないのである。どうしても自転車で旅を試みたのだから仕方がない。「どうしても自転車でなければいけないの、車だ、マハハじゃハハ」確かに車だ、マハハだろう。しかし自転車でいまたいのだから仕方がない。自転車でいまたいと思うのだから無理して車でいく必要もないだろうし、また自転車でいまたいという気持ちにむりやり、いろいろ理由もつけたくない。だから答えにいろいろごたくをならべる必要もない。しいて言えば「君もチャリンコや。マハハ。」である。しかし答えは、「チャリンコを？」である。言うだけ損の感がある。だから自分の答えは「まあーね」になっしてしまう。「おまえ、これからチャリンコ続けていくか？」、「まあーね」。「30才、40才、じいさんになってもか？」「まあーね。」

たぶん一生「まあーね」と言いながら、友人にバカにされながら、気に入った部品をつけて、ニターとしながら、自転車にまたがっているでしょう。列車に乗っている時には「自転車だ、いようぶかやー。」などと心配しながら――。

おわり

あと15分・・・

海に向ってどこまでも

いつまでも走ってゆきたい。

富田 尚

あと15分

重苦しい雲から雨がしたたりおちてくる。

彼女は、我々の意志を打たぐだき勝ち誇ろうとするまでもなく、

じっと腰をすえて、彼女の中を走りぬけてゆく我々を見ている。

あと10分

我々の後ろから彼女は見てゐる。

どうしようもない欲望にとりつかれてゐる5人と、

海の怒涛が、タイヤ、ハンドル、ペダル、サドル……から、

私の体に伝わってくる。

彼女はもうすぐそこに、

あの林の向うでまってる。さっと。

海岸道路を横切る。

すぐさま視界が

幾重にも重りにむく白波、

波打った、黒い砂

白波に重苦しくのしかかるダークブルーの雲

ぞー杯になる。

驚きと感動で、5人は、大いなる自然を前に欠けているだけ。

一人が走り出す。 四人もまた。

海に向って。 どこまでも。 どこまでも。 走ってゆく Eい。

波打ち際に足を止め。 じっと海をみつめる。

めったに刺かれることのない心の奥底から。

打ち寄せ来る波のごとく。

大きくなり、小さくなり、喜びがこみあげてくる。

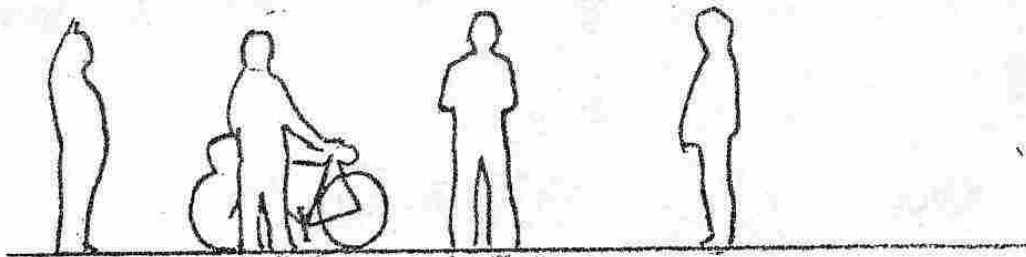
たっ E一つの雲の切れ目から ゆっくりと太陽が姿を現わす。

日出だ！

歓びが一気に爆発する。

あたたかい光につつまれてフワフワと上ってゆく。

まぶしい光が、体の中をすきとおってぬけてゆく。



海に ちがって。 どこまでも。

いつまでも 走ってゆきたい。

どこまでも。

九十九里、99km の バイラン。



SO FAR

古木 登

★俺がサイクリング部に入ってから もう2年が過ぎようとしている。早いものである。入学当時、どのクラブにしようかなと考えているとき、新入生セミナーで一緒だったワクシマという面白い男が、サイクリングいいぞなんて言ってるんで何気なく部室をのぞいたら、何となく入部するはめになって、ついでにワクシマの言ひにのっかって アメリカまで行きそうになってしまって、それでも金がないからやめたなんてことを今、思いだしている。(何だか OB会誌に将来のせる文みたいなのができそうだな。まあいいや) そんなわけだから 自転車買うのも 他人任せで、富田さんやら 野崎さんたちが、お前は 21インチだななんて言ってるの聞いて、タイヤの径が21寸のかと思い、そんな小さな乗る人かなと疑問に思いつつ、それでも 文句も言わずに先輩に任せていたら、フレームサイズ 21寸のが出来てきた。色はメタリックブラウン、別名 メタ茶色。俺はこの色、とっても気に入ってるんだけど、2年の鈴木は めたくちゃ色 といって けなす。まあ、たしかに鈴木の子 オレンジには かなわぬえやな。大伴、ケレビム色には、あまり いい色 ないみたいね。そいで、いい気になっちゃって、横浜市金沢区六浦町2776-423の自宅まで、乗って帰ろうってことで、ピカピカの自転車で、中原街道

を、怪走？するわけよ。車が多くてよ。NOx 腹一杯に吸って、それでも日暮れには着くだろうって、ルート16に入りますますピッチをあげていた、その時であった！ガリッ！ガチャコンガチャコンとけたたましい音がリヤホイールから発せられたのね。ナヌ？ ああ、ただ単に、針金をひっかけただけか。よかったよかった。針金取るべ。グッ（ヒカを入れて針金を抜く）すると、プッシュ——もろ、空気抜けやんの。大パンク。——結局、あれが今まで唯一のパンクなのである。結局、あの時の修理はうまくいかず、そばの友人の家に自転車置いて、夜おそく、タクシーでみじめに帰宅したのであった。今のメタ茶号のリヤホイールのフレはあのときの悪戦苦闘の後遺症なのだよ大塚君。

★俺のメタ茶号、買ってから約1年半になる。何キロ位走ったかなあ。クラブの中では、あまり走っていない方に属するのかな。部品は少しは替えました。ペダルは、三ヶ島の一番安いやつから、二番目に安いやつに取り替えた。クランクとチェーンホイールも、TAより安いプロダイに替えた。RDは、サクセスより安いチャレンジャーに替えた。チェーンは、

魅惑のヴォーカリスト

Rajie
ラジ

HEART
TO HEART

去年の麻雀大会でもらったものをつけている。部品は替わっても、手入れはしないんですこの持主は。だもんだから、メタ茶号、ときどき怪音を発しちゃうんですよ。でもね、そういうときはなだめて、すかして、しずか〜に乗ればいいんです。泣く子も黙るサイレント走法で、今日も快適タバコがうまい。★俺がサイクリング部に入ってから、もう2年が過ぎようとしている。早いものである。この2年の間、思いだしてみると、いろいろなことがあった。2年間の多くの時間は、自転車に乗っていない。2年間のうちほんの数十日だけ自転車に乗っている。しかし、その数十日は、ほんとにすばらしい数十日であったと、今、断言できる。そして、自転車に乗っていない残りの日々、サイクリングについて、合宿について、いろいろ考えてはいるけれど、結局俺たちは、自転車に乗っていないと話にならないんじゃないかと思う。特に最近、秋晴れの天気がつづく、このひきしまった大気の下、サイクリングをしたいな〜と、つくづく思う。自転車も、手入れて、気持ちよく出かけたかったですな。そして、自転車に乗りながら、クラブのこと、サイクリングのこと、そして自分のことを、考えてみたいですね。



Junko Ohashi
大橋 純子

Rainbow

サイクリング部に一言

2年建築組 吉田弘行

部誌の制作のために、部員全員がレポートを提出するに当り、私は何を書こうかと、日夜懸命に考えた。サイクリングに関して書くのであるが、あまり自転車に乗るわけでもないのど、私自身の感じているクラブ活動について独断と偏見を排して考えてみる。いろいろな非難も生じる可能性があるが、これは私の思っていることなので、一個人の意見として聞いてもらえれば良い。部内には理屈っぽい人がいるのが気がかりである。大いに反感を排していただて結構、同感してもらえれば私は幸福者である。

まず合宿について一言。合宿の時期になると必ず、合宿のあり方について激しい議論が起こる。それは、合宿というものに対して、部自体、はっきりとした目的を排していなか、たために生じてきたのだと思う。また部員も合宿に参加する必要性を十分感じと、こいなかたと思う。今年の夏合宿で、私達の班はたいへん楽しく有意義な合宿を過ごした。その原因は、班員が意見統合して、先輩、後輩という関係も必要以上になくしたことである。また、班員が同じ目的を排して合宿に参加したのも大きい。しかし、他の班では、大金を払っても楽しい合宿が出来なかつたと報告している人がいた。その班では、気心知り合わない者同士で参加したのが失敗ではないだろうか。もし先輩は後輩に対して、

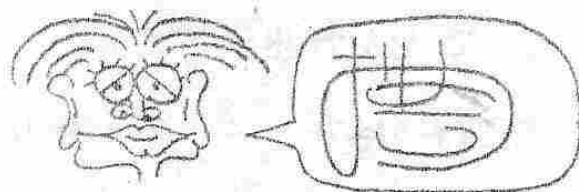
威厳を示す態度を大ぴらに出してはいけないと思う。そこで合宿についての結論として、合宿での班構成は、目的地別に分けるのではなく、仲の良く、気心の合った、そして合宿の目的を同一にしている者同士で班構成をするのが最も良いと思う。その目的として、観光地巡り班、走りに徹底する班、観光地で友達を多く作る班など色々ある。私は、後者を望む。後者を望むのは私自身、は、きりした理由がある。それは、出会いである。人生において最も大切にしたいのは出会いであり、良い出会いを願うのは人間である限り必ず持ち合わせているのである。というわけで、来年の春合宿では、この班を実現させたいし、実現させる自信を携えている。

次に、トレーニングだ。トレには1年から3年まで全員参加するというのが部会で決まっていた。しかし、これまでの出席状況は、あまり芳しくない。特に3年であり、そして部を作りあげている組織部である。そしてトレを欠席する時は勝手な理由で片づけしてしまう。もっとトレに参加して体を鍛えよう。部会で可決されたことを守らないのが、今の部の最も悪いことである。その部会もただ、だらだらしていてくだらない。部会の出席率の悪いのも仕方ないことである。

近頃、部室で女の話がかかり聞こえる。男で生まれてきた以上女を愛することは男の義務である。女のことか話題になるのが当然であり、自然なことである。にせいかかわらず、ある人がある人

に対して、女かぶれをしてもらしなう」と言、たそうだ。言、た
 本人をせめるわけではないが、その人の女性観を聞きたくなる発
 言である。学業に専念してもいいし、自転車に専念してもいい。
 しかし、この発言だけはうなずけない。私は良く女性の話をして
 いるが、その時もある人から、にらみつけられたことがあ、た。
 なせ女性の話をしてはいけないのだろう。なぜ女かぶれをしては
 いけないのだろう。私にはさ、ぱりわからない。1年のX君も同
 じようなことを言、ていた。学生時代でなければ出来ないことは
 たくさんある。その中に女性との交際も必ず含まれているはずで
 ある。さあみなさん、青年時代は2度とはもど、て来ないのです。
 楽しい時代にしようではありませんか。THE END DASU.

空白を利用して、



- 西口君へ 「また、ふられたのですか。そろそろ、1人くらい友達を
 つくりなよ。」
 渡辺君へ 「おまえ、その顔じゃ、だめだよ。目をぱ、ちりあ
 けろ。そうしないと、女も寄りつかんぞ。」
 志我君へ 「栗斗、富士山登頂がんばろうな。しかし、その
 髪型が急にいらんなあ。」
 高野君へ 「XXちゃん、いらないのなら俺によこせ。俺な
 らかわいが、て大切にしてくれよ。」
 金井君へ 「21才は間近です。そろそろあせ、た方がいいの
 じゃないかなあ。」
 名取さんへ 「無事、測量学の単位が取りました。どうもあり
 がとうございます。またよろしく。」
 金谷さんへ 「あまり手を出さない方がいいと思います。相手
 の方がいいだろう。」

お詫び...夏合宿で一人の女性に対して、嘘、偽りの暴言を吐い
 たことをお詫びいたします。でも「俺と結婚する女性な
 幸せだなあ。かわいが、てやろ、と！」

なおしきれない アホンダラと こわれきらない ツヨッサク

大塚 隆夫

ぼくのチャリンコは、いまだにパンクなしである。これは、すごいことだ。この前無パンクを誇っていたリーヨーがすり切れてトレッドがなくなって、西尾にバカにされたので、ナショナルにとかえた。更に無パンク記録は続くであろう。甘い甘いパンクするなんてのは、ちゃんと道を見ていて、とんがった石があったら、マッハのタイミングでよければ、問題ないのである。つまりぼくのテクニックが光る、ピカピカ……ゴホッゴホッ(カゼをひいているのでセキが出る)。

無パンク記録のほか、ぼくのチャリンコの優れている点をみなさんに理解していただき、ともに拍手を贈ろうではないか？
まずカラーであるが、ビーズブルーという非常に上品で力強く、華やかな色は、だれしも好感のもてるところであろう。この色に関しては、三浦がひどく共鳴してくれている。彼はとてもいいセンスの人間であると思う次第である。次にフレームであるが、フレームが大きいと、ドミフォニみたいだという一部のヤジがあるが、渡辺という専門家の口から「カッコイイ」という言葉が出たのは、うれもない事実である。フレームもだいぶキズが増えてしまったが、これは、ギューギューの列車の中にも耐えたすえの、名誉の

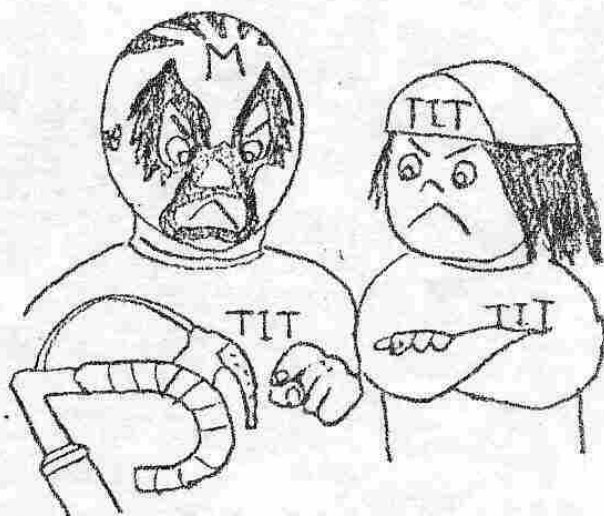
負傷なのである。

オーダー時からの変更といえば、春にあった“整備合宿”なる行事の際、なんだかワヤワヤ車に乗りこんで、チャリンコを整備してんだが、車を竊めてんだがわかんないふうにして、5人ぐらいて神金へ行って買ったブレーキレバーがある。以前は、クイックもないダイコンをつけていて、

野崎さんに
文句をいってる図

輸送の際苦労して、いっしょにオーダーした鈴木と、野崎さんのチャイイスに不平を言ったものだった。

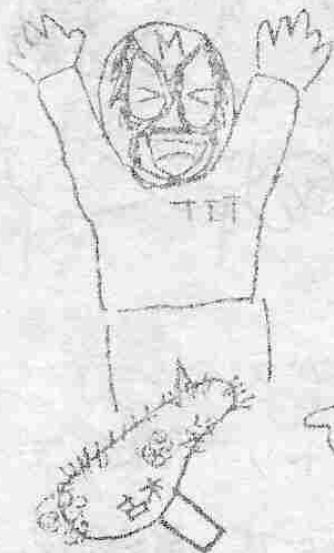
あの時、まじめにボトムを整備していた人もいたが、ぼくは夏合宿でボトムがゆるんで、みんなにバ



カにされたにもかかわらず、ブレーキレバーを取っかえてパーテーズをぐるぐるやっただけだった。それより先に、トリアルにしたのも変更点である。オーダー時は、49-32 だったが、夏合宿の“とぼしっこ” などからもっとデカイのがほしい、と思っていた。そんで、52-42-32 というキッカリ10枚差の、トリアルのベストセレクトが、完成したわけである。見た目にも美しく、マキニイのユニークなアームがビーズブルーに映えるのである。52 から32 は、20枚も差があるためフロントこそコンペVに変えたけれど、リヤは、オバケだ、幽霊だと騒いでいる人々をシリXにシマノ 600 はがんばっているのだ。

ぼくのフレームはデカイので、ブレーキレバーを変えた際に、ブレーキレバーを、リヤもフロントも、ともにリア側を装着したけど、フロントは糸石に長く、クルクルと輪にしていたら、小島に笑われたが、無視したのだった。

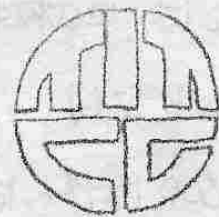
ペダルはいつ壊れたか覚えてないが、初代シオタードはシャフトがまがってオシキカ。現在は、ミカミマのクイルのブラック仕上のカッコイイのを付けている、が、ちなみに¥1500 であった。



古木のサドルを
見てあざけっ
ている図



先に、ボトムをあけたことがないと言ったが、他の箇所も同様
に、大した整備はしていない。
にもかかわらず故障らしい故障
もなく、ペダルのカッコイコン
スえがマニすりゃよく走ってる
と思う。ただ、梅雨越しの古木
のチャリニコのサドルにカビが生えていたのをあざけ笑ったら
ぼくのにもカビがいたのでビックリした、という出来事はあつた
けどれも。とにかく整備しないというが、整備しなくてもよく走
るというが、神金ペガサスビーズブルーはとてもよくできたチャ
リニコであるというのには否めずいい車である。



T.I.T.C.C.Co.Ltd

あと。らんだむ

西尾 毅

クルマの免許をとってから、すでに半年が過ぎた。自動車というのも仲々いい。距離がかせげるうえに、あつて結構狭い地道だって上れるのだ。自力本願か他力本願か、などによく言われるけれど、林道などへ入ってみると、自転車は仲々大変だし、スポーツをしているかのような感じさえ抱くものなのである。

それでは、クルマと自転車の違いは何かというと、それは第1に素朴さであると思う。田んぼの真ん中を、ゆるやかな弧を描いて伸びる道、農家の木々が影を落とす道々、そんな道を気ままに走るのが僕は好きだ。

ポタリング、という言葉がある。これはデントリングでもなければ、むしろファストランでもない。僕はこの“ポタリング”というのは、自転車による散歩だと思っている。自然と自分がついに感じられる、などと言うが、僕にとって“ポタる”とは、まさにその感覚なのである。

この“ポタリング”こそが、我がサイクリングの根源なのだが、そうそうポタってばかりもいらぬない。ここに体力の問題がでてくるのである。体力は自分自身にもズレをもたらす。では、その体力をどう補うか。ここにクルマとのもう1つの相異点、則ち「気合」という問題がでてくるのである。

「気合」の入れ方も人さまさまだが、ここでは、僕の場合につ

いて書いてみたい。

サイクリングを始めた頃、しばしば「気合」の対象となったのは、いわゆる「高級車」に乗った連中であつた。当時、愛車はヤマハ・スポーツ車で、4年も使つたものだったので、「高級車」というよりは、「新車」といった方が適當かもしれない。とにかく、そういう奴には負けまいと思つた。こういう気合の入れ方をすると実に速い。實際、距離的にみれば、1日の走行距離は遙かに長く、速度もその頃の方が速かつたような気がする。

そうこうするうちに、新車を買つた。この瞬間から、僕は追う立場から追われる立場に一変し、「高級車」はもはや標的ではあり得なくなつた。しかし、本質的には「Challenge」が、「気合」の原動力だつたことに変わりはないと思う。

このように、クラブに入るまでの僕のサイクリングは「素朴、AND ガッツ」というようなものだつた。今でも、願望としては、サイクリングはこうありたいと思つてゐる。願望として、というのは、実は、クラブに入ってからというもの、グループツアーになれなくなってしまつて、ソロで出かける気がしないのである。サイクリングのよさはその素朴さにあつて、それを追求するためには、ソロが一番いいのではないかという気もするけれど、夜は寂しいし、峠で喜びを分かち合う相手がいないというのはつらいし、というわけで「気合」がはいらすに在る訳です。

さて、この「気合不足」を解消して、サイクリングに誘うものは「出会い」である。出会い、というのは自然でも人間でもいい。何かしら、新しいものにふれたときの感動は、大きな魅力だ。

「遠くに行こう」などの番組で、女の子がいろいろ飛び回っているが、あんな仰々しい「出会い」でなくていい。ただ偶然に、というのが一番いい。最近、合宿に「名勝めぐり」みたいな要素が、少し多くなってしまったような気がする。いざ、行ってみて、あまりいい所ではないと、「人が多いなあ」とか「三ッボイなあ」などといって、ガッカリしてしまうのだが、これは考えてみれば虫のいい話なのかもしれない。

最後に、合宿について。合宿は楽しくなくてはいけない。部室の延長というより、飲み屋の延長のオがいい。その点、サイクリングにこだわらなくてもいいと思う。もし、自分のサイクリングを考えてみたくなったら、合宿と離れてやってみるといい。比較対照というのは、実に有効な手段だと思う。

いろいろと書いてきたが、要するに、自転車が好きで、これから続けていくためにはどうしたらいいか、といったことを考えて書いてみたつもりだ。自分自身と相談して書いたので、何を話しているか分らないところもあるでしょうが、そこは読み飛ばして下さい。

以上

「う〜む書けない。」などとスランプの作家風に原稿取りから逃げていたわけですが、正直言って旅の思い出を講談調でやるのもあまり得意でない私のことですから、ごく個人的に4年間をふりかえってお茶を濁させてもらいたいと思います。

さて、今年の一年生諸君、夏合宿はいかがなものでしたか。

私の場合、やはり最初の夏合宿は最も印象深いものでした。私は3人班(3年と2年の先輩と同行)で北海道を宗谷岬から釧路をぬけて 室蘭岬まで南下というちょっと変わったコースで走ったのです。このときは、先輩にくっついて行くのに一生懸命という感じで、(なにしろ自転車で長距離走ることなどまるでなかったのですから) フロントバックの地図を見ながら、「あと何キロかな、5kmで15分だから、え〜と、まだ1時間はかかるな。」などとホヤキながらあとを追いかけていたわけです。どうやらこのときからすでに人にくっついて走る習慣がついてたらしいですね。

ところで 話は変わりますが、普通走っているとき、皆さん何を考えているのでしょうか。坂を登っているときは、誰でも同じだと思う。つまり「あのコーナーをまわれればきっと峠が見えるのだ。あともう少しだよ。」そして、「むむ、まだだめか。いや、次のコーナーこそ……」とは具合で、たまに「おっと、この分なら前の又を抜けるかな。」とか「あ〜もうだめ、抜けるなら先へ行けよ、

ピッタリくっつかれちゃかなれないぜ」というところじゃないか
と思うんだよね。

下りは景色を見ながら、ブレーキングとコーナリングを楽しみ
ながらというわけなんだけど、平地で距離をかせがなきゃならな
い時など困るんですよね。こういうとき何を考えていけばいいの
か。「ただ前の車のマッドガードを眺めてたんじゃどうにもいけま
せん。前に歌など唄いながらリズムをつけてたら結構調子が出た
こともありましたが、そんなとこなのでしょうか。夕食の献立な
ど考えるのもまあまあ、そこですかね。さて話が食事のことにな
ったので話をもとに戻しますと、このときの夏合宿は料理はほ
とんど先輩が好きな様にしたというか、まあ3人なのでスナリ
いっていたわけです。3年の人の好みで、スパゲティ・ミートソース
(ミート・ソースはかん詰を使う)がやたらに多かったのですが、
だいたい簡単なもので済ましていたわけです。この簡単な食事の
イメージがいつの頃から変わったかということと春合宿なのですね。
春合宿というのは、わりと距離をかせがないで観光旅行みたいな
感じになるわけで、結構手間をかけて食事を作れるということや
人が多いせいもあり、どうしても豪華になる傾向があるらしいのです。
しかし近頃は夏合宿でも結構色々作るらしいですね。

また、大めしぐらいの話は色々伝えていると思うけれど、こ
ういう記録などもサイクリング部奇人伝として残していってほし
いし、これからも挑戦していって欲しいものです。あと 

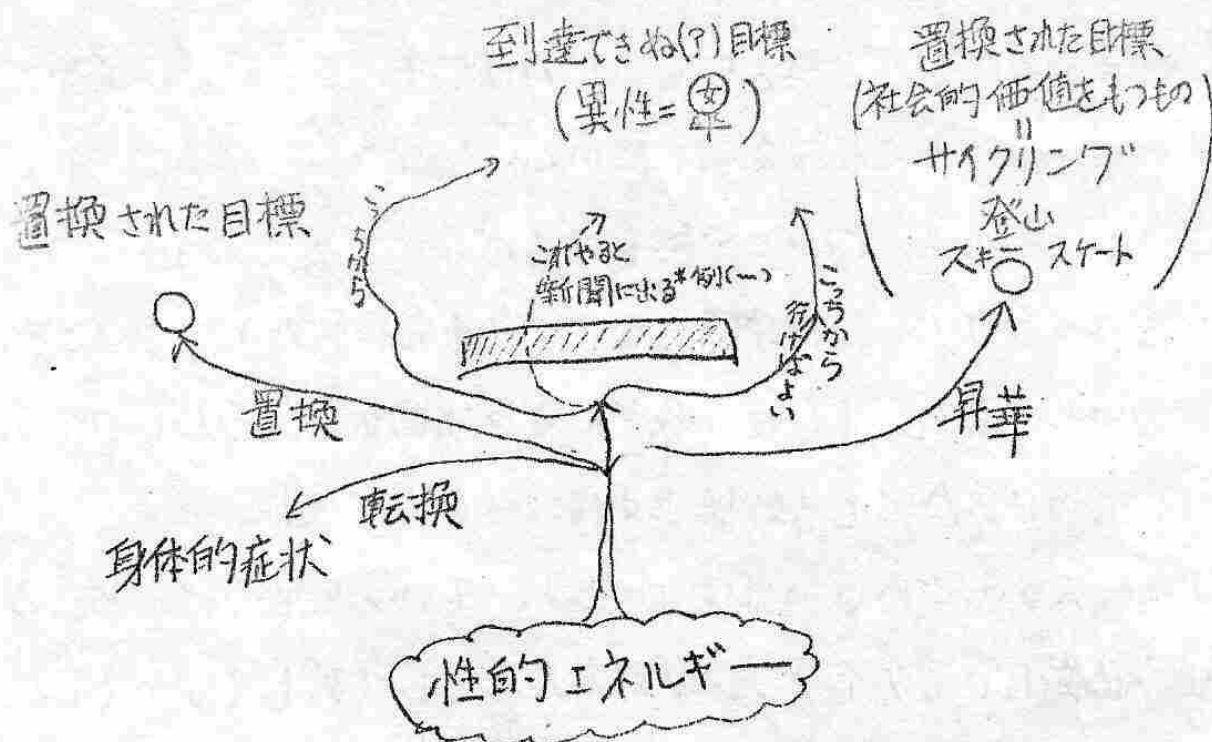
恐怖のジャンケンポンも忘れてはいけないのですが私の場合この
事に関してはあまり触れたくありません。

え〜風邪をひいて、頭もいつもより更に鈍っており、だらだら
と取りしめが無くなってきましたし、疲れてきましたのでこの辺で
パンを置かしてもらいます。

サイクリング部と共に 4年間の大学生活を
送れたことを とてもよかったと思っています。
(遅) (よくやった)

部員の皆さん、せいぜいエネルギー(下図参照)を発散させ
てください(今のうちですぞ)。
(そんなことを言わないで、ねね)
そして素敵な思い出をつくられることをお祈りします。

〜この図はまちがっているだろうか??〜



『心の風景』

野崎 信春

道は、サイン・カーブを描いて果てしなく続いている。遙か数km先に、松林が見え、このすさまじいUP-DOWNもそこで終わる、というらしい。まわりは一面の原野。ところどころに家があるだけ。高曇りの空が、心まで荒涼とさせる。一つの坂の頂上に立つ。かなたが自動車が来る。しばらくして、ようやく僕を追いこして、た自動車は、ひとつ先にある坂に吞まれてしまふ。てい分近くも車の音すらも聞かれない。これも北海道だと僕はそうときを思ふ。

＜49年夏合宿 北海道美幌にて＞

前日の夕方から降り続いた雨もど、と昼過ぎにあがった。外はまだ深い霧で10m先も見えない。それでもかまわず僕は自転車で徘徊した。深い霧の中、高原の石がゴロゴロした道をゆくり走り、2kmのこの高原では霧が下か上を見上げれば唯の雲をのぞいたうなとバカな事を考えながら進むうちにフッと建物が霧の中から現れたかと思うと又、霧の中に沈んでいく。しかし高原の霧は明るい。崖の上に立つと、この下はどうなっているのか皆目、見当がつかない。この先には空しかなりような感じだ。夕方になると急に霧が晴れた。晩秋の高原が360度の展望が……棚や穂高も見え、遠く見えるのは立山連峰だろう。そして、先は、日本海なのだろうか。それとも雲海が続いていりだろうか。夕食も終えて外に出て見ると、いつの間にか、夜のとばりが降りていた。夢絶なばかりの

星空である。た。都会育ちの僕には、滅多にお目にかかれないう天然のプラネタリウムである。この日本のどこにも等星まじりハッキリと見える場所があるだろうか。

く50年秋 ソロ・ツーリング 美ヶ原にて

藤倉さんの子回りのパンクで、予定は遅れに遅れた。盛岡で打上げと肉に合うためには、今日中に宮古について、おしたの朝に輪行しなければならぬ。しかし宮古まで数十kmを残し、夕闇が僕と友人を包んでいく。主要道かすはずれたこの三陸の夜の国道には、街灯は一本もない。小森町並を行き過ぐれば、僕らの先を照らすバツ、テリ、ライトの白い輪の外は、真の闇である。夏合宿とは言え、前日まじ僕らは自由気ままに走っていた。4人一緒に走、た覚えはない。しかし今はばかりは、みんなじつたりと寄り添い、そそくさとパダルをこぐ。暗闇では感覚が狂、そそくさの坂では、登、こいるのか下、こいるのか分からなくな。てしまう。時々、僕達を追い抜いていくトラック野郎の満纏飾の灯りが妙に嬉しい。峠のドライグインに着いたときは、もう10時を過ぎていたのだ。半分居眠りをしてながく食べたラーメンのことも今でも不思議と思いがす。

く50年夏 東北合宿 宮古にて

僕は今、実験室の暗闇の中でニキシー管のデジタル表示の推移を見つめながら卒論の最後の追い込み中だが、水も吸、た真綿のようにどろりと疲れた頭の中に時々フッと広がる風景がある。実験室の重苦しい雰囲気の中で、そそくさはあるいは黙々とパダルをこいでいた自分だ。た

り、あるいは峠の頂上か丁の素晴らしい展望に感激している自分の姿だ、たりする。そんな時だ。僕の自転車の虫が突然に目覚めて暴れ回るのは。もう一度あんな風景を眺めてみたいという気持ちが僕を自転車に駆り立てる原動力にな、てい、るの、だ、ら、う。峠を登、こ、れ、た、ら、い、つ、が、を、し、て、い、る、と、き、な、ど、は、金輪際自転車なんかの、る、も、の、か、と、思、た、事、も、一、度、な、さ、ず、し、か、し、ハ、ッ、と、覺、付、い、て、振、り、返、ら、て、見、た、ら、自、転、車、が、も、う、一、台、増、え、て、い、る、し、春、に、な、た、ら、ど、こ、へ、行、こ、う、か、な、ど、と、考、え、て、い、る、自、分、を、見、つ、け、た、り、す、る。な、ん、で、こ、う、も、物、好、ま、な、の、か、不、思、議、を、氣、が、し、て、い、る、今、日、こ、の、頃、で、す。

■ 編集後記

S.53. 1月23日

あ〜あ〜 もう明るくなっちゃった。きのう渋谷で飲んだ後、編集にとりかか、ただけど……

月日のたつのは早いもの、原稿のメ切は確か〜 ぼくの憶え違えじゃ、なけりゃ〜1月中だったと思うのですか。

要するに、そんなことどうでもいいのです。

こうして出てしまえばいいんです

尚、部誌編集に関して、旧書記-金谷健様、部長-古い木を登るのおじさんには多大な協力ありがとうございました。

また、文章の内容、誤字脱字などは全て個人個人の責任によるもので書記には責任はありません。

(書記 鈴木道夫)

Top and Low

S.52年東京工業大学サイクリング部部誌

Tokyo Institute of Technology Cycling Club = TITCC 発行

編集者及び協力者……鈴木道夫、小野賢治、金谷健、

古木登 その他。

発行日……S.53年 2月1日(水)

